広島市の文化財　第32集

広島市安佐南区祇園町所在

# 池の内遺跡発掘調査報告

1985. 3

広島市教育委員会

# はしがき

広島は，太田川河口の三角州を中心に発達したまちです。このため平地が少なく，都市の発展に伴って，周辺の丘陵地域が住宅地に造成されるなど，市街化がすすんでいます。

今回発掘した池の内遺跡が所在する丘陵の周辺は，早くから開発のすすんだ地域の一つであり，これまでに多くの遺跡の所在が確認されています。

このたぴ，宅地造成に伴って消滅することになり，記録保存のため，広島市教育委員会が発掘調査を行いました。その結果，広島市にとっては，貴重な出土品があり，また遺構も確認され，大きな成果をおさめることができました。

この報告書が，市民の方々の歴史学習や郷土理解のために役立てば幸いです。

おわりに，今回の調査にあたり，ご指導いただいた諸先生，およぴ，作業にあたっていただいた方々に厚くお礼申しあげます。

昭和60年3月

広島市教育長　藤　井　　尚

# 例　　言

１．本書は，広島市安佐南区祇園町長束における宅地造成工事に伴い，昭和59年5月7日から9月29日までの間実施した池の内遺跡の発掘調査報告である。
２．発掘調査は，アサ開発株式会社から委託を受けて，広島市教育委員会が実施した。
３．本書の執筆は，Ⅰ，Ⅲ－２，Ⅳを中村眞哉，Ⅱ，Ⅲ－１，Ⅴを若島一則が担当した。
４．出土遺物の実測・トレースは，桧垣栄次，幸田淳，遺構図面のトレースは橋本義和が行い，遺物写真は桧垣が担当した。
５．第32図掲載の馬鍬（11）及び鉄斧（15）の実測図は，広島県立埋蔵文化財センター
から提供を受けた。
６．本書掲載の航空写真はスタジオ・ユニに，遺物の科学分析等は保存科学研究会に委託した。
７．発掘調査によって出土した須恵器の胎土分析結果について，奈良教育大学の三辻利一教授から玉稿をいただいた。
８．本書掲載の赤外線写真は，はにわ会会員井手三千男氏から提供を受けた。
９．第１図は，建設省国土地理院発行の25，000分の1，祇園の地形図を複製したものである。

# 目　　次

Ⅰ　は じ め に ---------- 1
Ⅱ　位 置 と 環 境 ---------- 2
Ⅲ　遺 跡 の 概 要
　１．古墳時代の遺構と遺物 ---------- 4
　２．その他の遺構と遺物 ---------- 24
Ⅳ　池の内第２号古墳について ---------- 30
Ⅴ　ま　と　め ---------- 31

付編
　Ⅰ　池の内遺跡出土須恵器の胎土分析 ---------- 36
　Ⅱ　亀岡遺跡発掘調査報告 ---------- 38

# 挿　図　目　次


第１図　池の内遺跡の位置と周辺の主要遺跡 ---------- 40
第２図　池の内遺跡地形図及び遺構配置図 ---------- 折り込み
第３図　第１号古墳・第３号古墳測量図 ---------- 折り込み
第４図　第１号古墳（上）・第１号古墳－第３号古墳間（下）断面図 ---------- 45
第５図　第１号古墳内部主体実測図 ------ 45
第６図　第３号古墳Ａ主体実測図 --- 折り込み
第７図　第３号古墳Ｂ主体実測図 ---------- 46
第８図　第４号古墳測量図 ---------- 49
第９図　第４号古墳内部主体実測図 ------- 50
第10図　第５号古墳測量図 ---------- 51
第11図　第５号古墳内部主体実測図 ------52
第12図　第１号主体実測図 ----------53
第13図　第２号主体実測図 ----------54
第14図　第３号主体実測図 ----------55
第15図　第４号主体実測図 ---------- 56
第16図　第５号主体周辺遺構配置図 ------ 57
第17図　第５号主体実測図 ----------58
第18図　第５号主体実測図 ---------- 59
第19図　第７号主体（上），第８号主体（下）実測図 ---------- 60
第20図　第９号主体実測図 ---------- 61
第21図　第10号主体実測図 ---------- 62
第22図　竪穴式住居跡実測図 ---------- 63
第23図　第１号住居跡状遺構（上），第２号住居跡状遺構（下）実測図 ---------- 64
第24図　第１号，第２号土壙（上），第３号土壙（下）実測図 ---------- 65
第25図　第４号・第５号土壙（上），第６号土壙（下）実測図 ---------- 66
第26図　第７号土壙（上），第７号土壙（下）実測図 ---------- 67
第27図　第２号古墳地形測量図 ---------- 68
第28図　池の内遺跡出土須恵器実測図（1）　69
第29図　池の内遺跡出土須恵器及び土師器実測図 ---------- 70
第30図　池の内遺跡出土須恵器実測図（2）　71
第31図　池の内遺跡出土鉄剣及び鉄刀実測図 ---------- 71
第32図　池の内遺跡出土鉄製品及ぴ耳環実測図 ---------- 72
第33図　池の内遺跡出土玉類実測図 --------- 73
第34図　池の内遺跡出土弥生土器実測図 --- 74
第35図　池の内遺跡出土弥生土器及ぴ石斧実測図 ---------- 75
第36図　池の内遺跡出土銅鏡拓影 ---------- 76
第37図　亀岡遺跡遺構配置図 ---------- 77
第38図　亀岡遺跡箱式石棺（上），壷棺（下）実測図 ---------- 78
第39図　亀岡遺跡出土土器実測図 ---------- 79


# 表　目　次


第１表　第５号古墳出土鉄鏃計測表 ----------11
第２表　池の内遺跡出土須恵器観察表 ----------19
第３表　池の内遺跡出土玉類計測表 ----------22
第４表　池の内遺跡出土弥生土器観察表 ----------28
第５表　広島県内鏡片出土地名表 ----------34

# 図　版　目　次


図版１　池の内遺跡全景（西から，航空写真）
図版２　ａ．池の内遺跡西側調査区（北から，航空写真）
　　ｂ．池の内遺跡東側調査区（北東から，航空写真）
図版３　ａ．第１号古墳（東から）
　　ｂ．同上内部主体
図版４　ａ．第３号古墳（西から）
　　ｂ．同上Ａ主体
図版５　ａ．第３号古墳Ｂ主体
　　ｂ．第４号古墳（南西から）
図版６　ａ．第４号古墳内部主体
　　ｂ．同上遺物出土状態
図版７　ａ．第５号古墳（西から）
　　ｂ．同上内部主体
図版８　ａ．第１号主体
　　ｂ．第２号主体，第３号主体周辺（西から）
図版９　ａ．第２号主体
　　ｂ．同上（開棺後）
図版10　ａ．第３号主体
　　ｂ．第４号主体
図版11　ａ．第５号主体
　　ｂ．同上（完掘後）
図版12　ａ．第５号主体遺物出土状態
　　ｂ．同上滑石製臼玉出土状態
図版13　ａ．第６号主体
　　ｂ．第７号主体
図版14　ａ．第８号主体
　　ｂ．第９号主体
図版15　ａ．第10号主体
　　ｂ．第２号古墳全景（北東から，航空写真）
図版16　ａ．竪穴式住居跡（東から）
　　ｂ．第１号住居跡状遺構（南から）
図版17　ａ．第２号住居跡状遺構（北西から）
　　ｂ．第２号住居跡状遺構及び南側平担面（東から）
図版18　ａ．第１号（右），第２号（左）土壙
　　ｂ．第３号土壙
図版19　ａ．第４号（右），第５号（左）土壙
　　ｂ．第４号土壙土器出土状態
図版20　ａ．第６号土壙
　　ｂ．第７号土壙
図版21　ａ．第８号土壙
　　ｂ．銅鏡出土状態
図版22　池の内遺跡出土須恵器（1）
図版23　池の内遺跡出土須恵器（2）
図版24　池の内遺跡出土須恵器及び土師器
図版25　池の内遺跡出土鉄製品
図版26　池の内遺跡出土鉄製品及び耳環
図版27　池の内遺跡出土玉類
図版28　池の内遺跡出土弥生土器
図版29　池の内遺跡出土弥生土器及び石斧
図版30　ａ．池の内遺跡出土銅鏡
　　ｂ．同上（赤外線写真）
図版31　ａ．亀岡遺跡遠景（北から）
　　ｂ．亀岡遺跡近景（南から，調査後）
図版32　ａ．亀岡遺跡箱式石棺
　　ｂ．同上（開棺後）
図版33　ａ．亀岡遺跡壷棺
　　ｂ．亀岡遺跡出土土器

# Ⅰ　は　じ　め　に

広島市教育委員会では昭和56年３月，広島市安佐南区祇園町大字長束字神山の丘陵の造成計画を知り，分布調査を行った結果，埋蔵文化財の存在を確認した。さらに同年７月，広島県教育委員会が試掘調査を実施し，古墳群及び集落跡の存在を確認した。

以後，本遺跡の取扱いについて，広島市教育委員会と造成主であるアサ開発株式会社などど，第２号古墳の現状保存を含む遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果，とりあえず第２号古墳を除く部分については発掘調査もやむをえないとの結論に達した。このため，昭和59年５月から９月までの５か月間発掘調査を行った。

なお，６月14日から６月21日まで，池の内遺跡の発掘調査と並行して，亀岡遺跡の発掘調査を実施した。

調査の関係者は，下記のとおりである。

調査委託者　アサ開発株式会社
調査主体　　広島市教育委員会
調査担当係　広島市教育委員会社会教育部管理課文化財係
調査関係者　森脇昭之（社会教育部長）
上川孝明（管理課長）
木原　亮（　〃　課長補佐兼文化財係長）
桧垣栄次（　〃　文化財係主査）
幸田　淳（　〃　文化財係主事）
岡野幸夫（　〃　　〃　　〃　）
阿部　滋（　〃　　〃　　〃　）
橋本義和（　〃　　〃　　〃　）
吉本由紀（　〃　　〃　　嘱託）
調　査　者　中村眞哉（　〃　　〃　　主事，調査担当）
若島一則（　〃　　〃　　〃　　〃　）
奥田壮紀（　〃　　〃　　〃　）
調査補助員（順不同）
河野　悟，倉前敏磨，谷田美寿枝，山下初代，養祖時夫，養祖エミ，森田信枝，今田義人，古木茂信，山本克己，池田清人，志水　清，谷兼　保，石川　淳，若見勝司，吉岡文雄，浜内久市，瀬垣正義，住川　努，井手下強史，村越幸三，河合淳子，橋本礼子，鼓　智子，住川香代子

また，アサ開発株式会社，祇園公民館館長佐伯一幸氏をはじめ職員の方々，はにわ会会員井手三千男氏のほか多くの方々には，調査を円滑に進めるために多大なご配慮をいただいた。報告書作成にあたっては，奈良教育大学三辻利一教授には，須恵器の胎土分析をしていただき玉稿を得た。さらに，広島県立安西高等学校新谷武夫教諭から広範な教示を得たほか，広島大学文学部考古学研究室，奈良国立文化財研究所，広島県教育委員会文化課，広島県立埋蔵文化財センター，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター，神戸商船大学北野耕平教授，平安博物館貞森秀夫助手，広島県立安西高等学校加藤光臣教諭，広島市教育委員会学校教育部指導課上野琢司指導主事などから御教示を得た。ここに記して謝意を表わしたい。

# Ⅱ　位　置　と　環　境

池の内遺跡は，安佐南区祇園町大字長束字神山に所在する。山本川の沖積地の縁辺部分，祇園町の西に位置する景浦山（標高356ｍ）より東に派生する丘陵先端部に位置し，周辺の畑地からの比高20ｍ～45ｍの位置に営まれた遺跡である。眼下には，山本川・太田川が南流し，祇園町域はもとより，遠く広島湾東岸の山々，太田川対岸の戸坂，高陽町域をも眺望しうる良好な位置にある。

祇園町は，「和名類聚抄」にみえる佐伯郡伊福郷，桑原郷に比定されており，近年まで地形図や航空写真で条里制のなごりを残す方格状の地割が見られた地域である。(注1) また，この地域には前半期の古墳が数多く分布していることもあって，注目される地域と言えよう。

太田川下流域において，集落が多く確認されるようになるのは，弥生時代後期になってからである。この時期，集落は，小河川を臨む丘陵上に２～３戸の小単位で分布する傾向がみられるようである。これは，太田川が古くから氾濫をくりかえしており，当時その沖積平野は耕作地としては不安定な土地であったため，人々が小河川の流域に生活の場を求めた結果と考えられる。さて，池の内遺跡の所在する山本川流域及びその周辺の地域において，最も古くさかのぼれる遺跡は，弥生時代後期のものである。この時期の遺跡には，長う子遺跡(注2)，芳ヵ谷遺跡(注3)，大谷遺跡(注4)をはじめ，九郎杖遺跡(注5)，大町矢ヶ谷遺跡(注6)などがあげられよう。また，東山本寺山遺跡や長束修練院裏遺跡などで集落の存在が推定されている。これらの遺跡は，いずれも小河川を見おろす位置に造られており，本地域においても太田川の他の地域と同様な分布を示していると考えられる。

古墳時代の集落は，現在のところほとんど確認されていない。この時代になると，丘陵上からは集落が発見されておらず，これは，弥生時代に比して集落の立地条件及び可耕地の条件に大きな変化が生じたためと考えられる。(注7)

太田川下流域において，最も早い時期に造られた代表的な古墳は，４世紀代に比定される中小田１号古墳と神宮山１号古墳(注8)であろう。東岸の中小田古墳群は10基からなっており，その内の１号古墳は，長さ30ｍの前方後円墳の可能性が強く，内部主体から吾作銘三角縁四神四獣鏡や車輪石などが出土している。この三角縁神獣鏡は，畿内との関連を想定させるものであり注目される。西岸の神宮山古墳群は３基からなり，その内１号古墳は，３基の竪穴式石室を持つ円墳で，多くの玉類や内行花文鏡鏡片などが出土している。

５世紀代になると，古墳数が増大する傾向を見せ，小河川を臨む丘陵上に次々に古墳が造られるようになる。しかし，この傾向も後半期になると変化をみせ，太田川を若干北上した可部町域において後半期の横穴式石室を内部主体とする古墳が急激に増加するのとは逆に，太田川下流域においては増加する傾向はみられないようである。

山本川においても，これとほぼ同様な傾向がみられる。４世紀代と考えられる芳ヵ谷１号古墳(注9)に続いて，５世紀代には，三王原古墳(注10)，権地古墳(注11)，空長古墳群(注12)などが次々に造られている。三王原古墳は竪穴式石室を内部主体とすると考えられる古墳で，獣形鏡及び鉄鉾，馬具，甲冑片などの出土が伝えられており，５世紀中ごろのものと考えられる。権地古墳は，数多くの鉄器が出土しており，５世紀代と考えられている。空長古墳群は，円墳４基から構成されており，竪穴系横口式石室や箱式石棺を内部主体とする５世紀後半から６世紀初頭の古墳群である。この古墳群は，竪穴系横口式石室という市内では類例のない構造をとり，三輪玉，蛇行剣身，古式の須恵器などが出土していることから注目される。この他，詳細は不明であるが彷製三角縁神獣鏡の出土した文化女子短大グランド遺跡(注13)や円筒埴輪が出土した尾首古墳(注14)，未調査ではあるが前半期のものと考えられる浄円寺古墳群なども確認されている。これに対して，後半期の古墳としては，横穴式石室を内

部主体とする部谷山古墳, 上組古墳があげられるが, やはり前半期の古墳に比して増加する傾向はみられないようである。

このように, 山本川流域の古墳の分布は, 太田川下流域の他の地域と同様な傾向をみせていると言えよう。ただ，優れた遺物を持つ古墳が，ほぼ同時期に，近接した位置に分布していることが指摘できる。さらに，歴史時代に入ると, 奈良時代の瓦が出土した光見寺跡[注15]や石帯が出土した権地古墓[注16]の存在が確認されており，この地域が既述した文献に登場することや条里制の存在などと考えあわせた時, この地域は太田川下流域において注目される地域といえよう。

（注１） 広島市役所『新修広島市史』第一巻　1961
　　広島県『広島県史』原始古代　1980
（注２） 広島市教育委員会『広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告』1984
（注３） 同　　上
（注４） 同　　上
（注５） 広島市教育委員会『九郎杖遺跡権地遺跡発掘調査報告』1984
（注６） 矢ヶ谷遺跡発掘調査団『矢ヶ谷遺跡発掘調査報告』1984
（注７） 広島市教育委員会『中小田古墳群』1980
（注８） 広島市役所『新修広島市史』第一巻　1961
（注９） 注２と同じ
（注10） 中田昭「広島市祇園町三王原古墳について」『芸備』第１集所収　1973
（注11） 注５と同じ
（注12） 広島市教育委員会『空長古墳群発掘調査報告書』1978
（注13） 同　　上
（注14） 広島県教育委員会『尾首城跡発掘調査報告』1984
（注15） 注12と同じ
（注16） 注５と同じ

〈参考文献〉

広島県安佐郡祇園町『祇園町誌』1970
広島県『広島県史』考古編　1979

# Ⅲ　遺　跡　の　概　要

本遺跡は，標高356ｍの景浦山から北東に派生した低丘陵の尾根先端部に位置している。調査前の分布調査，試掘調査の結果から，４基の古墳の存在が推定されていた。しかし，今回の調査の結果，このうち１基は古墳でないことが判明しており，新たに検出されたものも含めて，古墳５基及び墳丘外から埋葬主体10基の存在を確認した。その他，弥生時代後期の竪穴式住居跡１基，住居跡状遺構２基，土壙８基を検出した。

なお，遺構の名称は，検出順によったが，今回の調査範囲外である第２号古墳については，すでに広く周知されているので，このままとした。

## １．古墳時代の遺構と遺物

(1) 第１号古墳

**外　観**（第３図，第４図）

第１号古墳は，本古墳群中の最高所，最西端，第２号古墳の西約60ｍの地点に位置する。本古墳は，後世の地形変更のため墳丘の約２分の１を削り取られていた。西側には，尾根線と直交するように掘られた幅60㎝，深さ30㎝前後の溝が見られた。周辺の土層観察の結果，墳丘は，周囲に溝脅めぐらし，地山を平らに整形した後，その上に盛土をほどこしたものと考えられる。残存部と断面観察の結果から，本古墳は，直径８ｍ程度と推察され，高さについては，削平をうけているため明らかにしがたいが，主体部の検出状況から現存高約１ｍをそれ程上回るものではないと推察される。

**主体部**（第５図）

主体部は，墳丘のほぼ中央に位置しており，主軸をＮ69°Ｅにとる。本主体部は，現状において，大小の石材を内法40㎝の幅で北・西・南の三方向にコの字状に配置したものである。その形状から，本来は東側にもなるように配置されていた。石材は，基本的には一段で構成されているが，北壁の中には三段に積まれているものもあり，石材の上面を合わせる配慮がなされているようである。掘り方は，盛土中に掘り込まれているため明確には検出しえなかった。

主体部の床面には，10cmx５㎝前後の石材が７個上面のレベルがほぼ等しくなるように配置してあり，東に向ってわずかではあるが高くなる傾向がみられる。また，これらの石材は，主軸に対して側壁側が若干高くなっている。これらの石材は，後述する赤色顔料やガラス製小玉の出土状態から，棺台と考えられる。

また，この棺台と考えられる石材上面に接して約10㎝の厚さで，ほぼ全域から赤色顔料が検出された。赤色顔料は，中央部及び西側隅から特に多量に検出されている。なお，北側壁の石材中東端のものに赤色顔料が付着していた。また，少量ではあるが，西側小口から約150㎝の地点まぞ赤色顔料が分布していることから，主体部は，内法で長さ150㎝，幅40㎝，深さ30㎝程度の主体部を想定できよう。

**遺　物**

主体部からは，鉄製品，ガラス製小玉が出土した。鉄製品は，鉄製カスガイ２，小札状鉄製品１である。なお，主体部内と考えられる範囲から須恵器片が出土したが，小片のため図示できなかった。

鉄製カスガイ（第32図13・14）

鉄製カスガイは，南北両側壁の中央付近の石材に近い位置で，床面の石材より５㎝程度浮いた状態で各１本ずつ出土した。

北側のもの（13）は，全長9.1㎝，幅0.9㎝，厚さ0.4㎝のもので，刃部は長い方が2.1㎝，短い方で1.2㎝を測る。南側のもの（14）は，刃部の一方を欠いており，現存長8.0㎝，幅0.8㎝，厚さ0.4cmを測り，残存している刃部は2.2㎝を測る。

これらのカスガイには，いづれも刃部を中心として木質が付着しており，木棺を固定するのに使用したものと考えられる。

小札状鉄製品（第32図29）

主体部中央付近から，長方形の板状の鉄製品が出土した。この鉄製品の長辺は3.7cm，短辺は一方が1.6㎝，他方が1.8㎝で，狭い側にかたよって直径0.2㎝の円孔があけられている。長辺の一方は，端部がわずかに屈曲している。形状的には甲冑の小札に類似する点もあるが，1点の出土であるため明確にはしがたい。

ガラス製小玉（第33図3～7，第2表3～169）

ガラス製小玉は，現存している主体部の中央付近で，床面の石材から2㎝～10cm浮いた位置から167点が出土した。出土範囲は，赤色顔料が多量に検出された範囲とほぼ一致する。

これらは，基本的には外径＞厚さの扁平な形態を呈している。その色調からみると，青緑色系，緑色系，青色系に分けられる。青緑色系のものは，不透明で，出土したガラス製小玉の大部分を占め，148点を数える。これらは大きさによって，さらに大小に分けられ，大形のものは外径4.7㎜～6.2㎜，厚さ2.8㎜～4.0㎜に52点（35%）が集中し，小形のものは外径3.0㎜～4.0㎜，厚さ1.6㎜～3.2㎜に62点（42%）が集中している。

緑色系のものは17個を数え，不透明で，緑色あるいは黄緑色を呈している。外径3.3㎜～4.7㎜，厚さ1.8㎜～4.0㎜，孔径1.1㎜～1.9㎜を測り，小形のものが多い。

青色系のものは2点あり，透明な淡青色，不透明な青色を呈し，いずれも小形である。

なお，個々の計測値は，計測表（第3表）のとおりである。

**小　結**

第1号古墳の主体部の構造は，墳丘盛土内に土壙を掘り，四壁に棺を固定するための石材を立て並べたものど考えられる。

内部からは，カスガイと棺台と考えられる石材が検出されており，木棺が納められていたと考えられる。主体部の内部及び周辺から蓋石と考えられる石材が検出されておらず，抜きとられた痕跡も見出しえないため，築造当時から蓋石は使用されていなかった可能性が高いと考えられる。ただ，石材の上面の高さを同一にする配慮がみられることから，木蓋の使用も考えられよう。かつ，カスガイが出土していることもあって，組合式の木棺の可能性が強い。また，木棺の規模は，長さ150㎝，幅35cm，深さ30cm程度の小形のものと推測される。このような主体部の構造は，本古墳群の他の例に較べて手厚く葬っているものといえよう。

本古墳の被葬者の頭位は，棺台の上面のレベルがわずかに東側が高く，玉類の分布もわずかに東側にかたよっていることから，東側にあったものと推定される。

本古墳から出土した遺物の中で，時期を推定する手がかりとなるものは，玉類と須恵器細片のみである。この須恵器細片を手がかりとすれば，調整技法及び形態的特徴は，比較的古式の様相を呈している。なお，切り合い関係から判断して，本古墳は北東に隣接する第3号古墳より後出するものと推定される。

(2) 第３号古墳

**外　観**（第３図，第４図）

第３号古墳は，第１号古墳の北東に隣接して築造されている。本古墳は，直径13ｍの円墳で，規模は，本古墳群中第２号古墳に次ぐものである。高さについては，後世の削平をうけており不明であるが，現在高は溝から約１ｍを測る。西側からは，幅0.5ｍ，深さ0.3ｍ前後の溝が約４ｍにわたって円弧状に検出されており，地山の検出状況などから南側にもそれが続いていたと推測される。このこと及び立地から，本古墳は，東に向う尾根平担部を溝で切断し，地山整形を行って，後に若干の盛土を施して形成したものと考えられる。また，Ａ主体部の北側から，ピット６個を検出した。これらは，形状から柱穴と考えられるが，規模は大小様々で一定しておらず，配置等からＡ主体に関係する可能性もあるが，他に類例もないことから性格は明確にしがたい。

**主体部**

本古墳からは，２基の主体部が検出された。

Ａ主体（第６図）

Ａ主体は，主軸をＮ14°Ｗにとり，墳丘中心部よりやや西寄りに位置する。墓壙は，長方形の二重土壙である。一次壙は，長さ415㎝，幅は北側で180㎝，南側で140㎝，深さ55㎝で，その中央部に長さ250㎝，幅は北側で50㎝，南側で60㎝，深さ17㎝の二次壙を掘り込んでいる。さらに，二次壙の両小口から楕円形の掘り込みを検出した。その規模は，北側のものが長径76㎝，短径58㎝，深さ20㎝を測り，南側のものが長径80㎝，短径60㎝，深さ35㎝を測る。また，二次壙内からは，北側小口側の一部を除いて赤色顔料が検出された。その分布範囲は，二次壙の北側小口から約20㎝のところから南側小口まで，長さ240㎝，幅は北側で39㎝，南側で30㎝を測る。赤色顔料の上面は，床面より北側で18㎝，南側で10㎝程度を測り，上面が濃く以後しだいにうすくなって地山面に達している。その分布状況から判断して，棺内に散布されたものと推測される。

二次壙両小口の掘り込み内からは，立てならべられた石材を検出した。北側のものは，25㎝x35㎝の大きな石材を中心にして，その両側に小角礫を配置しており，幅45㎝，高さ25㎝程度を測る。さらに，その両端に石材を１つずつ配置して「コ」の字状にしている。南側のものは，北側に石材より大きな石材を幅58㎝，高さ55㎝の範囲で積みかさねたものである。これらの石材は，いずれも小口内面が平らになるように配置されており，掘り込み底面から10㎝前後浮いた状態であった。また，南側の掘り込みからは，赤色顔料が流れ込んだ状態で検出されており，石材の内側に接して小口板が立てられていたことが考えられる。このことから，これらの石材及び掘り込みは，木棺の小口板を固定するためのものと考えられる。

Ｂ主体（第７図）

Ｂ主体は，須恵器と土師器を利用した合せ目の甕棺である。棺を納めた土壙は，Ａ主体の一次壙の南壁の上端を一部掘り込んで造られている。主軸はＮ84°Ｅに向き，Ａ主体の主軸とほぼ直交する。検出した土壙は，長さ106㎝，残存幅56㎝，深さ15㎝程度の長方形に近いもので，さらにその中央に径55㎝，深さ25㎝の円形土壙を掘り込んでいる。この円形の土壙内に須恵器の甕を横にした状態で埋置し，そのロ縁部に土師器の甕をかぶせて蓋としている。これらは，いずれも完形の甕が使用されており，土圧で部分的に潰れてはいたがほぼ原状を推測するこどができた。なお，内部から遺物は検出されなかった。

**遺　物**

土師器（第29図31）

棺蓋に使用されたもので，高さ26.6㎝，口径14.3㎝，最大径26.3㎝を測る甕である。体部は，球形で張り

が強く，底部はやや平底気味である。口縁部は，「く」の字状に外反し，やや内湾しながら外上方に立ち上がり，口縁端部に至って，わずかに外反気味に丸くおさめている。胎土は精選されているが，焼成が甘く軟かい。体部外面には，ハケ目調整が施され，内面はヘラ削りの後ナデ調整が行われている。

須恵器（第29図22）

この須恵器は棺身に使用されたもので，高さ52.4㎝，口径29.6㎝，最大径48.4㎝を測る中型の甕である。口縁部は基部より大きく外反して外上方に開き，端部付近で断面三角形の鈍い凸帯を１条めぐらし，口縁端部は丸味を持った平面を成す。口頸部は断面三角形の鈍い凸帯が二条巡らされており，その間に波状文が２条巡らされている。体部外面には格子目のタタキが浅く丁寧に施されており，内面のタタキは完全にすりけされている。

須恵器（第28図19）

Ａ主体上面，現存する土壙上縁部から約10㎝上の位置から，把手脚付短頸壷の破片が出土した。なお，破片の一部は，東南墳裾周辺からも出土している。推定高19.5㎝，口径9.3㎝，胴部最大径15㎝，脚端部径11㎝を測る。口縁部の立ち上がりは小さく，張りの強い肩を持つ。肩部直下からは大きな把手がつき，脚部は「八」字状に開く。また，文様は，肩部に斜格子文，胴部下半に二段の櫛歯状工具による列点文がみられ，脚部にも二段の同様な列点文がみられる。胴部には，四段の断面三角形の鈍い凸帯をもち，脚部にも同様な凸帯を三段持っている。また脚部には，棒状工具による逆台形の透し孔が，直列２段で四方向に見られ，そのほとんどは貫通していない。胎土は緻密で，ほとんど砂粒を含まず，焼成も堅緻である。これらの特徴は，他の遺跡の出土例に共通するものと言えよう。色調は外面暗茶褐色で鈍い光沢を持ち，脚部内面は黒く，肩部，底部内面，脚部などに暗緑色の自然釉が多くかかる。全体的に薄手であるが，特に胴部中央から口縁部にかけて薄く仕上げられており，内面には早い回転ナデの結果と思われる条痕が見られる。表面の仕上げも極めて入念である。

鉄製品（第32図27）

主体部外西側50㎝に位置するピット内から出土したこの鉄製品は，出土位置のレベルがピット上縁部に近く，周囲からの流れ込みと考えられる。形態から，平ノミまたは鉄鏃と考えられ，茎部は折損している。現存長６㎝，刃部と考えられる部分の端部は，幅1.1㎝，中央部で幅１㎝，厚さ0.5㎝を測る。

玉　類

第３号古墳Ａ主体からは，勾玉１，管玉１，ガラス製小玉75，滑石製臼玉67が出土した。勾玉と滑石製臼玉の大部分が二次壙の南側から，管玉とガラス製小玉の大部分が二次壙の北側から出土した。これらの玉類は，床面上５㎝～16㎝の高さにあり，赤色顔料検出範囲の上面付近に位置する。また，北側のガラス製小玉は，申央と東寄りの２ヵ所に集中している。

勾　玉（第33図１）

碧玉製で，片面が淡黄緑色，他面が濃緑色を呈する。全長2.1㎝，頭部の厚さ4.8㎝，孔径1.5㎝を測る扁平なものである。形態は「Ｃ」字形に近いが，内側がやや角ばり，「コ」の字形に移行する様相を呈する。穿孔は２方向から行ない，片面は２度行なっている。

管　玉（第33図170，第２表170）

ガラス製の管玉で，色調は不透明な青緑色を呈する。外径8.1㎜，長さ11.8㎜を測り，管玉としては，形態的に短い感じを与える。縁は角ばっており，気泡，気泡穴が多くみられる。

ガラス製小玉（第33図171～178，第２表171～245）

ガラス製小玉の形態は，ほとんどが外径＞厚さであり，基本的には扁平な形態を呈しているが，球に近い

形態を示すものもみられる。また，縁が角ばっているものと丸いものに二分される。

色調からみると，濃青色系のものと，青緑色系のものに分けられる。濃青色系のものが大部分を占め72個を数える。これらは，半透明な濃青色，淡暗紫色，不透明な紫青色，暗紫色に細分される。外径4.4㎜～9.3㎜，厚さ2.2㎜～8.2㎜，孔径1.3㎜～3.7㎜を測る比較的大形のものである。青緑色系のものは，３点あり，外径4.0㎜～8.3㎜，厚さ3.1㎜～5.3㎜，孔径2.1㎜～3.5㎜を測る。

なお，東寄りから出土したもの（212～223，245）は，外径６㎜未満の比較的小形のものが多数を占める。

滑石製臼玉（第33図246～250，第２表246～312）

滑石製臼玉の色調は，概ね緑灰色を呈する。外径3.2㎜～4.5㎜，厚さ1.1㎜～3.4㎜，孔径1.2㎜～1.9㎜を測る。体部の中央にわずかながら稜の認められるものが多く，穿孔は一方向から行ったものとみられる。

なお，玉類個々の計測値は計測表（第３表）のとおりである。

**小　結**

第３号古墳からは，主体部２基を検出した。

Ａ主体は，長さ415㎝という大きな土壙を掘りこんで木棺を納めたものである。主体部内からは，玉類が北と南に分かれて検出され，さらに，北側のものはａ・ｂの２群に分けられる。ａ群は，棺中央の北側に扁在し，ｂ群は東側壁付近にａ群から約45㎝離れて集中的に分布していた。これらは，あたかも被葬者に装着されていたかのような状態を示している。これに対し，南側のものは，北側のものとは玉の材質が異なり，さらに出土状態も集中した出方をしていない。

次に，Ａ主体の被葬者の頭位についてであるが，①北側の玉類が被葬者に装着ミきれていた可能性が高く，②赤色顔料の分布範囲も北側が広く，さらに，③一次壙の掘り方も北側が広い，というような事実を考えてみた時，南側の石材が高くしっかりしているとはいえ，これらの事実は頭位が北側にあったことを示唆しているようである。

また，Ａ主体の玉類の出土レベルの下限は，二次壙底面から，北側で10㎝，南側で５㎝上方となっており，棺床は二次壙底面ではなく，玉類の出土レペル下限付近にあったものと考えられる。前述したごとく，赤色顔料の検出レベルも，これと同様の傾向をみせている。このことから，本主体部の木棺は，二次壙底面に若干の埋土を施して床面の調整を行なった後に埋納したものと考えられ，その際，北側の床面を若干高くしているようである。また，玉類の出土状態をみると，若干Ｕ字状を呈しており，二次壙の底面もＵ字状を呈していることなどから，納められた木棺は，割竹形木棺と考えられよう。木棺の規模は，石材の配置などから考えて，長さ270㎝，径45㎝程度と推定できよう。

本古墳から出土した遺物の中で，遺構に伴なって時期を明確にしうるものとしては，Ｂ主体の棺に使用された須恵器があげられる。これは，内外面の調整や，口縁端部の処理などの形態や技法から，最古式に近い特徴がみられるものである。このことから，Ｂ主体は，５世紀中葉を前後する時期と考えられよう。また，Ａ主体の築造時期については，手がかりが少ない。ただ，Ｂ主体がＡ主体の墓壙掘り方を切り込んで築造されているものの，それもわずかであり，Ａ主体の存在を意識してＢ主体が造られた可能性が強いと考えられる。このことから，Ａ主体はＢ主体より前出するが，大きくは隔たらない時期のものと考えて大過ないであろう。

(3) 第４号古墳

**外　観**（第８図）

第４号古墳は，第３号古墳の南東約30ｍの地点に位置する。本古墳は，第２号古墳の溝に隣接して築造

されたもので，尾根の中軸線から北側にややずれた位置にある。調査範囲の関係で，墳丘の２分の１の調査を行った。

本古墳は，直径８ｍと推定される円墳で，高さについては，後世の削平のため不明である。墳丘の南側からは，幅1.1ｍ，深き0.25ｍの円弧状を呈する溝が検出された。現状から判断すると，墳丘の南側は自然地形との高低差が少なく，主に北側からの景観を意識して築造しているようである。また，主体部西側には，直径20cm，深さ15㎝～37㎝の３個のピットがほぼ90cmの間隔で直線上に並んでいた。このピットの性格は不明であるが，類似したものが第３号古墳主体部外北側からも検出されている。

（主体部）（第９図）

主体部は，墳丘中央部に位置し，主軸をＮ58°Ｅにとる。墓壙は，長さ295cm，幅120㎝，深さは最深部で50㎝の長方形の一次壙を掘り込んだ後，中央部に長さ275㎝，幅は東側で73㎝，西側で65cm，深さ10cmの二次壙を掘り込んだもので，二次壙をとり囲むように石材が検出された。東側小口の石材は，板状で床面を掘り込んで立てられており，他の石桝は一次壙床面に内面をそろえるように配置きれている。使用された石桝は，比較的大きなもので，東西両小口は１個，南北両壁は各７個で構成されている。ほとんどの石材が１段であるが，北側壁の一部に２段積みの部分も見られる。

本古墳の主体部は，石材の上面の凹凸が著しく，石又は木による蓋の存在が考えにくいことから，土壙を掘り込んで木棺を納め，周囲にそれを固定するため，石材を配置したものと考えられる。この石材の配置状態から，木棺の規模は，長さ240㎝，幅55㎝程度と推測されよう。本棺の種類は明確にし得ないが，２次壙の床面が丸味をおびており，割竹形の木棺を納めた可能性も考えられる。

**遺　物**

棺内から鉄剣１，刀子１，西壁の石材外側から鉄鎌１が出土した。また，南側溝から須恵器片若干が出土したが，少片のため図示し得なかった。

鉄　剣（第31図１）

鋒を西に向けて南側壁に添うように出土したこの鉄剣は全長53.9cmの完形品である。鋒周辺をのぞいた刃部には鎬がみられ断面は菱形を呈する。茎は関部より次第に細くなり，茎尻は丸く仕上げられている。目釘穴は２か所あり茎中央のものは直径３㎜，茎尻近くのものは直径3.5㎜程度を測る。また，刃部には木質が付着しており，木鞘に入れて埋納されたと考えられる。

各部計測値は次のとおりである。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 刃部 | 長さ | | 42.8cm | 茎部 | 長さ | | 11.1cm |
| | 幅 | 関部 | 3.3㎝ | | 幅 | 関部 | 2.5㎝ |
| | | 中央 | 2.7㎝ | | | 中央 | 1.7㎝ |
| | 厚さ | 関部 | 0.6㎝ | | 厚さ | 関部 | 0.4㎝ |
| | | 中央 | 0.6㎝ | | | 中央 | 0.4cm |

刀　子（第32図７）

刀子は，鉄剣に接して鋒を西に向けて出土した。全長16.1cm，刃部長11.5cmを測る大形品である。刃部最大幅は，関部にあって22㎝，鋒に近づくにつれてわずかに外反り気味になる。また，最大厚も関部にあり，0.5㎝程度である。茎部は，長さ4.6㎝，関部での幅1.3㎝を測り，丸くおさめられた茎尻に向かい次第に細くなる。

鉄　鎌（第32図５）

鉄鎌は北壁の西端から２番目の石材の外部から刃部を北東に向け，刃部先端を石材上面に接してほぼ水平

な状態で出土した。この状態から，石材上面まで土をっめた後に埋納されたものであると考えられる。土圧でやや湾曲しているがほぼ完形に近く，現存長16.9㎝を測る。基部の幅２㎝，厚さ0.3㎝，刃部中央の幅2.3㎝，厚さ0.5㎝程度で，基部より刃部先端に向けて次第に広くなり，先端を鋭く内湾させている。折りかえし部は欠損しているため明確でないが，鈍角に折り返すものであろう。基部には，木質が若干残存しており，柄につけたまま埋納したものと考えられる。

**小　結**

第４号古墳の主体部は，池の内遺跡の他の主体部と同様，土壙内に木棺を納め，その固定をはかるために周囲に石材を配置したものと思われる。ただ，使用されている石材が大きく，周囲を完全に囲んであり，かなり丁寧な構造のものと言えよう。また，木棺の周囲に石材が完全にまわるという意味では，規模は違うが第１号古墳に類似している。

頭位は，剣などの向きや，掘り方，石材の配置などから，東側にあったと推定される。

本古墳は，尾根の中心線から北にはずれた位置を占地し，第２号古墳の溝によって形成された舌状の地形を利用して造られたと考えられることから，即断は困難であるが，第２号古墳より後に造られたと考えられる。また，本古墳南側溝底から出土した須恵器片は，器形は明らかにしえないが，内外面のタタキ目を完全にすり消している点から，古式の特徴を示していると考えられる。この点を手がかりとすれば，本古墳の築造時期は概ね５世紀後半に比定できよう。

(4) 第５号古墳

**外　観**（第10図）

第５号古墳は，第２号古墳から東へ向う尾根の先端部近くに位置しており，その間約70ｍを測る。墳丘の大部分が，後世の地形変更を受けているため，主体部の石材と，西側から溝を検出したのみである。西側後背部を切断することによって築造されたと考えられる。溝は，尾根を切断するように，幅1.8ｍ，深さは最深部で0.35ｍ前後を測る。溝の最深部より主体部の床面が約15㎝低いことから，墳丘はそれ程高くはなかったと推定される。溝の位置を手がかりとし，検出した地山の状況から，本古墳は，直径約８ｍの円墳と想定される。

**主体部**（第11図）

主体部は，後世の地形変更のため失なわれた部分が大きいが，わずかに検出することができた。検出した掘り方の形状から，長さ200㎝，幅80㎝程度の長方形を呈すると推定され，主軸はＮ34°Ｅにとる。土壙内には，大小の石材11個が，幅35㎝～50㎝，長さ180㎝の範囲で，上面のレベルをほぼ均一になるように配されている。主体部は，土壙の規模，石材の検出状態から，長さ180㎝，幅50㎝程度のものが想定されよう。

**遺　物**

遺物は，主体部内のほぼ中央北東寄りから，鉄鎌１，鉄鏃７本以上，及び須恵器片１が出土した。また，掘り方外からも鉄鏃片が出土した。掘り方外の鉄鏃片は，腐植土中から出土したが，出土位置，状態からみて，本来主体部内にあった可能性が考えられる。

鉄　鎌（第32図６）

鉄鎌は，刃部を北に向け，その先端を床石の上面に接した状態で出土した。土圧のため中央部分で屈曲しているがほぼ完形品で，全長17㎝，刃部幅2.8㎝，基部幅2.9㎝，厚きは中央で0.4㎝を測る。刃部は先端が大きく湾曲し，折りかえしは直角に行われているが，立ち上り部分を欠損している。

鉄鏃（第32図18～25）

鉄鏃は，掘り方の内外から出土したが，いずれも片刃箭式の長頸鏃で，箙被を持つ同形式のものである。しかし，逆刺の有無で二種類に分けられる。いずれも鋒が外反りぎみであり，中には，茎に竹製と思われる矢柄の基部やそれを巻き締めた桜皮の残っているものもみられる。ほとんどが破片であり明確にしがたいが，刃部から考えて７本以上あったものと推定される。図示し得たものの計測値は，第１表の通りである。

第１表第５号古墳出土鉄鏃計測表

| 番号 | 全長(現長)(cm) | 刃部(cm) | | | 頸部(cm) | | | 茎部長(cm) | 逆刺 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 長さ | 幅 | 厚さ | 長さ | 幅 | 厚さ | | |
| 18 | 12.2 | 2.6 | 0.7 | 0.3 | 8.0 | 0.5 | 0.4 | (現)1.5 | 無 |
| 19 | 11.0 | 2.8 | 0.7 | 0.2 | 7.4 | 0.4 | 0.3 | (現)0.8 | 無 |
| 20 | 9.9 | 2.9 | 0.7 | 0.3 | 6.6 | 0.6 | 0.3 | (現)0.4 | 有 |
| 21 | 4.0 | 2.4 | 0.6 | 0.2 | (現)1.6 | 0.6 | 0.2 | — | 無 |
| 22 | 4.5 | 3.4 | 0.7 | 0.3 | (現)1.1 | 0.5 | 0.3 | — | 有 |
| 23 | 8.2 | — | — | — | (現)5.6 | 0.5 | 0.4 | 2.6 | 不明 |
| 24 | 4.9 | — | — | — | (現)2.2 | 0.6 | 0.4 | 2.7 | 不明 |
| 25 | 6.6 | — | — | — | (現)4.5 | 0.5 | 0.3 | 2.1 | 不明 |

**小　結**

本古墳は，大部分が削平されていたためそ詳細は不明である。ただ残存部から見て，土壙掘り方壁面と床石の間に，北を除いてそれぞれ15㎝～20㎝の空間があり，何らかの施設の存在を示唆するものの，その内容については不明である。

遺物から、見ると，鉄鎌，鉄鏃，須恵器片などが検出されている。この内，須恵器片は，高坏脚部片であり，それも形態からみて，低脚に属すると考えられる点から，比較的古式の特徴を備えており，他の３基の古墳と大きな隔たりはないと推定される。

(5) 墳丘外の埋葬主体

**第１号主体**（第12図）

第１号主体は，第１号古墳の西約３mの位置にあり，主軸をN49°Eにとる甕棺である。本主体は，縦107㎝，横47㎝，深さ22㎝を測る長方形の土壙内に，須恵器２個体を棺として埋置したものである。墓壙の掘り方は，南西側でやや不整形となっており，棺を納める時に調整したものと考えられる。土壙は棺身の上部が破壊をうけているところから推定して，土壙の掘り方も削平されていると考えられ，現状では全体の３分の１程度を残すのみであった。

使用された須恵器は，２個体とも最大径50㎝前後の中形甕で，南西のものが薄手，北東のものが厚手である。これらの２個体の出土状態をみると，北東の甕の壙底に接する側の肩部がまったく欠失していることから，肩部より上を打ち欠いて蓋として使用している可能性が高い。なお，北東の甕の口縁部及び肩部の破片の一部も出土しており，この場合接合部にあてられていたものと考えられよう。

また，土壙内南西隅から縦7.5㎝，横15.6㎝，厚さ4.5㎝の石材が須恵器外面に接して検出された。この部分は床面も高くなっており，棺蓋を固定するために置かれたものと考えられる。

時期は，棺に使用された須恵器から考えて５世紀後半と考えられる。

遺物としては，ガラス製小玉81個，ガラス製管玉１個が，周辺部を除く棺内全域，床面から10㎝の高さより下の部分で出土した。また，棺外掘り方内からも出土している。

**第２号主体**（第13図）

第２号主体は，第３号古墳南西の墳裾に隣接する箱式石棺である。その位置関係から，墓壙は第３号古墳の墳丘裾部と重複していると推定されよう。検出した墓壙の掘り方は，現存部で長さ140㎝，幅は72㎝～106㎝とやや広く，深さは西側で最高16㎝を測る。石棺の主軸は，Ｎ70°Ｗを指し，規模は，内法で長さ102㎝，幅は東側で34㎝，西側で26㎝，深さ27㎝を測るやや小形のものである。石棺の四壁は，８枚の板石からなり，小口に各１枚，側壁に各３枚も配している。石材は小形の北壁西端のものを除いて，横方向に使用している。なお，南壁は，中央の石材上に小形の板石を２枚置き，上面の高さを調整している。蓋石は，４枚の板石からなり，石材のすき間をうめるように大小の板石や小角礫を置いている。

石棺内の東側小口寄りに，25㎝×30㎝ほどの扁平な石材が置かれており，枕石と推定される。

本主体は，その規模から小児用と推定され，頭位は，枕石の位置から東寄りと考えられる。

なお，棺内から遺物は出土しなかった。

**第３号主体**（第14図）

第３号主体は，箱式石棺の南に隣接して検出された。これは，不整な長方形のプランを呈する土壙で，規模は，現存部で長さ165㎝，幅50㎝～63㎝，深さは最高12㎝を測る。また，主軸はＮ７°Ｅとほぼ南北を指す。土壙内の北寄りと南寄りに，20㎝x30㎝ほどの扁平な石材が２個置かれている。その位置関係及び石材の上面の高さが一致することから，この石材は棺台に使用したものと考えられる。

また，土壙の南北の小口付近から石材が検出された。南側は５枚の板石が「コ」の字状に配されている。北口は，小口に１枚の板石を置き，その西側に角礫１が置かれてい為北側の板石が現存する掘り方のやや外側にあることから，土壙を掘った後，さらに若干の掘りこみを行なったことが推定される。その位置関係から，これらの石材は，木棺の小口を固定するために置かれたものと考えられる。これらのことから，木棺の規模は，長さ150㎝，幅30㎝程度と推定される。

遺物は，北側の棺台の南，棺台上面よりもやや高い位置から管玉７点，管玉周辺の土中からガラス製小玉２点が出土している。このことから，頭位は北寄りと考えられる。

また，本主体の東側から，円弧状を呈するような状態で石列が検出ざれた。これらは，本主体部の中心から半径約２ｍでとり囲むように並んでいる。このような形状からみて，本主体部に伴う可能性もあるが，検出範囲が東側に偏しているため明言はしがたい。（第３図参照）

**第４号主体**（第15図）

第４号主体は，第３号古墳の南東墳裾から約2.5ｍの地点にある。これは，長方形のプランを呈する土壙で，主軸はＮ58°Ｅを指す。規模は，長さ248㎝，幅79㎝～88㎝，深き15㎝～39㎝を測る。底部は，東西両小口部分で一段高くなり，そこには各２個の石材が配されている。石材は，20㎝×30㎝大のものを小口の中央に置き，東小口では南側に，西小口では北側に，やや小形のものを置いている。その配置の状況から，これらの石材は，木棺小口を固定するために置かれたものと推定される。また，土壙の底部は，西小口付近で北側に広がっている。

土壙内の中央西寄りから，径35㎝程度の円形に近い範囲で約２㎝の厚きを持つ赤色顔料が検出された。これは，底面から７㎝ほどの高さでほぼ水平に残存していた。ごの赤色顔料の検出された高さと，両小口の石材を置いた部分の地山の高さが一致することから，この位置が棺床にあたると推定される。また，赤色顔料の検出状況から，頭位は西寄りと考えられる。

最後に，本主体に埋置きれた木棺についてみると，①赤色顔料の検出状況から，木棺の底部は平担であると考えられる。②東小口は南側，西小口は北側と対角に木棺を固定するための石材を配置している。③土壙の底部が西小口付近で北側に広がっている。このことから，木棺は，小口板と側板を　　状に組み合わせた可能性が強い。このことから木棺の規模は，長さ195㎝，幅35㎝程度と推定される。

なお，本土壙墓に伴うと考えられる遺物は出土しなかった。

**第５号主体**（第16図，第17図）

第５号主体は，第２号古墳の東３ｍのところに位置している。第２号古墳の裾から東に向う斜面を10ｍ×８ｍの範囲で平担に加工し，そこに土壙を掘り込んだものである。墓壙は，長方形の二重土壙で，主軸をＮ４°Ｅにとる。一次壙は，長き305㎝，幅は北側で125㎝，南側で110㎝，深さは最深部で30㎝を測り，その中央に長さ285㎝，幅44㎝，深さ12㎝の二次壙を掘り込んでいる。両小口にあたる部分には石材が配置されていた。北側のものは，大小２つの石材を壁状に並べたもので，幅59㎝，二次壙底面からの高さ40㎝を測る。南側のものは，大小５個の石材を「コ」の字状に並べたもので，この部分は内法で長さ35㎝前後，幅38㎝，二次壙底面からの高さ36㎝を測る。この石材の配置状況から本土壙には木棺が埋置されたものと考えられる。これらの石材は，いずれも二次壙底面からほぼ15㎝浮いており，一次壙底面の高さにほぼ一致している。このことから，まず二次壙内に木棺を埋置し，一次壙底面まで土を埋めもどし，その後に木棺の周囲に石材を配置して固定をはかったものと考えられる。

また，一次壙底面の長辺からピットが８か所検出されたが，性格については明確にしがたい。

本主体部より出土した遺物は，鉄刀１，刀子１，鉄製鋤（鍬）先１，鉄斧２，平ノミ１，鉄鎌１，鉄片２，耳環１及び滑石製臼玉216個である。鉄刀及び刀子は，鋒を南に向け，土壙中央部東壁にそって出土した。鋤（鍬）先は，土壙東北端から出土しており，その付近からは，鉄斧（第32図16）と平ノミが木の根にからまった状態で出土している。土壙西北端からは，鉄斧（第32図17）と鉄鎌が刃先を北に向けて一部重なって出土しており，さらに鉄鎌の上からは紐通ししたと推定される状態で置かれた滑石製の玉類が，２㎝x８㎝の範囲に出土している。また，土壙北側中央部より耳環１も出土している。なお，この他に土壙北東端から鉄鏃の残欠と考えられる鉄片２も出土している。

頭位はこれらの遺物の出土状況から，北側にあったものと考えられる。

**第６号主体**（第18図）

第６号主体は，第５号主体の北東約５ｍの位置にあり，第５号主体と同様に，第２号古墳墳裾東側斜面を平担に加工して，そこに土壙を掘りこんだものである。この土壙は，後世の地形変更により中央部がやや変形しているが，ほぼ長方形のプランを呈し，主軸をＮ16°Ｗにとる。土壙の規模は，長さ300㎝，幅は北端で69㎝，南端で58㎝，最大幅90㎝，深き20㎝～51㎝を測り，北側に開く傾向をみせる。

土壙の北側と南側から，壁面下端に沿って溝が検出された。北側のものは，幅10㎝～25㎝，深さ２㎝～３㎝を測り，東壁，北壁，西壁の下端に沿って「コ」の字状に検出された。また，南側のものは，西壁に沿って南端から90㎝の範囲で検出され，幅70㎝前後，深さ約３㎝を測り，北側に比べて明瞭に検出されている。このような溝の検出状況から考えて，本主体は，組合式の木棺を埋置した可能性が考えられ，その場合，溝の形状から，小口板を側板ではさんだ木棺を使用しているものと考えられる。また，土壙の南側では底面が低くなり，その中央がくぼんでいる。このことから，木棺を納める前に，土盛りによる底面の整形が行われたことが想定される。土壙の中央から，径11㎝×16㎝，深さ19㎝の長円形のピットが検出されたが，その性格は不明である。被葬者の頭位は，土壙の形態から北寄りと考えられる。

なお，遺物としては、埋土中から鉄片が出土したが，小片のためその性格は不明である。

**第７号主体**（第19図）

第５号主体の北東約７ｍの地点，尾根の北側斜面から大小の石材がまとまって出土した。これらは，その検出状況から，６枚の板石を東西に並べ，その上面及び縁辺の石材間の隙間に角礫を置いたものと考えられる。石材は中央の３枚が南に傾いているが，本来は水平に並べられていたと推定される。このことから，６枚の石材は土壙の蓋に使用された可能性がある。また，この石材の下方，地山直上から，最大のもので12㎝×26㎝を測る小形の石材が３個東西にならんで検出されている。さらに上方の石材の上面からは，鋒を西に向けた状態で鉄鎌１本が検出されている。以上のことから，前述の石材は埋葬主体に使用されていたものと考えられ，上方の石材が蓋石，下方の石材が棺台である可能性が高い。頭位は，鉄鏃の向きから東寄りと考えられよう。

**第８号主体**（第19図）

第８号主体は，第５号主体の南東約７ｍにあり，東へのぴる尾根の急斜面に土壙を掘りこんでいる。この土壙の西１ｍ～２ｍの地点で地山が１ｍ～1.5ｍ程度急に落ちこんでいる。また，土壙の掘り方が地山に達していないことから，この土壙は，急斜面を「Ｌ」字状に削り出して平担面をつくり，その盛土部分に設けられたと考えられよう。

土壙の掘り方は，西側のごく一部しか検出されなかったが，南北の小口に配置された石材から，規模は，長さ185㎝，幅70㎝程度と推定される。また，主軸はＮ24°Ｅを指す。

南北の小口付近に配置された石材は20㎝～30㎝大のもので，南側は小口に３個，北側には７個の石材が小口から側壁にかけて「コ」の字状に配置されている。このことから，内部に木棺を埋置したと考えられ，これらの石材は，その位置関係から，木棺を固定するために置かれたものと考えられる。したがって木棺の規模は，長さ115㎝，幅40㎝程度と推定される。頭位は，石材の配置状況から，北側が比較的ていねいであり，北寄りと考えられる。

なお，遺物は，土壙のほぼ中央から，床面上25㎝の高さで鉄片が検出されたが，小片のため性格は不明である。

**第９号主体**（第20図）

第９号主体は，第８号主体の東１ｍ，床面での比高60㎝を測る。本主体は，南東に下る急斜面を削り込んで平担面を造り出し，その盛土中に土壙を掘り込んだものと考えられる。土壙は，主軸をＮ8°Ｅにとる。斜面のため土砂の流出が著しく，盛土内に掘りこまれていることもあって，掘り方は明瞭に検出しえなかった。ただ，北側は比較的残存状態がよく，掘り方の一部と「コ」の字状の石材の配置が検出きれた。残存する掘り方は，「Ｌ」字状を呈し，「コ」の字状の石材の北側及ぴ西側で検出され，規模は長さ55㎝，幅82㎝を測る。石材は，内法で幅47㎝，長さ70㎝，高さ25㎝程度を測る。これらの石材は，木棺を固定するためのものと考えられよう。また，西側の石材の南端から，さらに85㎝南の位置で石材１個を検出した。この石材は，西側壁の延長線上にあり，南側にも同様な石材の配置があったことが考えられる。また，床面は南に向けて傾斜しており，この石材あたりでは北小口に対して15㎝程度低くなっている。以上のことから，土壙は，長さ215㎝以上，幅90㎝以上，深さ25㎝以上のもので，内部に長さ190㎝以上，幅50㎝程度の木棺を納めたものと考えられる。木棺は，北側の石材配置の状態からみて，小口板で側板をはさむタィプのものの可能性がある。遺物としては，須恵器とガラス製小玉がある。須恵器は，蓋坏３組で，南側石材の東約25㎝の地点から出土している。これらは，蓋と身を合わせた形でほぼ水平に並んでおり，床面とのレベルもぽぼ一致することから，原位置を保っており本土壙に伴う，と考えられる。この場合，これらの須恵器は，主体部掘り方内に埋納したものと考えられよう。なお，３組の蓋坏のうち，南東の１組は，蓋と身が逆転した状態であった。ガ

ラス製小玉は，北側の棺内にあたる部分の床面直上から18個が出土している。

頭位は，床面の傾斜やガラス製小玉の出土位置から，北側と考えられる。

時期は，南側から出土した３組の蓋坏からみて，５世紀末から６世紀初頭と考えられる。

**第10号主**体（第21図）

第10号主体は，第５号主体北東約９ｍの位置にある。緩斜面を３ｍ×４ｍの範囲で削平し，平担面を造って土壙を掘り込んだものである。土壙は二重土壙としており，主軸をＮ５°Ｗにとる。一次壙は，長方形のプランを呈し長さ215㎝，幅65㎝，深さは最深部で35㎝を測り，二次壙は，その中央部やや北寄りに，長さ135㎝，幅30㎝前後，深さ4㎝×10㎝を測る。土壙内には，一次壙壁面にそって四壁に石材が配置してあった。東西両側壁の石材は，20㎝×30㎝程度のもので，上面をそろえ，内面を平らにしてほぼ30㎝間隔で配置している。この石材の検出状況から，石棺であったとは考えにくく，木棺を固定するための石材と考えられよう。また，一次壙壁面に凹凸が多いことから，石材をつめる際，その大きさにあわせて壁面を調整したものと考えられよう。

土壙南側では，小口部分の石材から30㎝のところで二次壙が終っており，その上端部にそって石材がならべられていた。この部分から南側小口の石材まで，両壁間の幅も若干せまくなり，石材も丁寧に配置されている。このような状況から見て，納められた木棺は，二次壙南側上端部の石材までのものと考えられる。この場合長さ137㎝程度の小形のものである可能性が高い。また，南側小口部分からは，南壁に接して板状の一石材が検出されており，これが二次壙南側上縁の石材上に立てられていた可能性もある。この場合，南側小口部分には，副室状の空間が想定されよう。なお，北側小口部分の石材は，一次壙底面より65㎝の高さまで積みあげられており，本土壙の掘り方が，さらに深かった可能性がある。

頭位は，石材の配置などからみて，北側にあったと考えられよう。

遺物は，鉄片４が出土したのみである。その内３点は，1.5㎝×1.5㎝程度の鉄片で，東西両壁の石材にはりつくようにして，底面から15㎝前後浮いて出土した。他の一片は，3㎝×2㎝の板状のもので，土壙中央部底面近くから出土した。いずれも小片のため，性格は明確にできない。

**遺　物**

墳丘外の埋葬主体より出土した遺物には，須恵器，鉄器，玉類がある。

須恵器（第29図20・21，第30図25～30）

須恵器は，第１号主体で棺に使用された甕２，第８号主体内より出土した蓋坏３組である。

20，21は中型の甕で，合わせ肇状に使用したものである。

21は，薄手のもので，高さ44.5㎝，口径17.4㎝，最大径46.6㎝を測る。口縁部は，外上方に強く外反する短いもので，端部は鋭い。体部は張りの強い球形を呈し，タタキ目は内外面とも完全にスリ消されている。

20は，厚手のもので，高さ49.2㎝，口径23㎝，最大径44㎝を測る。口縁部は外上方にゆるく外湾しており，端部は浅い凹面をなし，直下に鈍い凸帯が一条巡る。体部は，やや肩のはった球形をしており，外面に格子様，内面には同心円タタキが施されている。

25～30は３組の蓋坏であり，焼成に若干の差がみられるものの，調整，胎土共に概ね共通した特徴を持っている。蓋，身ともやや丸味を持ち，稜は短く鋭さを失い，口縁端部はにぶい段を有している。また，天井部，底部とも２分の１前後のヘラ削りがみられる。比較的小形の蓋坏と言えよう。

鉄製品及び耳輪

鉄製品は，第３号主体から鉄鏃１が，他は全て第５号主体から鉄刀１，刀子１，鉄斧２，鋤（鍬）先１，平ノミ１，鉄鎌１，鉄片２が出土している。また，第５号主体から耳輪も出土している。

鉄　鏃（第32図26）

これは，有茎の柳葉式で腸挟をもつ。現存長9.2㎝，刃部の長さ2.2㎝，幅1.1㎝，厚さ0.2㎝を測る。頸部は，幅0.6㎝，厚さ0.4㎝を測り，長さは7㎝の部分で欠失しているが，箆被をもつ可能性もある。

鉄　刀（第31図2）

現存長78.1㎝を測る内反り気味のもので，鋒を一部欠損している。関部は，ほぼ直角に切られており，茎には直径0.5㎝の目釘穴2が穿たれ，茎尻は細くつきだしている。茎及び刃部の一部に木質が付着している。

各部の計測値は，次のとおりである。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 刃部 | 長さ | | 60.7㎝ | 茎部 | 長さ | | 17.4㎝ |
| | 幅 | 関部 | 2.7㎝ | | 幅 | 関部 | 2.0㎝ |
| | | 中央 | 3.1㎝ | | | 中央 | 2.0㎝ |
| | 背の厚さ | 関部 | 0.7㎝ | | 背の厚さ | 関部 | 0.7㎝ |
| | | 中央 | 0.7㎝ | | | 中央 | 0.7㎝ |

刀　子（第32図9）

全長9.3㎝を測る完形品で，刃部はやや外反り気味である。刃部長6.9㎝，最大幅を関部に持ち1.3㎝を測る。関部は鈍角に切られており，茎部は長さ2.4㎝，幅0.9㎝を測る。茎尻は丸くおさめられている。厚さは，鋒から茎尻に向かって徐々に増加し，刃部中央で0.2㎝，茎中央で0.4㎝を測る。

鋤（鍬）先（第32図12）

全長11.3㎝，両端幅12.5㎝を測り，形状は，U字形を呈する。端部から5㎝のところで段をなし，半球形の刃部に続く。刃部は，中央で幅2.5㎝，厚さ0.5㎝，刃部断面はY字状を呈し，袋部深さは0.9㎝を測る。

平ノミ（第32図10）

全長20.5㎝，刃部幅1.7㎝，茎部の長さ4.2㎝，幅は関部で0.9㎝，厚さ0.8㎝を測る。刃部は，わずかに「ハ」の字状に開き，関部まで徐々に厚さを増していく。茎部では幅はせまくなり，茎尻をまるくおさめている。

鉄　斧（第32図16・17）

16は，北東端から平ノミと共に木の根にからまって出土した。この鉄斧は，全長11㎝，袋部幅3.4㎝，刃部幅8.7㎝を測る。大きく湾曲した刃部端から3.5㎝のところで明瞭な肩がつき，その間は若干内湾している。袋部は，内法2.8㎝×2.1㎝を測り丸味を持った長方形を呈している。

17は，全長11.3㎝，刃部の幅4.5㎝，袋部の幅3.1㎝を測る。袋部は，内法2.6㎝×2.0㎝の丸味を持った長方形を呈している。

鉄　鎌（第32図4）

長さ17.5㎝の完形品で，基部の長さ2.3㎝，幅3.4㎝，厚さ0.4㎝を測る。基部と刃部の間に段を成し，刃部の長さ15.2㎝，最大幅2.8㎝，厚さ0.3㎝のもので，先端は，わずかに内湾する。立ち上りは1.1㎝を測り，刃部に対して直角に折りかえしている。木質の付着は見られない。

耳　環（第32図30）

耳環は，断面径0.3㎝の円形の鉄棒を環状に曲げ，わずかに隙間をもたせたもので，外環径は2.2㎝を測る。鉄芯銅張りであるが，箔の剥落及び鉄芯の銹化が著しい。現状では，緑白色を呈している。

鉄　片（第32図28）

長頸鏃の頸部と考えられるもので，現存長5.8㎝，中央部で幅0.5㎝，厚さ0.5㎝で片側が若干扁平となる。なお，他の一片も長頸鏃の破片と考えられるが，小片のため図示できなかった。

玉　類

玉類は，管玉が第１号主体から１点，第３号主体から７点の計８点，ガラス製小玉が第１号主体から81点，第３号主体から２点，第９号主体から18点の計101点，滑石製臼玉が第５号主体から216点出土した。

管　玉（第33図395～401，第２表313，395～401）

313は，第１号主体出土の小形のガラス製管玉で不透明な緑青色を呈する。

395～401は，第３号主体出土のもので，外径6.2㎜～8.2㎝，長さ18.8㎜～23.9㎜を測る。これらは，淡青緑色を呈する滑石製のもの（395～399）と濃緑色を呈する碧玉製のもの（400～401）に分かれる。穿孔は，碧玉製のものは一方向から，滑石製のものは二方向から行われている。

なお，399の孔内には，材質は明らかではないが，繊維状のものが残存している。

ガラス製小玉（，第33図314～318，第２表314～394，402，403，595～612）

ガラス製小玉は，基本的には外径＞厚さの扁平な形態を呈する。

314～394は，第１号主体出土のもので色調から，濃青色系と緑色系に分かれる。濃青色系は56個を数え，半透明な濃青色と不透明な紫青色に細分される。これらは，外径3.0㎜～4.3㎜，厚さ1.7㎜～2.8㎜の範囲にほとんどが集中している。緑色系は，25個を数え，半透明な濃青緑色，不透明な青緑色，緑色，濃緑色，黄緑色に細分される。大ききは，径2.8㎜～4.3㎜，厚さ1.7㎜～3.5㎜，孔径0.9㎜～1.5㎜を測り，濃青色系のものと同様である。

402，403は，第３号主体出土のもので，402は，半透明な濃青色のもので，縁が角ばっている。403は，不透明な緑色を呈する。

595～612は，第９号主体出土のもので，半透明な濃青色，不透明な紫青色，緑紫青色，黄緑色を呈する。大きさは，外径2.2㎜～3.7㎜，厚さ1.1㎜～2.7㎜，孔径0.6㎜～1.4㎜を測る。

滑石製臼玉（第33図404～406，第２表404～594）

第２号主体から出土したもので，216点を数えるが，そのうち25点は，鉄さぴの付着が著しく計測できなかった。

色調は，概ね，緑灰色，濃緑色を呈する。大きさは，外径3.4㎜～4.0㎜，厚さ1.0㎜～2.9㎜，孔径1.2㎜～1.7㎜を測る。体部の中央にわずかながら稜の認められるものが多く，穿孔は一方向から行ったものとみられる。

なお，玉類の個々の計測値は計測表（第３表）のとおりである。

(6) その他の遺物

古墳時代の遺物としては，その他に須恵器，刀子及び玉類が出土している。なお，遺構に伴わない玉類については，その時期を明確にしがたいが，本古墳群中から多量の玉類が出土していること及ぴ勾玉の形態などから，古墳時代のものとして，ここで述べることとしたい。

須恵器（第28図１～18，第30図23・24）

須恵器は，古墳の周囲を中心に調査区のほぼ全域から出土している。多量に出土した地点として，第１号古墳東側及ぴ第３号古墳南西，第２号古墳墳裾東側，第２号古墳・第５号古墳間などがあげられる。器種としては，蓋坏が多数を占め，他に高坏，壷，甕などがある。

蓋坏は，若干天井部が丸味を持ち，稜が鈍く，口径の小さなものが大部分である。13は第２号古墳墳裾東側から出土したもので，短頸壷に類似した形態をしている。底部外面には，カキ目様の浅い条痕がみられ，内面には指による調整痕が残る。全体に入念な造りで，古式の様相を呈している。また，第２号古墳・第５

号古墳間から出土した12は口径の大型化する時期のもので，他の地点のものより若干新しくなるようで凌高琢は，すべて第１号古墳及び第３号古墳周辺から出土したもので，低脚の比較的古式のものである。

壷18は，第２号古墳東側墳裾直近から出土しており，出土状態から見て，第２号古墳に伴う可能性が高いと考えられる。口縁部は外上方に大きく開き，それに球形の体部がつく。頸部と肩部に波状文が巡り，胴部下半にはカキ目様の浅い条痕が認められる。底部はややとがりぎみではりつけ痕を明瞭に残し，外面は静止ヘラけずりの後にナデ調整，内面は指あるいは，棒状工具でつきかためられているようである。焼成，胎土とも良好，仕上げも入念で古式の様相を呈している。胎土分析の結果からは，朝鮮産の可能性も指摘されている。

甕の破片は，図示していないが大半が内面にスリケシ調整の施こされたもので，外面は格子タタキ，平タタキ，カキ目，スリケシなど様々である。全体的に比較的古式な特徴を備えたものが多いようである。また，小片のため図示するにはいたらなかったが，焼成，胎土ともきわめて良好で，表面にこまかい波状文の施された破片が数片出土しており注目される。

時期的には，５世紀末から６世紀初頭のものが大半を占め，その前後のものが若干含まれているようである。図示した土器の個別の詳細は観察表（第２表）に示した。

刀　子（第32図８）

刀子は，第５号墳東側斜面から出土している。出土位置からみて，第５号古墳からの流れこみの可能性も考えられる。

刀子は，中央で２つに折損しており，復元長12㎝を測る。刃部（復元）長８㎝，最大幅は刃部中央付近にあり1.7㎝，背の厚さ0.3㎝で，若干外反り気味であ.る。関部は直角に切られ，長さ４㎝の茎がそれに続く。茎の最大幅は関部にあり1.3㎝，厚さ0.3㎝で茎尻に向ってしだいに細くなり，端部を丸くおさめる。茎部から関部にかけて木質が付着しており，木柄が付いていたと考えられる。

玉　類

第３号主体の西約５ｍの地点から管玉４点，第４号土壙及び第５号土壙の南側崖面から勾玉１点，管玉１点，ガラス製小玉２点，滑石製臼玉１点，竪穴式住居跡北側の斜面にかかる地点からガラス製小玉１点が出土した。

勾　玉（第33図２）

碧玉製の勾玉で濃緑色を呈する。大きさは全長2.0㎝，頭部の厚さ0.6㎝，孔径1.5㎝を測る。形態は，頭部が角ばり，全体的に「コ」の字状に近い様相を呈する。穿孔は，二方向から行っている。

管　玉（第33図613～616，第２表613～617）

617は勾玉とともに出土したガラス製の小形の管玉である。色調は不透明な緑色を呈し，表面は風化が進んでいる。

613～617の４点は，まとまって出土しており，いずれも碧玉製で濃緑色を呈し，若干の風化が認められる。外径5.2㎜～6.2㎜，長さ16.2㎜～26.2㎜を測り，穿孔は二方向から行われている。

ガラス製小玉（第２表618・619・621）

618，619は，勾玉とともに出土したものである。618は半透明な暗青色を呈し，表面は風化が進んでいる。619は，半透明な濃青色を呈する。

621は単独出土のものであり，上方からの流れ込みと考えられる。不透明な紫青色を呈する大形のものである。

滑石製臼玉（第２表620）

勾玉とともに出土したもので，色調は暗褐色を呈する。体部の中央にわずかながら稜が認められ，穿孔は一方向から行ったものとみられる。なお，玉類の個々の計測値は計測表（第３表）のとおりである。

# 第２表　池の内遺跡出土須恵器観察表

| 器種 | 番号 | 出土地点 | 法　量(cm) | 形態について | 成形・調整について | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 高坏（蓋） | 1 | 第３号古墳<br>南西側 | 口　径　11.5<br>器　高　5.1<br>稜　径　11.4<br>つまみ径　3.3<br>つまみ高　1.0 | 口縁部は垂直に下り，端部は内傾する凹面を成す。稜は断面三角形を成し，鋭い。天井部は，深く丸い。中央に上面凹状のつまみを付す。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>つまみはハリツケ。天井部½の回転ヘラ削り，他は回転ナデ調整。 | 胎土：やや密<br>焼成：良好<br>色調：外面　暗黄灰色<br>内面　淡青灰色<br>天井部及びつまみに暗緑色の自然釉 |
| 〃 | 2 | 第３号古墳<br>南西側 | 口　径　11.2<br>器　高　5.0<br>稜　径　11.3<br>つまみ径　3.1<br>つまみ高　10.9 | 口縁部は垂直に下り，端部は内傾する段を成す。稜は断面三角形を成し鋭い。天井部は深く丸い。中央に，上面凹状のつまみを付す。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>つまみはハリツケ。天井部外面⅔の回転ヘラ削り。天井部内面½の不整方向のナデ，他は回転ナデ調整。ロクロ回転　左 | 胎土：やや密<br>焼成：良好<br>色調：黒灰色<br>天井部に暗緑色の自然釉 |
| 〃 | 3 | 第３号古墳<br>南西側 | 口　径　11.7<br>器　高　5.1<br>稜　径　11.5<br>つまみ径　2.8<br>つまみ高　0.9 | 口縁部は垂直に下り，端部は内傾する段を成す。稜は断面三角形をなしているが，やや鈍い。天井部は深く丸い。中央に上面凹状のつまみを付す。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>つまみはハリツケ。天井部外面⅔の回転ヘラ削り。天井部内面½の一定方向のナデ。他は回転ナデ調整。ロクロ回転　左 | 胎土：やや密（白色砂粒多）<br>焼成：良好<br>色調：暗青灰色 |
| 蓋坏（蓋） | 4 | 第３号古墳<br>南西側 | 口　径　11.2<br>器　高　4.8<br>稜径径　11.1 | 口縁部は垂直に下り，端部は内傾する凹面を成す。稜は，短く鈍い。天井部は深く丸い。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>天井部外面½の回転ヘラ削り，他は回転ナデ調整。ロクロ回転　右 | 胎土：やや密（黒色砂粒，白色砂粒有り）<br>焼成：良<br>色調：外面は淡青灰色<br>内面は青灰色 |
| 〃 | 5 | 第２号古墳<br>～第５号古墳間 | 口　径　12.0<br>器　高　4.3<br>稜　径　11.6 | 口縁部は，垂直に下り，端部は内傾する段を成す。稜は鈍い。天井部は，やや深く丸い。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>天井部外面¾の回転ヘラ削り，天井部内面⅓の不整方向のナデ。他は回転ナデ調整。ロクロ回転　左 | 胎土：やや密（白色砂粒多）<br>焼成：不良<br>色調：灰色，体部は黒灰色 |
| 〃 | 6 | 第３号古墳<br>南西側 | 残存高　3.4<br>稜　径　11.4 | 稜は，断面三角形を成し鋭い。天井部は，深く丸い。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>天井部外面⅔の回転ヘラ削り，天井部内面⅓の一定方向のナデ。他は回転ナデ調整。ロクロ回転　左 | 胎土：やや密（白色砂粒多）<br>焼成：良<br>色調：外面　黄灰白色<br>内面　黒灰色<br>口縁部を欠失。器壁に黒色粒。 |
| 〃 | 7 | 第１号古墳<br>東側溝上 | 口　径　11.6<br>器　高　5.2<br>稜　径　11.3 | 口縁部は垂直に下り，端部は内傾する段を成す。稜は鈍い。天井部は特に深く丸い。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>天井部外面⅔の回転ヘラ削り，天井部内面⅓の不定方向のナデ。他は回転ナデ調整。ロクロ回転　右 | 胎土：やや密（白色砂粒多）<br>焼成：不良<br>色調：暗灰白色<br>器壁に黒色粒。 |
| 〃 | 8 | 〃 | 口　径　11.6<br>器　高　4.6<br>稜　径　11.2 | 口縁部は垂直に下り，端部は内傾する凹面を成す。稜は短く，やや鈍い。天井部は，深く丸い。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>天井部外面⅔の回転ヘラ削り，他は，回転ナデ調整。ロクロ回転　左 | 胎土：密（白色砂粒多）<br>焼成：良<br>色調：黒灰色<br>½が残存。 |
| 蓋坏（身） | 9 | 第２号古墳<br>東側斜面 | 口　径　10.0<br>器　高　4.6<br>受部径　12.0 | 立ちあがりはやや内傾し，端部は，内傾する段を成す。受部は，上外方にのび鋭い。底部は深くやや丸い。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>底部外面⅔に回転ヘラ削り。底部内面中央に未調整部分が残る。他は，回転ナデ調整。ロクロ回転　右 | 胎土：やや密(白色，黒色砂粒多)<br>焼成：良<br>色調：暗青灰色 |
| 〃 | 10 | 第３号古墳<br>南西側 | 口　径　9.9<br>残存高　4.2<br>受部径　12.5 | 立ちあがりは内傾した後，垂直に立ちあがる。端部は，内傾する段を成す。受部は，上外方にのび端部は丸い。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>底部外面⅔に回転ヘラ削り。底部内面中央に未調整部分が残る。他は回転ナデ調整。ロクロ回転　右 | 胎土：密（黒色砂粒少）<br>焼成：良<br>色調：淡青灰色<br>底部欠失。 |
| 〃 | 11 | 第１号古墳<br>東側溝上 | 口　径　10.5<br>器　高　4.3<br>受部径　12.2 | 立ちあがりは内傾した後外湾し，端部は内傾する凹面を成す。底部は深く丸い。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>底部外面⅔に回転ヘラ削り，他は，回転ナデ調整。ロクロ回転　右 | 胎土：やや粗（白色砂粒多。1㎜～2㎜のものも含む）<br>焼成：良<br>色調：黒灰色。外面には光沢あり。 |

| 器種 | 番号 | 出土地点 | 法　量(cm) | 形態について | 成形・調整について | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 蓋坏(身) | 12 | 第2号古墳<br>東側斜面 | 口径　13.7<br>器高　5.0<br>受部径　16.6 | 立ちあがりは内傾し，端部は内傾する凹面を成す。受部は，上外方にのび，端部は丸い。底部は，やや深く，若干の丸味を持つ。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>底部外面⅔に回転ヘラ削り。底部内面¼に一定方向のナデ。他は，回転ナデ調整。ロクロ回転　右 | 胎土：やや粗（白色砂粒多）<br>焼成：やや良<br>色調：灰色 |
| 〃 | 13 | 第2号古墳<br>東側斜面 | 口径　10.6<br>器高　5.3<br>受部径　13.2 | 立ちあがりは，短く直立し，端部は丸い。受部は，口縁部と直角にはり出す。底部は，深くやや平たい。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>底部外面⅓に，カキ目状の浅い調整痕。底部内面⅔に，指による調整痕。他は，回転ナデ調整。ロクロ回転　左 | 胎土：密（白色砂粒多）<br>焼成：やや良<br>色調：灰色<br>外部に黒斑あり，残存⅓，立ちあがり部の内外面には，暗緑色の自然釉。 |
| 高坏 | 14 | 第3号古墳<br>南西側 | 口径　9.7<br>器高　7.0<br>受部径　12.0<br>脚端部径　8.8<br>脚部高　2.5 | 立ちあがりは，内傾後直立し，端部は，内傾する鈍い段を成す。受部は上外方にのび，端部は丸い。底部は，深く丸い。脚部は基部太く，坏に120°を成し，外反する。端部は内傾する平面を成す。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>坏底部外面⅔に回転ヘラ削り。他は回転ナデ調整。脚基部には，明瞭な貼付痕が残る。 | 胎土：密(白色，黒色砂粒多)<br>焼成：良<br>色調：黒灰色<br>脚部下半に自然釉多。 |
| 〃 | 15 | 第3号古墳<br>南西側 | 口径　10.0<br>器高　11.7<br>受部径　6.7<br>脚端部径　7.8<br>脚高　2.5 | 立ちあがりは，内傾後直立し，端部内傾する段を成す。受部は水平にのび，端部は丸い。底部は深く丸い。脚部は基部太く，坏と120°を成し外反する。端部は内傾する段を成す。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>坏底部外面⅔に回転ヘラ削り。他は回転ナデ調整。脚基部には，明瞭な貼付痕が残る。ロクロ回転　左 | 胎土：密（白色砂粒多）<br>焼成：やや良<br>色調：黒灰色<br>受部端部及び脚部下半に暗緑色の自然釉 |
| 〃 | 16 | 第3号古墳<br>南西側 | 口径　9.0<br>器高　8.2<br>受部径　11.3<br>脚端部径　7.2<br>脚部高　3.6 | 立ちあがり部は内傾し，内傾する段をなす。受部は上外方にのび，端部は鋭い。底部は深く丸い。脚部は外下方にのび，端部付近で段をなし，垂直に下る。凹面をなして端部に至る。端部は，薄く丸い。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>坏底部外面⅓に回転ヘラ削り。他は回転ナデ調整。脚基部には明瞭な貼付痕が残る。ロクロ回転　左 | 胎土：密（白色砂粒少）<br>焼成：良<br>色調：黒灰色<br>脚部下半に白斑あり |
| 〃 | 17 | 第1号古墳<br>東側溝上 | 口径　13.9<br>器高　11.3<br>脚端部径　8.6<br>脚部高　5.7 | 坏口縁部は外反して立ちあがり，端部は丸い。体部には，断面3角形の鋭い凸帯が2条巡り，底部は深く丸い。脚部は，細い基部から外反した後，端部付近で段をなし，丸くおさめる。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>坏底部及び脚部は，カキ目調整。他は回転ナデ調整。脚基部には，明瞭な貼付痕。ロクロ回転　左 | 胎土：やや密（白色砂粒多）<br>焼成：良<br>色調：暗青灰色 |
| 短頸壺 | 18 | 第2号古墳<br>東側墳裾 | 口径　10.0<br>器高　14.5<br>最大径　13.7 | 口縁部は，基部より外上方に大きく開き，端部は，徐々に厚さを減じて丸くおさめる。体部は，上部⅓のところに最大径を持ち，球形を呈する。底部は，とがりぎみである。頸部には，断面3角形の凸線2条が巡り，その間に，原体15本の細い波状文が巡る。肩部には，2条の沈線の間に原体7本の波状文が巡る。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>胴部下半には，カキ目状の浅い条痕。底部外面は，ナデ調整。底部内面には，指あるいは棒状工具での圧痕あり。他は，回転ナデ調整。胴部と底部の間は，接合痕あり。胴部には，格子タタキの痕跡あり。 | 胎土：密<br>焼成：良<br>色調：灰色<br>断面は淡赤紫色 |
| 把手脚付短頸壺 | 19 | 池の内第3号古墳A主体上面 | 口径　9.3<br>器高（推定）19.5<br>最大径　15.0<br>脚端部径　11.0<br>脚部高　6.6 | 口縁部と体部，体部と脚部の境には，断面三角形の鋭い凸線が巡り，その間体部，脚部とも3本の凸線を巡らして施文帯を区画する。脚部には，逆台形の透穴が，2段直列四方向にならぶ。透穴は，刺突によるもので，ほとんどが未貫通である。肩部より若干下から，大きな把手がつく。施文は次のとおりである。<br>施文帯（上から順に）<br>1. 刃物状工具による斜格子文<br>2. なし<br>3. 列点文（斜行5本）<br>4. 〃　〃<br>5. 列点文（垂直6本）<br>6. 〃　〃<br>7. なし | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>内外面とも，きわめて入念な回転ナデ調整。脚部内面端部はカキ目状の浅い条痕。体部約½より上で，急に薄くなり内面に，早い回転ナデによる条痕がみられる。 | 胎土：密<br>焼成：良好堅緻<br>色調：外面　暗茶褐色<br>内面　暗灰色<br>断面は淡赤紫色<br>脚部内面は黒色<br>口縁部，肩部，底部内面，脚端部に暗緑色の自然釉。 |

| 器種 | 番号 | 出土地点 | 法　量(cm) | 形態について | 成形・調整について | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 甕 | 20 | 第1号主体 | 口　径　23.0<br>器　高　49.2<br>最大径　44.0 | 口頸部は垂直に上方に上り，後に厚さを減じながら外上方に外湾する。口縁端部は外傾する凹面をなし，直下に鈍い凸帯が巡る。体部は，上部¼に最大径を持つ球形を呈する。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>口縁部は，外面にカキ目状の浅い条痕，内面は，回転ナデ調整。体部は，外面格子様タタキ，内面同心円タタキ。 | 胎土：やや密（白色砂粒多）<br>焼成：良好<br>色調：灰色<br>肩部に暗緑色の自然釉 |
| 〃 | 21 | 第1号主体 | 口　径　17.4<br>器　高　44.5<br>最大径　46.6 | 口頸部は，基部より短く外湾し，端部はうすく鋭い。端部直下に断面三角形の鋭い凸線が巡る。体部は，はりの強い球形を呈する。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>口縁部は，横ナデ調整。体部は，内外面ともスリケシ。外面に平行タタキの痕跡あり。 | 胎土：密<br>焼成：良好<br>色調：青灰色 |
| 〃 | 22 | 第3号古墳<br>B主体 | 口　径　29.6<br>器　高　52.4<br>最大径　48.4 | 口頸部は，外上方に開き，後に端部付近でさらに大きく外反する。口縁端部は，丸味を持った平面をなし，その直下に鈍い凸帯が巡る。口頸部には鈍い凸帯が2本巡り，原体16本の波状文が，2段に巡る。体部は⅓に最大径をもつ球形を呈す。底部は，凹面をなす。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>口縁部は，内外面とも回転ナデ調整。体部は，外面格子タタキ，内面スリケシ。 | 胎土：密<br>焼成：良好<br>色調：灰色 |
| 〃 | 23 | 第5号古墳<br>墳裾東側 | 口径(推定)18.9<br>残存高　7.0 | 口頸部は，外湾して立ち上る。口縁端部は，肥厚して直立する凸面を呈し，直下に断面三角形の鋭い凸線1条が巡る。端部先端は丸い。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>口縁部は，回転ナデ調整。体部外面は，平行タタキ。体部内面は，指ナデ。基部に接合痕あり。 | 胎土：やや密（白色砂粒多）<br>焼成：良好，堅緻<br>色調：黒灰色<br>断面は淡赤紫色<br>肩部以下欠失 |
| 〃 | 24 | 第2号古墳<br>～第5号古<br>墳間 | 口　径　19.8<br>残存高　25.5<br>最大径　28.2 | 口頸部は，外上方に外反し，口縁端部は肥厚し，わずかに内傾する凸面を呈する。口頸部には，ほぼ中間部に巡らされた凸線をはさんで上下に，原体16本の波状文2条がまわる。体部は最大径を上部⅓に持ち，球形を呈する。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>口縁部は，回転ナデ調整。体部外面は，平行タタキの後回転カキ目調整。内面は，円弧タタキ。 | 胎土：密<br>焼成：良好<br>色調：暗青灰色 |
| 蓋坏（蓋） | 25 | 第9号主体 | 口　径　11.8<br>器　高　4.2<br>稜　径　11.8 | 口縁部は垂直に下り，端部は内傾する段を成す。稜は短く鈍い。天井部は深くやや丸味を持つ。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>天井部外面⅔の回転ヘラ削り，他は，回転ナデ調整。ロクロ回転　右 | 胎土：やや密（2㎜前後の砂粒を含む）<br>焼成：良<br>色調：暗青灰色 |
| 〃（身） | 26 | 〃 | 口　径　10.6<br>器　高　4.1<br>受部径　12.2 | 立ちあがりは，やや内傾した後外湾し，端部は内傾する段を成す。受部は水平にのび，端部は鋭い。底部は比較的深く，やや丸味をもつ。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>底部外面⅔の回転ヘラ削り。底部内面には中心部に成形痕が残る。<br>他は，回転ナデ調整。<br>ロクロ回転　右 | 胎土：やや密（2㎜程度の砂粒を含む）<br>焼成：良<br>色調：暗青灰色 |
| 〃（蓋） | 27 | 〃 | 口　径　11.6<br>器　高　4.0<br>稜　径　11.4 | 口縁部は，垂直に下り，端部は内傾する段を成す。稜は短く鈍い。天井部は深くやや丸味をもつ。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>天井部外面⅔の回転ヘラ削り。天井部内面には，一部成形痕が残る。他は回転ナデ調整。ロクロ回転　右 | 胎土：やや粗（2㎜程度の砂粒を含む）<br>焼成：不良　軟調<br>色調：外面　灰色<br>内面　灰白色 |
| 〃（身） | 28 | 〃 | 口　径　10.3<br>器　高　4.0<br>受部径　12.0 | 立ちあがりは，内傾し，端部は，内傾する段を成す。受部は，上外方にのび，端部は鋭い。底部は比較的深く，やや丸味を持つ。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>底部外面⅔の回転ヘラ削り。底部内面には一部成形痕が残る。他は，回転ナデ調整。ロクロ回転　右 | 胎土：やや粗（2㎜程度の砂粒を含む）<br>焼成：不良　軟調<br>色調：外面　灰色<br>内面　灰白色 |
| 〃（蓋） | 29 | 〃 | 口　径　11.8<br>器　高　4.3<br>稜　径　11.7 | 口縁部は，垂直に下り，端部は内傾する段を成す。稜は，短く鈍い。天井部は深く，やや丸味を持つ。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>天井部外面⅔の回転ヘラ削り。天井部内面にわずかに一定方向のナデ。他は，回転ナデ調整。ロクロ回転　右 | 胎土：やや粗（2㎜程度の砂粒を含む）<br>焼成：やや良<br>色調：淡青灰色 |
| 〃（身） | 30 | 〃 | 口　径　10.4<br>器　高　4.2<br>受部径　12.3 | 立ちあがりは，内傾した後，垂直に立ちあがり，端部は内傾する鈍い段を成す。受部は，上外方にのび，端部は丸い。底部は比較的深く，やや丸味を持つ。 | マキアゲ，ミズビキ成形。<br>底部外面⅔の回転ヘラ削り。底部内面には一部に一定方向のナデ。他は回転ナデ調整。ロクロ回転　右 | 胎土：やや粗（2㎜程度の砂粒を含む）<br>焼成：やや良<br>色調：淡青灰色 |

# 第３表　池の内遺跡出土玉類計測表

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第１号古墳出土 | 3 ～ 169 | 第３号主体出土 | 395 ～ 403 |
| 第３号古墳Ａ主体出土 | 170 ～ 312 | 第５号主体出土 | 404 ～ 594 |
| 第１号主体出土 | 313 ～ 394 | 第９号主体出土 | 595 ～ 612 |
| | | 遺構に伴わないもの | 613 ～ 621 |

| 番号 | 種類 | 外径(mm) | 厚さ(mm) | 孔径(mm) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 3 | ガラス製小玉 | 6.0(f) | 4.7 | 1.4 | 青緑色 | |
| 4 | 〃 | 4.8(f) | 4.2 | 1.7(f) | 〃 | n |
| 5 | 〃 | 5.2(f) | 3.4 | 1.7(f) | 〃 | |
| 6 | 〃 | 6.1(f) | 3.1 | 1.9 | 〃 | |
| 7 | 〃 | 5.2(f) | 3.7 | 1.5(f) | 〃 | |
| 8 | 〃 | 2.9(f) | 2.4 | 1.0(f) | 〃 | n |
| 9 | 〃 | 3.9(f) | 2.7 | 0.9(f) | 〃 | k多，孔より |
| 10 | 〃 | 4.5(f) | 4.5 | 1.7(f) | 〃 | n |
| 11 | 〃 | 5.4(f) | 3.5 | 1.8(f) | 〃 | n |
| 12 | 〃 | 5.5(f) | 3.2 | 1.7 | 〃 | n |
| 13 | 〃 | 4.8 | 4.3 | 1.2 | 〃 | n |
| 14 | 〃 | 3.6(f) | 3.0 | 1.4(f) | 〃 | k多，n |
| 15 | 〃 | 4.7 | 3.5 | 1.5 | 〃 | n |
| 16 | 〃 | 4.8(f) | 3.7 | 1.3(f) | 〃 | |
| 17 | 〃 | 5.9(f) | 3.6 | 2.1(f) | 〃 | |
| 18 | 〃 | 4.9(f) | 3.6 | 1.5 | 〃 | n |
| 19 | 〃 | 5.6(f) | 3.7 | 2.0(f) | 〃 | k多 |
| 20 | 〃 | 4.6(f) | 3.4 | 1.8(f) | 〃 | |
| 21 | 〃 | 3.6(f) | 2.0 | 1.7(f) | 〃 | |
| 22 | 〃 | 5.3(f) | 3.2 | 1.8 | 〃 | |
| 23 | 〃 | 3.4(f) | 1.8 | 1.3(f) | 〃 | n |
| 24 | 〃 | 5.8(f) | 2.8 | 2.1 | 〃 | |
| 25 | 〃 | 6.0(f) | 4.1 | 1.7 | 〃 | n |
| 26 | 〃 | 3.3(f) | 2.0 | 1.1(f) | 〃 | k多 |
| 27 | 〃 | 5.3(f) | 3.2 | 1.7(f) | 〃 | n，孔より |
| 28 | 〃 | 4.9 | 3.4 | 1.5 | 〃 | |
| 29 | 〃 | 5.6(f) | 4.0 | 1.9(f) | 〃 | n |
| 30 | 〃 | 5.0(f) | 3.5 | 1.7(f) | 〃 | n |
| 31 | 〃 | 5.2(f) | 5.0 | 1.8(f) | 〃 | n |
| 32 | 〃 | 5.2(f) | 2.6 | 2.3(f) | 〃 | |
| 33 | 〃 | 5.3(f) | 3.5 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 34 | 〃 | 6.0(f) | 3.9 | 2.3(f) | 〃 | n |
| 35 | 〃 | 5.2(f) | 3.9 | 1.4(f) | 〃 | n |
| 36 | 〃 | 3.6(f) | 2.3 | 1.3(f) | 〃 | |
| 37 | 〃 | 3.5 | 2.2 | 1.1 | 〃 | k多 |
| 38 | 〃 | 5.1(f) | 3.2 | 1.9 | 〃 | |
| 39 | 〃 | 6.0(f) | 3.4 | 1.7(f) | 〃 | k多，n，一部欠 |
| 40 | 〃 | 5.2(f) | 3.5 | 1.7 | 〃 | n |
| 41 | 〃 | 5.6(f) | 3.8 | 1.9(f) | 〃 | n |
| 42 | 〃 | 6.0(f) | 4.8 | 1.8(f) | 〃 | k穴多，n，一部欠 |
| 43 | 〃 | 5.0(f) | 4.6 | 1.8 | 〃 | n |
| 44 | 〃 | 4.7(f) | 4.0 | 1.3 | 〃 | k穴多，n |
| 45 | 〃 | 5.7(f) | 3.7 | 2.0(f) | 〃 | n |
| 46 | 〃 | 3.5(f) | 2.0 | 1.3(f) | 〃 | n |
| 47 | 〃 | 3.2(f) | 2.0 | 1.1(f) | 〃 | |
| 48 | 〃 | 3.1(f) | 1.7 | 1.0(f) | 〃 | k多 |
| 49 | 〃 | 3.2 | 2.4 | 1.0 | 〃 | |
| 50 | 〃 | 5.6(f) | 4.3 | 2.2 | 〃 | n |
| 51 | 〃 | 3.8(f) | 2.2 | 1.5(f) | 〃 | |
| 52 | 〃 | 3.5(f) | 1.9 | 1.1 | 〃 | n |
| 53 | 〃 | 5.5 | 3.5 | 2.0 | 〃 | n |
| 54 | 〃 | 4.5(f) | 2.7 | 1.6(f) | 〃 | n，一部欠 |
| 55 | 〃 | 5.3(f) | 3.6 | 2.0(f) | 〃 | n |
| 56 | 〃 | 5.5(f) | 4.8 | 1.9(f) | 〃 | n |
| 57 | 〃 | 6.2(f) | 3.4 | 1.9(f) | 〃 | n，孔より |
| 58 | 〃 | 5.0(f) | 3.1 | 1.5 | 〃 | n |
| 59 | 〃 | 5.9(f) | 3.5 | 2.0(f) | 〃 | |
| 60 | 〃 | 5.6(f) | 3.5 | 2.4(f) | 〃 | n |
| 61 | 〃 | 6.0(f) | 4.2 | 2.2(f) | 〃 | |
| 62 | 〃 | 6.1(f) | 3.0 | 2.4(f) | 〃 | |
| 63 | 〃 | 5.0(f) | 3.9 | 1.4 | 〃 | n |
| 64 | 〃 | 3.5(f) | 2.1 | 1.1(f) | 〃 | n，孔より |
| 65 | 〃 | 3.8(f) | 2.3 | 1.3(f) | 〃 | k多，n |
| 66 | 〃 | 5.1(f) | 3.7 | 1.9(f) | 〃 | n |
| 67 | 〃 | 6.4 | 3.5 | 2.0 | 〃 | |
| 68 | 〃 | 5.4(f) | 3.4 | 1.5 | 〃 | k穴多，n |
| 69 | 〃 | 6.0(f) | 3.7 | 2.4(f) | 〃 | n |
| 70 | 〃 | 3.1 | 1.6 | 1.3(f) | 〃 | k多，n |
| 71 | 〃 | 6.1(f) | 3.5 | 1.7 | 〃 | |
| 72 | 〃 | 3.8(f) | 2.7 | 1.3(f) | 〃 | k多，k穴多 |
| 73 | 〃 | 3.9(f) | 1.5 | 1.2(f) | 〃 | |
| 74 | 〃 | 4.9(f) | 4.8 | 1.3(f) | 〃 | n |
| 75 | 〃 | 3.7(f) | 1.8 | 1.6(f) | 〃 | n |
| 76 | 〃 | 3.8(f) | 1.7 | 1.2(f) | 〃 | |
| 77 | 〃 | 3.2(f) | 2.2 | 1.0 | 〃 | |
| 78 | 〃 | 5.2(f) | 3.4 | 2.0(f) | 〃 | |
| 79 | 〃 | 5.0(f) | 3.8 | 1.2 | 〃 | n |
| 80 | 〃 | 4.0 | 3.0 | 1.5(f) | 〃 | n |
| 81 | 〃 | 3.8(f) | 3.4 | 1.5 | 〃 | n |
| 82 | 〃 | 3.6(f) | 4.3 | 1.3 | 〃 | n |
| 83 | 〃 | 6.2(f) | 3.0 | 1.8(f) | 〃 | 孔より |
| 84 | 〃 | 5.2(f) | 3.3 | 2.0(f) | 〃 | n，孔より |
| 85 | 〃 | 5.8(f) | 4.5 | 1.6 | 〃 | n |
| 86 | 〃 | 5.0(f) | 3.8 | 1.8(f) | 〃 | k多，n，孔より |
| 87 | 〃 | 5.2 | 5.0 | 2.0 | 〃 | n |
| 88 | 〃 | 3.0(f) | 1.6 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 89 | 〃 | 5.2(f) | 3.8 | 2.0(f) | 〃 | n，孔より |
| 90 | 〃 | 5.0(f) | 4.7 | 1.6(f) | 〃 | n |
| 91 | 〃 | 3.5(f) | 2.3 | 1.2(f) | 〃 | |
| 92 | 〃 | 3.8 | 2.9 | 1.4 | 〃 | |
| 93 | 〃 | 3.1(f) | 2.0 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 94 | 〃 | 4.4 | 3.4 | 1.4 | 〃 | |
| 95 | 〃 | 2.7(f) | 1.5 | 0.9 | 〃 | |
| 96 | 〃 | 3.5(f) | 2.0 | 0.9 | 〃 | 孔より |
| 97 | 〃 | 6.0(f) | 3.8 | 1.7(f) | 〃 | n |
| 98 | 〃 | 5.7(f) | 2.6 | 2.0(f) | 〃 | n |
| 99 | 〃 | 6.3(f) | 3.2 | 1.8(f) | 〃 | |
| 100 | 〃 | 5.5 | 2.9 | 1.6 | 〃 | |
| 101 | 〃 | 5.5(f) | 4.0 | 1.9 | 〃 | n |
| 102 | 〃 | 5.2(f) | 3.4 | 2.0 | 〃 | |
| 103 | ガラス製小玉 | 5.6(f) | 3.9 | 1.9 | 青緑色 | 孔より |
| 104 | 〃 | 5.8(f) | 4.8 | 1.6(f) | 〃 | n |
| 105 | 〃 | 6.1(f) | 3.4 | 1.5(f) | 〃 | n |
| 106 | 〃 | 5.2(f) | 4.0 | 1.5 | 〃 | n |
| 107 | 〃 | 5.1(f) | 3.7 | 1.7(f) | 〃 | n |
| 108 | 〃 | 4.2(f) | 3.8 | 1.1 | 〃 | n |
| 109 | 〃 | 4.7(f) | 3.9 | 1.5(f) | 〃 | n |
| 110 | 〃 | 4.7(f) | 4.0 | 1.6 | 〃 | n |
| 111 | 〃 | 3.5(f) | 3.2 | 1.3 | 〃 | n |
| 112 | 〃 | 3.7 | 3.2 | 1.3(f) | 〃 | k多，n，孔より |
| 113 | 〃 | 4.0(f) | 2.7 | 1.5(f) | 〃 | n |
| 114 | 〃 | 3.5(f) | 2.7 | 1.6(f) | 〃 | n |
| 115 | 〃 | 3.9 | 3.2 | 1.1 | 〃 | n |
| 116 | 〃 | 3.9(f) | 2.4 | 1.0(f) | 〃 | k穴多，n |
| 117 | 〃 | 4.1 | 2.5 | 1.4(f) | 〃 | n |
| 118 | 〃 | 3.6 | 3.1 | 1.2(f) | 〃 | k穴多 |
| 119 | 〃 | 4.0(f) | 2.8 | 1.5(f) | 〃 | k穴多，n |
| 120 | 〃 | 3.4 | 1.9 | 1.4 | 〃 | n |
| 121 | 〃 | 3.9(f) | 2.6 | 1.2 | 〃 | k多，n |
| 122 | 〃 | 3.2(f) | 1.6 | 1.4 | 〃 | |
| 123 | 〃 | 3.7 | 2.8 | 1.7(f) | 〃 | n |
| 124 | 〃 | 3.5 | 3.1 | 1.3(f) | 〃 | n |
| 125 | 〃 | 3.7(f) | 2.6 | 1.5(f) | 〃 | k穴多 |
| 126 | 〃 | 3.9(f) | 2.2 | 1.4(f) | 〃 | k多，孔より |
| 127 | 〃 | 3.6(f) | 3.3 | 1.5(f) | 〃 | n |
| 128 | 〃 | 3.5(f) | 3.4 | 1.5(f) | 〃 | k多，n |
| 129 | 〃 | 4.0(f) | 2.9 | 1.5(f) | 〃 | k多 |
| 130 | 〃 | 3.7(f) | 2.3 | 1.2 | 〃 | |
| 131 | 〃 | 3.5(f) | 2.1 | 1.4(f) | 〃 | |
| 132 | 〃 | 3.6(f) | 2.1 | 1.4 | 〃 | k多 |
| 133 | 〃 | 3.7(f) | 2.0 | 1.5(f) | 〃 | |
| 134 | 〃 | 3.8(f) | 2.4 | 1.7(f) | 〃 | k穴多，n |
| 135 | 〃 | 3.6(f) | 2.1 | 1.0(f) | 〃 | |
| 136 | 〃 | 3.7(f) | 2.3 | 1.2 | 〃 | n |
| 137 | 〃 | 3.2 | 2.0 | 1.0 | 〃 | |
| 138 | 〃 | 3.3(f) | 2.0 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 139 | 〃 | 3.4 | 1.9 | 1.3(f) | 〃 | k多 |
| 140 | 〃 | 3.0 | 2.5 | 1.0 | 〃 | n |
| 141 | 〃 | 3.4 | 1.7 | 1.2 | 〃 | n |
| 142 | 〃 | 3.2 | 1.8 | 1.3 | 〃 | n |
| 143 | 〃 | 3.3(f) | 1.6 | 1.1 | 〃 | |
| 144 | 〃 | 3.4(f) | 2.0 | 1.2 | 〃 | n |
| 145 | 〃 | 3.0(f) | 1.8 | 1.0 | 〃 | |
| 146 | 〃 | 3.1(f) | 1.9 | 1.0 | 〃 | |
| 147 | 〃 | 3.2(f) | 1.8 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 148 | 〃 | 2.8 | 1.5 | 1.0 | 〃 | n |
| 149 | 〃 | 2.9 | 4.5 | 1.2 | 〃 | n |
| 150 | 〃 | 3.9(f) | 2.8 | 1.5(f) | 〃 | n |
| 151 | 〃 | 3.7 | 2.5 | 1.1(f) | 黄緑色 | k穴多 |
| 152 | 〃 | 3.5(f) | 2.0 | 1.1(f) | 緑色 | |
| 153 | 〃 | 4.0(f) | 2.7 | 1.5(f) | 黄緑色 | |
| 154 | 〃 | 3.7(f) | 1.9 | 1.2 | 緑色 | n |
| 155 | 〃 | 3.9(f) | 2.9 | 1.9(f) | 黄緑色 | |
| 156 | 〃 | 3.6 | 2.4 | 1.3 | 緑色 | n |
| 157 | 〃 | 4.4 | 3.4 | 1.5(f) | 黄緑色 | k多，n，孔より |
| 158 | 〃 | 4.1(f) | 3.5 | 1.3 | 緑色 | k穴多 |
| 159 | 〃 | 3.5(f) | 4.0 | 1.4(f) | 黄緑色 | n |
| 160 | 〃 | 4.3(f) | 3.8 | 1.2(f) | 緑色 | |
| 161 | 〃 | 3.8 | 3.0 | 1.1 | 黄緑色 | n |
| 162 | 〃 | 4.7(f) | 3.4 | 1.5 | 緑色 | |
| 163 | 〃 | 4.6(f) | 3.5 | 1.7(f) | 〃 | n |
| 164 | 〃 | 4.3(f) | 3.4 | 1.7(f) | 〃 | |
| 165 | 〃 | 4.1(f) | 3.0 | 1.2 | 〃 | n |
| 166 | 〃 | 3.3(f) | 1.8 | 1.1 | 〃 | n |
| 167 | 〃 | 4.2(f) | 2.4 | 1.6(f) | 〃 | |
| 168 | 〃 | 3.5(f) | 1.5 | 1.3(f) | 淡青色 | k多 |
| 169 | 〃 | 3.6(f) | 3.4 | 1.2 | 青色 | n |
| 170 | 管玉 | 8.1(f) | 11.8 | 5 26(f) 5 19(f) | 青緑色 | k多，k穴多，I |
| 171 | ガラス製小玉 | 8.1(f) | 4.6 | 5 28(f) 5 19(f) | 紫青色 | n，S |
| 172 | 〃 | 7.4(f) | 6.6 | 1.9(f) | 濃青色 | k多，n |
| 173 | 〃 | 8.0(f) | 7.2 | 3.2(f) | 〃 | k多，k穴多 |
| 174 | 〃 | 8.1(f) | 5.6 | 2.0(f) | 紫青色 | k穴多 |
| 175 | 〃 | 8.3(f) | 7.1 | 2.7(f) | 濃青色 | n，Q |
| 176 | 〃 | 8.6(f) | 5.7 | 3.3(f) | 〃 | k多，n |
| 177 | 〃 | 7.9(f) | 5.8 | 2.3(f) | 〃 | k多，k穴多，一部欠 |
| 178 | 〃 | 6.5(f) | 6.9 | 2.7(f) | 〃 | n，I |
| 179 | 〃 | 7.6(f) | 5.8 | 2.0(f) | 〃 | n |
| 180 | 〃 | 8.3(f) | 5.5 | 2.4(f) | 〃 | k多，k穴多 |
| 181 | 〃 | 7.2(f) | 4.8 | 2.0 | 〃 | k穴多，I |
| 182 | 〃 | 8.0(f) | 5.5 | 2.0(f) | 〃 | k多 |
| 183 | 〃 | 7.5(f) | 5.3 | 2.8(f) | 〃 | k多，n，I，孔より |
| 184 | 〃 | 7.8(f) | 6.8 | 2.3(f) | 〃 | k多，k穴多，Q |
| 185 | 〃 | 6.9(f) | 5.5 | 2.4(f) | 〃 | n，I |
| 186 | 〃 | 7.2 | 5.6 | 2.0(f) | 〃 | |
| 187 | 〃 | 7.8(f) | 5.5 | 3.1(f) | 〃 | n，I |
| 188 | 〃 | 8.0(f) | 4.1 | 5 23 5 18 | 紫青色 | S |
| 189 | 〃 | 7.7(f) | 6.8 | 2.4(f) | 濃青色 | k多，k穴多，Q |
| 190 | 〃 | 7.4(f) | 7.1 | 2.0(f) | 〃 | k多，k穴多，n，Q |
| 191 | 〃 | 7.1(f) | 5.0 | 2.6(f) | 〃 | n，I |
| 192 | 〃 | 6.6(f) | 4.8 | 3.0(f) | 〃 | n |
| 193 | 〃 | 7.5(f) | 3.9 | 2.9(f) | 紫青色 | I |
| 194 | 〃 | 7.3(f) | 6.4 | 2.5(f) | 〃 | n，I |
| 195 | 〃 | 8.9(f) | 5.5 | 2.9(f) | 濃青色 | I，一部欠 |
| 196 | 〃 | 8.2(f) | 4.8 | 3.2(f) | 〃 | k多，一部欠 |
| 197 | 〃 | 9.3(f) | 8.2 | 3.0(f) | 〃 | k多，n，Q |
| 198 | 〃 | 7.1(f) | 6.0 | 2.4(f) | 〃 | I |
| 199 | 〃 | 8.4(f) | 5.6 | 2.4(f) | 〃 | |
| 200 | 〃 | 7.9(f) | 6.2 | 2.7(f) | 〃 | k多，k穴多，n |
| 201 | 〃 | 7.0(f) | 6.9 | 2.4(f) | 〃 | k多，k穴多，n |
| 202 | 〃 | 4.9(f) | 3.8 | 1.6(f) | 〃 | k穴多，I |
| 203 | ガラス製小玉 | 7.7(f) | 6.3 | 2.4(f) | 濃青色 | k多，n |
| 204 | 〃 | 8.2(f) | 6.4 | 3.2(f) | 紫青色 | k多，k穴多，n，I |
| 205 | 〃 | 7.6 | 6.0 | 2.4(f) | 濃青色 | n |
| 206 | 〃 | 8.0(f) | 7.0 | 2.4(f) | 紫青色 | n，I |
| 207 | 〃 | 8.1(f) | 5.5 | 3.7(f) | 濃青色 | k多 |
| 208 | 〃 | 7.7(f) | 3.7 | 2.4(f) | 紫青色 | n，孔より |
| 209 | 〃 | 7.6(f) | 7.1 | 2.0(f) | 〃 | k多，k穴多，n，Q |
| 210 | 〃 | 5.6(f) | 3.3 | 1.8(f) | 濃青色 | n，I，孔より |
| 211 | 〃 | 8.0(f) | 6.9 | 2.0(f) | 紫青色 | k多，k穴多，Q |
| 212 | 〃 | 8.0(f) | 3.5 | 5 23(f) 5 20(f) | 濃青色 | n，孔より |
| 213 | 〃 | 5.5(f) | 3.2 | 1.7(f) | 紫青色 | n，I |
| 214 | 〃 | 6.9(f) | 4.8 | 2.0(f) | 〃 | k穴多，n，I |
| 215 | 〃 | 7.3(f) | 4.6 | 2.8(f) | 〃 | n，I，孔より |
| 216 | 〃 | 5.6(f) | 3.2 | 2.0(f) | 濃青色 | n，I |
| 217 | 〃 | 5.0(f) | 2.9 | 1.5(f) | 〃 | n，I |
| 218 | 〃 | 5.6(f) | 5.0 | 1.7(f) | 暗紫色 | k穴多，n |
| 219 | 〃 | 4.8(f) | 3.9 | 1.6(f) | 濃青色 | k穴多，n，I |
| 220 | 〃 | 5.5(f) | 2.6 | 2.0(f) | 〃 | n，I，孔より |
| 221 | 〃 | 7.0(f) | 3.2 | 5 19(f) 5 24(f) | 〃 | S |
| 222 | 〃 | 5.0(f) | 3.5 | 1.9(f) | 紫青色 | n，I |
| 223 | 〃 | 5.8(f) | 3.1 | 1.9(f) | 濃青色 | n |
| 224 | 〃 | 4.4(f) | 4.7 | 1.6(f) | 〃 | 孔より |
| 225 | 〃 | 7.8(f) | 4.7 | 2.5(f) | 紫青色 | I，k穴多 |
| 226 | 〃 | 7.9(f) | 6.8 | 1.9(f) | 〃 | Q |
| 227 | 〃 | 7.9(f) | 6.2 | 2.2(f) | 濃青色 | k多，Q |
| 228 | 〃 | 7.7(f) | 6.1 | 3.0(f) | 〃 | k多，k穴多 |
| 229 | 〃 | 8.5(f) | 5.4 | 3.4(f) | 紫青色 | k多，n |
| 230 | 〃 | 7.7(f) | 5.5 | 2.4(f) | 濃青色 | k多，I |
| 231 | 〃 | 7.4(f) | 5.2 | 3.0(f) | 紫青色 | k穴多，n，I |
| 232 | 〃 | 7.7(f) | 3.6 | 5 23(f) 5 16(f) | 〃 | k穴多，n |
| 233 | 〃 | 5.0(f) | 4.6 | 1.9(f) | 濃青色 | k多，k穴多，I |
| 234 | 〃 | 6.1(f) | 2.4 | 2.7(f) | 〃 | k穴多，I |
| 235 | 〃 | 5.8(f) | 3.9 | 2.5(f) | 〃 | I，一部欠 |
| 236 | 〃 | 4.9(f) | 5.1 | 1.3 | 紫青色 | |
| 237 | 〃 | 5.3(f) | 3.6 | 2.0(f) | 濃青色 | n，I |
| 238 | 〃 | 5.5(f) | 4.6 | 1.6(f) | 暗紫色 | k多，n |
| 239 | 〃 | 5.4(f) | 2.9 | 2.1(f) | 濃青色 | k多，I |
| 240 | 〃 | 5.8(f) | 2.2 | 1.8(f) | 〃 | I |
| 241 | 〃 | 4.9(f) | 3.2(f) | 2.1(f) | 〃 | I |
| 242 | 〃 | 4.8(f) | 2.4 | 2.3(f) | 淡暗紫色 | I |
| 243 | 〃 | 4.0(f) | 3.1 | 2.3(f) | 青緑色 | k穴多，n，I |
| 244 | 〃 | 8.3(f) | 5.3 | 3.5(f) | 〃 | k穴多，n，I |
| 245 | 〃 | 5.2(f) | 3.5 | 2.1(f) | 〃 | n，I |
| 246 | 滑石製臼玉 | 4.2 | 2.4 | 1.7(f) | 緑灰色 | |
| 247 | 〃 | 4.2 | 1.8 | 1.9(f) | 〃 | 孔より |
| 248 | 〃 | 4.3(f) | 2.1 | 1.5(f) | 〃 | n |
| 249 | 〃 | 4.2 | 2.2 | 1.9(f) | 淡黄灰色 | WR |
| 250 | 〃 | 3.7 | 1.9 | 1.7(f) | 緑灰色 | WR |
| 251 | 〃 | 4.1 | 1.5 | 1.5 | 淡灰色・濃灰色 | n |
| 252 | 〃 | 3.6 | 2.5 | 1.6(f) | 緑灰色 | WR |
| 253 | 〃 | 3.7 | 2.8 | 1.7(f) | 〃 | WR，n |
| 254 | 〃 | 3.7 | 1.6 | 1.6 | 〃 | |
| 255 | 〃 | 4.2 | 1.5 | 1.7 | 淡黄灰色 | |
| 256 | 〃 | 3.8 | 1.4 | 1.6(f) | 淡黄緑灰色 | n |
| 257 | 〃 | 3.8 | 1.1 | 1.5 | 黒灰色 | 一部欠 |
| 258 | 〃 | 4.0 | 2.5 | 1.7 | 濃灰色 | n |
| 259 | 〃 | 3.8 | 3.4 | 1.5 | 緑灰色 | WR，n |
| 260 | 〃 | 3.8(f) | 2.2 | 1.6(f) | 〃 | WR |
| 261 | 〃 | 3.8 | 2.5 | 1.6 | 〃 | WR |
| 262 | 〃 | 4.0(f) | 1.6 | 1.5 | 黒灰色 | n |
| 263 | 〃 | 3.7 | 2.5 | 1.5(f) | 緑灰色 | WR |
| 264 | 〃 | 3.7 | 2.3 | 1.6 | 〃 | WR |
| 265 | 〃 | 3.7 | 1.9 | 1.6 | 〃 | WR |
| 266 | 〃 | 4.5(f) | 3.1 | 1.7 | 〃 | WR，孔より |
| 267 | 〃 | 3.6 | 2.9 | 1.5 | 〃 | WR |
| 268 | 〃 | 4.2 | 2.6 | 1.7(f) | 〃 | WR |
| 269 | 〃 | 3.8 | 2.4 | 5 19(f) 5 14(f) | 〃 | WR，n，孔より |
| 270 | 〃 | 3.5 | 3.0 | 5 19(f) 5 13 | 〃 | n |
| 271 | 〃 | 3.8 | 3.1 | 1.5(f) | 〃 | WR，n |
| 272 | 〃 | 3.8 | 3.4 | 1.5 | 〃 | WR |
| 273 | 〃 | 3.4 | 3.4 | 1.7 | 〃 | WR，n |
| 274 | 〃 | 3.4 | 2.6 | 1.8 | 〃 | WR |
| 275 | 〃 | 3.2 | 3.3 | 1.5 | 〃 | WR |
| 276 | 〃 | 3.6 | 2.8 | | 〃 | WR，n |
| 277 | 〃 | 4.2 | 2.4 | 1.7 | 濃灰色・淡灰色 | WR |
| 278 | 〃 | 3.7 | 2.1 | 1.5 | 緑灰色 | WR |
| 279 | 〃 | 3.5 | 2.6 | 1.5 | 〃 | WR |
| 280 | 〃 | 3.6 | 2.6 | 1.8(f) | 〃 | WR |
| 281 | 〃 | 3.7 | 2.5 | 1.5 | 〃 | WR |
| 282 | 〃 | 3.9 | 2.5 | 1.9(f) | 黒緑灰色 | WR，n |
| 283 | 〃 | 3.6 | 2.5 | 5 16 5 15(f) | 緑灰色 | WR |
| 284 | 〃 | 4.0 | 2.5 | 1.7 | 濃灰色・淡灰色 | WR |
| 285 | 〃 | 3.8 | 2.6 | 1.7 | 緑灰色 | WR，n |
| 286 | 〃 | 3.6 | 2.3 | 1.6 | 〃 | WR |
| 287 | 〃 | 4.2 | 2.4 | 1.4 | 〃 | WR，n |
| 288 | 〃 | 3.5 | 2.4 | 1.5 | 〃 | WR |
| 289 | 〃 | 3.6 | 2.3 | 1.3 | 〃 | WR |
| 290 | 〃 | 3.3 | 1.8 | 1.4(f) | 淡灰色 | |
| 291 | 〃 | 3.9 | 1.7 | 1.6 | 淡黄灰色 | n |
| 292 | 〃 | 3.6 | 2.0 | 1.5 | 〃 | WR |
| 293 | 〃 | 3.5 | 2.1 | 1.5 | 緑灰色 | WR，n，一部欠 |
| 294 | 〃 | 3.7 | 2.6 | 1.5 | 〃 | WR，n |
| 295 | 〃 | 4.3 | 1.8 | 1.9(f) | 〃 | n，孔より |
| 296 | 〃 | 4.2 | 1.3 | 1.6(f) | 濃灰色・淡灰色 | |
| 297 | 〃 | 3.5 | 2.4 | 1.9 | 緑灰色 | WR |
| 298 | 〃 | 4.3 | 2.4 | 1.5 | 濃灰色・淡灰色 | WR |
| 299 | 〃 | 4.0 | 1.7 | 1.6 | 淡灰色 | WR |
| 300 | 〃 | 3.6 | 2.2 | 1.6 | 緑灰色 | WR |
| 301 | 〃 | 3.6 | 1.9 | 1.5 | 〃 | WR |
| 302 | 〃 | 3.2 | 2.2 | 5 13 5 14 | 〃 | |

| 番号 | 種類 | 外径(mm) | 厚さ(mm) | 孔径(mm) | 色調 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 303 | 滑石製臼玉 | 3.8 | 2.1 | 1.5 | 淡黄灰色，緑灰色 | n |
| 304 | 〃 | 3.4 | 1.8 | 1.5 | 緑灰色 | WR |
| 305 | 〃 | 3.3 | 1.5 | 1.3 | 〃 | |
| 306 | 〃 | 3.2 | 1.3 | 1.2 | 〃 | |
| 307 | 〃 | 3.6 | 2.5 | 1.5 | 〃 | n，一部欠 |
| 308 | 〃 | 3.6 | 2.8 | 1.4 | 〃 | WR，n |
| 309 | 〃 | 3.5 | 1.6 | 1.6 | 淡黄緑灰色 | WR |
| 310 | 〃 | 3.6 | 1.6 | 1.6 | 緑灰色 | WR，n |
| 311 | 〃 | 3.2 | 1.6 | 1.3 | 〃 | n |
| 312 | 〃 | 4.1 | 1.1 | 1.5 | 淡灰色 | |
| 313 | 管玉 | 3.0 | 9.5 | 1.7 | 緑青色 | |
| 314 | ガラス製小玉 | 3.3 | 3.8 | 1.1 | 濃青色 | n |
| 315 | 〃 | 3.3(f) | 2.1 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 316 | 〃 | 3.6(f) | 1.9 | 1.4(f) | 〃 | n |
| 317 | 〃 | 3.7(f) | 3.4 | 1.0 | 〃 | |
| 318 | 〃 | 3.2(f) | 2.0 | 1.4(f) | 〃 | k穴多 |
| 319 | 〃 | 3.6(f) | 2.0 | 1.1 | 〃 | n |
| 320 | 〃 | 2.8(f) | 5.2 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 321 | 〃 | 3.5 | 2.4 | 1.1(f) | 〃 | |
| 322 | 〃 | 3.7 | 2.6 | 1.0 | 紫青色 | |
| 323 | 〃 | 3.3(f) | 2.3 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 324 | 〃 | 4.2(f) | 3.1 | 1.3(f) | 〃 | n |
| 325 | 〃 | 3.8(f) | 2.2 | 1.2(f) | 濃青色 | |
| 326 | 〃 | 3.6(f) | 4.2 | 1.1 | 〃 | n，孔より |
| 327 | 〃 | 3.9 | 2.4 | 1.2(f) | 〃 | |
| 328 | 〃 | 4.2 | 2.5 | 1.5 | 〃 | k多 |
| 329 | 〃 | 3.5(f) | 2.3 | 1.2 | 〃 | k多 |
| 330 | 〃 | 3.7(f) | 1.8 | 1.2(f) | 〃 | k穴多 |
| 331 | 〃 | 3.6(f) | 2.4 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 332 | 〃 | 3.4(f) | 2.6 | 1.2 | 〃 | |
| 333 | 〃 | 3.3 | 2.8 | 0.9 | 紫青色 | |
| 334 | 〃 | 3.7(f) | 2.3 | 1.1 | 濃青色 | k穴多 |
| 335 | 〃 | 4.3(f) | 1.9 | 1.3(f) | 〃 | |
| 336 | 〃 | 3.6(f) | 2.0 | 1.4 | 〃 | |
| 337 | 〃 | 4.0(f) | 1.7 | 1.2(f) | 〃 | |
| 338 | 〃 | 3.7(f) | 1.7 | 1.4(f) | 〃 | |
| 339 | 〃 | 3.4 | 1.7 | 1.4(f) | 〃 | |
| 340 | 〃 | 3.5(f) | 1.7 | 1.1 | 〃 | |
| 341 | 〃 | 4.0(f) | 2.4 | 1.3(f) | 〃 | n |
| 342 | 〃 | 3.6(f) | 2.3 | 1.8(f) | 〃 | n |
| 343 | 〃 | 3.5(f) | 1.7 | 1.4(f) | 〃 | n |
| 344 | 〃 | 3.9 | 2.4 | 1.0(f) | 〃 | n，孔より |
| 345 | 〃 | 3.5(f) | 2.3 | 1.2(f) | 〃 | |
| 346 | 〃 | 3.9(f) | 1.8 | 1.3(f) | 〃 | |
| 347 | 〃 | 3.1 | 1.2 | 1.4 | 〃 | |
| 348 | 〃 | 3.9(f) | 1.7 | 1.3 | 〃 | |
| 349 | 〃 | 4.9(f) | 2.2 | 1.2 | 〃 | n，孔より |
| 350 | 〃 | 3.5(f) | 1.7 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 351 | 〃 | 3.5(f) | 2.2 | 0.9 | 〃 | n，孔より |
| 352 | 〃 | 3.8(f) | 2.4 | 1.9(f) | 〃 | n |
| 353 | 〃 | 3.6 | 2.2 | 0.9 | 〃 | k多 |
| 354 | 〃 | 3.1(f) | 2.6 | 1.1(f) | 〃 | 一部欠 |
| 355 | 〃 | 3.7(f) | 2.0 | 1.4(f) | 〃 | n |
| 356 | 〃 | 3.1(f) | 2.0 | 1.1(f) | 〃 | |
| 357 | 〃 | 3.2(f) | 2.1 | 1.3(f) | 〃 | n |
| 358 | 〃 | 3.5(f) | 2.1 | 1.1(f) | 〃 | k多，n |
| 359 | 〃 | 3.0(f) | 2.0 | 1.0(f) | 〃 | n |
| 360 | 〃 | 3.2 | 2.0 | 1.1 | 〃 | n |
| 361 | 〃 | 3.9(f) | 2.3 | 1.2(f) | 〃 | n，孔より |
| 362 | 〃 | 3.6(f) | 2.5 | 1.0 | 〃 | n |
| 363 | 〃 | 3.7(f) | 2.3 | 1.0 | 〃 | |
| 364 | 〃 | 4.0(f) | 3.0 | 1.1 | 〃 | |
| 365 | 〃 | 3.5(f) | 2.6 | 0.9 | 〃 | |
| 366 | 〃 | 4.0(f) | 2.2 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 367 | 〃 | 3.6(f) | 2.3 | 1.3(f) | 〃 | n |
| 368 | 〃 | 3.4 | 2.4 | 0.9 | 紫青色 | k多 |
| 369 | 〃 | 3.2(f) | 2.7 | 0.9 | 〃 | |
| 370 | 〃 | 3.9(f) | 2.6 | 1.5(f) | 青緑色 | |
| 371 | 〃 | 3.9(f) | 1.9 | 1.2(f) | 黄緑色 | |
| 372 | 〃 | 2.9(f) | 2.8 | 1.2(f) | 青緑色 | n |
| 373 | 〃 | 3.3(f) | 3.5 | 1.4(f) | 〃 | n |
| 374 | 〃 | 3.8(f) | 1.8 | 1.2(f) | 黄緑色 | n |
| 375 | 〃 | 4.3(f) | 2.6 | 1.1(f) | 濃緑色 | n |
| 376 | 〃 | 3.8 | 2.4 | 1.5(f) | 緑色 | n |
| 377 | 〃 | 3.3 | 3.2 | 1.3 | 〃 | n |
| 378 | 〃 | 3.9(f) | 2.9 | 1.0 | 青緑色 | n |
| 379 | 〃 | 3.7(f) | 2.2 | 1.3 | 〃 | |
| 380 | 〃 | 3.7 | 2.1 | 1.4 | 〃 | n |
| 381 | 〃 | 3.6(f) | 2.2 | 0.9 | 〃 | k多 |
| 382 | 〃 | 3.8(f) | 2.3 | 1.1 | 濃青緑色 | n |
| 383 | 〃 | 3.3 | 2.4 | 1.2 | 〃 | |
| 384 | 〃 | 3.6(f) | 2.5 | 1.3 | 〃 | |
| 385 | 〃 | 3.5 | 1.8 | 1.4 | 〃 | |
| 386 | 〃 | 3.3(f) | 2.3 | 1.2 | 〃 | |
| 387 | 〃 | 3.9(f) | 2.4 | 1.4 | 緑色 | |
| 388 | 〃 | 2.8 | 2.3 | 1.0 | 〃 | n |
| 389 | 〃 | 3.0(f) | 1.8 | 1.0(f) | 〃 | |
| 390 | 〃 | 3.8(f) | 1.9 | 1.3(f) | 黄緑色 | k多 |
| 391 | 〃 | 4.0(f) | 2.7 | 1.2(f) | 〃 | n |
| 392 | 〃 | 3.4(f) | 2.4 | 1.2 | 〃 | |
| 393 | 〃 | 3.7(f) | 2.7 | 1.4(f) | 〃 | k多，n |
| 394 | 〃 | 3.7(f) | 1.7 | 1.2(f) | 〃 | 一部欠 |
| 395 | 管玉 | 7.2 | 22.7 | 1.6/2.5 | 淡青緑色 | |
| 396 | 〃 | 7.0 | 22.6 | 2.0/2.3 | 〃 | |
| 397 | 〃 | 8.2 | 20.5 | 2.0/1.5 | 〃 | |
| 398 | 〃 | 6.2 | 18.8 | 1.5/2.5 | 〃 | |
| 399 | 〃 | 6.2 | 21.0 | 1.2/2.0 | 〃 | |
| 400 | 〃 | 7.9 | 23.9 | 1.3/2.0 | 濃緑色 | 一部欠 |
| 401 | 〃 | 7.8 | 21.9 | 1.7/2.1 | 〃 | |
| 402 | ガラス製小玉 | 6.1(f) | 3.9 | 1.0(f)/2.4(f) | 濃青色 | |
| 403 | 〃 | 4.8(f) | 3.0 | 1.4(f) | 緑色 | k多 |
| 404 | 滑石製臼玉 | 3.9 | 2.1 | 1.7 | 緑灰色 | WR |
| 405 | 〃 | 3.7(f) | 2.2 | 1.5(f) | 濃緑灰色 | WR |
| 406 | 〃 | 3.5 | 2.3 | 1.5 | 緑灰色 | WR |
| 407 | 〃 | 3.9 | 2.0 | 1.5 | 〃 | WR |
| 408 | 〃 | 3.7 | 2.8 | 1.7 | 〃 | |
| 409 | 〃 | 3.7 | 2.5 | 1.6 | 淡灰色 | WR |
| 410 | 滑石製臼玉 | 3.6 | 2.4 | 1.6 | 濃緑灰色 | WR |
| 411 | 〃 | 3.9 | 2.2 | 1.4(f) | 不明 | WR，鉄さび |
| 412 | 〃 | 3.7 | 2.3 | 1.4(f) | 濃緑灰色 | WR |
| 413 | 〃 | 3.6 | 2.4 | 1.4 | 緑灰色 | |
| 414 | 〃 | 3.7 | 2.1 | 1.4 | 〃 | WR |
| 415 | 〃 | 3.9 | 2.1 | 1.4(f) | 不明 | 鉄さび |
| 416 | 〃 | 3.6 | 2.2 | 1.5(f) | 緑灰色 | WR |
| 417 | 〃 | 3.6 | 1.9 | 1.4 | 〃 | |
| 418 | 〃 | 3.8 | 2.5 | 1.4 | 濃緑灰色 | WR |
| 419 | 〃 | 3.8 | 2.4 | 1.4 | 緑灰色 | WR |
| 420 | 〃 | 4.0 | 2.1 | 1.5 | 濃緑灰色 | WR |
| 421 | 〃 | 3.8 | 2.4 | 1.4 | 不明 | 鉄さび |
| 422 | 〃 | 3.6 | 2.1 | 1.7(f) | 緑灰色 | WR |
| 423 | 〃 | 3.8 | 1.8 | 1.4 | 濃緑灰色 | WR |
| 424 | 〃 | 3.9(f) | 2.0 | 1.4 | 緑灰色 | n |
| 425 | 〃 | 3.9 | 2.2 | 1.5 | 濃緑灰色 | WR |
| 426 | 〃 | 3.8 | 2.0 | 1.5 | 灰色 | |
| 427 | 〃 | 3.7 | 1.9 | 1.5 | 緑灰色 | WR |
| 428 | 〃 | 3.6 | 2.0 | 1.4 | 濃緑灰色 | WR |
| 429 | 〃 | 3.9 | 2.2 | 1.5 | 不明 | WR |
| 430 | 〃 | 3.6 | 1.9 | 1.6 | 緑灰色 | WR |
| 431 | 〃 | 3.9 | 2.0 | 1.5 | 〃 | WR |
| 432 | 〃 | 3.6 | 2.4 | 1.4 | 〃 | WR，n |
| 433 | 〃 | 3.7(f) | 2.0 | 1.5(f) | 淡灰色 | WR，n |
| 434 | 〃 | 3.8 | 2.3 | 1.5 | 濃緑灰色 | WR |
| 435 | 〃 | 3.6 | 2.7 | 1.4 | 淡灰色 | WR |
| 436 | 〃 | 3.8 | 2.2 | 1.5 | 淡青灰色 | WR，一部欠 |
| 437 | 〃 | 3.5 | 2.0 | 1.5(f) | 緑灰色 | WR |
| 438 | 〃 | 3.5 | 1.9 | 1.5 | 〃 | WR，n |
| 439 | 〃 | 3.6 | 1.9 | 1.5(f) | 不明 | 鉄さび |
| 440 | 〃 | 3.6 | 1.9 | 1.5 | 淡灰色 | WR |
| 441 | 〃 | 3.5(f) | 2.5 | 1.4 | 緑灰色 | |
| 442 | 〃 | 3.7 | 2.6 | 1.6 | 〃 | WR |
| 443 | 〃 | 3.6 | 2.4 | 1.4 | 〃 | WR |
| 444 | 〃 | 3.8 | 1.9 | 1.3 | 〃 | WR |
| 445 | 〃 | 3.7 | 1.9 | 1.5(f) | 濃緑灰色 | WR |
| 446 | 〃 | 3.6 | 2.3 | 1.3(f) | 緑灰色 | WR |
| 447 | 〃 | 3.6 | 2.1 | 1.4 | 〃 | WR |
| 448 | 〃 | 3.7 | 2.3 | 1.6 | 不明 | 鉄さび |
| 449 | 〃 | 3.9 | 2.3 | 1.5 | 不明 | WR，鉄さび |
| 450 | 〃 | 3.6 | 1.9 | 1.4 | 緑灰色 | |
| 451 | 〃 | 3.7 | 2.1 | 1.4(f) | 淡灰色 | |
| 452 | 〃 | 3.5 | 2.3 | 1.5(f) | 緑灰色 | |
| 453 | 〃 | 3.7 | 2.1 | 1.4 | 淡青灰色 | |
| 454 | 〃 | 3.4 | 2.6 | 1.6 | 淡灰色 | |
| 455 | 〃 | 3.8(f) | 2.6 | 1.7 | 緑灰色 | WR |
| 456 | 〃 | 3.8(f) | 2.3 | 1.2(f) | 不明 | 鉄さび |
| 457 | 〃 | 3.7 | 2.5 | 1.5(f) | 緑灰色 | WR |
| 458 | 〃 | 3.5 | 2.9 | 1.6 | 〃 | |
| 459 | 〃 | 3.6 | 2.3 | 1.4 | 〃 | WR，孔より |
| 460 | 〃 | 3.6 | 2.2 | 1.6(f) | 〃 | WR |
| 461 | 〃 | 3.8 | 2.4 | 1.6 | 〃 | WR |
| 462 | 〃 | 3.6 | 2.4 | 1.4(f) | 〃 | WR，孔より |
| 463 | 〃 | 3.6 | 2.4 | 1.5(f) | 〃 | WR |
| 464 | 〃 | 3.7 | 2.2 | 1.2(f) | 不明 | WR，鉄さび |
| 465 | 〃 | 3.7 | 2.2 | 1.6(f) | 緑灰色 | |
| 466 | 〃 | 3.7(f) | 2.5 | 1.6 | 不明 | WR，鉄さび，n |
| 467 | 〃 | 3.8 | 1.8 | 1.4 | 緑灰色 | WR |
| 468 | 〃 | 3.8 | 1.9 | 1.7 | 濃緑灰色 | WR |
| 469 | 〃 | 3.6 | 1.7 | 1.5 | 淡灰色 | WR |
| 470 | 〃 | 3.8 | 2.4 | 1.6 | 緑灰色 | WR |
| 471 | 〃 | 3.5(f) | 2.2 | 1.5(f) | 〃 | 孔より |
| 472 | 〃 | 3.9 | 2.1 | 1.5(f) | 〃 | WR |
| 473 | 〃 | 3.7 | 2.0 | 1.5 | 濃緑灰色 | WR |
| 474 | 〃 | 3.8(f) | 2.4 | 1.4(f) | 緑灰色 | WR，鉄さび |
| 475 | 〃 | 3.7 | 2.4 | 1.7(f) | 〃 | WR |
| 476 | 〃 | 3.7 | 2.5 | 1.3 | 淡青灰色 | |
| 477 | 〃 | 3.8 | 2.0 | 1.4(f) | 濃緑灰色 | WR |
| 478 | 〃 | 3.8(f) | 1.9 | 1.5(f) | 緑灰色 | WR |
| 479 | 〃 | 3.7 | 2.8 | 1.2 | 不明 | 鉄さび |
| 480 | 〃 | 3.7(f) | 2.5 | 1.4 | 緑灰色 | WR |
| 481 | 〃 | 3.5 | 2.2 | 1.4 | 〃 | |
| 482 | 〃 | 3.5 | 1.6 | 1.6(f) | 〃 | |
| 483 | 〃 | 3.7 | 2.2 | 1.5 | 濃緑灰色 | WR，鉄さび |
| 484 | 〃 | 3.8 | 1.7 | 1.6 | 緑灰色 | WR |
| 485 | 〃 | 3.7 | 2.2 | 1.6 | 〃 | WR，鉄さび |
| 486 | 〃 | 3.5 | 2.8 | 1.5 | 淡灰色 | 鉄さび |
| 487 | 〃 | 3.6 | 2.0 | 1.5 | 不明 | WR |
| 488 | 〃 | 3.8 | 2.7 | 1.4 | 〃 | 鉄さび |
| 489 | 〃 | 3.8 | 2.3 | 1.6 | 濃緑灰色 | WR |
| 490 | 〃 | 3.6 | 2.2 | 1.6 | 緑灰色 | WR，鉄さび |
| 491 | 〃 | 3.5 | 2.4 | 1.5 | 〃 | WR |
| 492 | 〃 | 3.8(f) | 2.5 | 1.3(f) | 不明 | 鉄さび |
| 493 | 〃 | 3.6 | 1.8 | 1.6 | 緑灰色 | WR |
| 494 | 〃 | 3.8 | 2.4 | 1.5 | 〃 | WR，一部欠 |
| 495 | 〃 | 3.6(f) | 2.1 | 1.6 | 濃緑灰色 | WR，鉄さび |
| 496 | 〃 | 3.7(f) | 2.0(f) | 1.5 | 緑灰色 | WR |
| 497 | 〃 | 3.9 | 1.6 | 1.6 | 〃 | WR |
| 498 | 〃 | 3.9(f) | 1.8 | 1.5 | 不明 | 鉄さび |
| 499 | 〃 | 3.6(f) | 2.3 | 1.5 | 〃 | 鉄さび，一部欠 |
| 500 | 〃 | 3.7(f) | 2.2 | 1.5(f) | 濃緑灰色 | WR，一部欠 |
| 501 | 〃 | 3.5 | 2.1 | 1.7(f) | 淡灰色 | 鉄さび |
| 502 | 〃 | 3.7(f) | 2.2 | 1.4 | 不明 | WR，鉄さび |
| 503 | 〃 | 3.8 | 2.0 | 1.4 | 〃 | WR，鉄さび |
| 504 | 〃 | 3.7 | 2.6 | 1.6(f) | 緑灰色 | WR，鉄さび |
| 505 | 〃 | 3.7 | 2.3 | 1.7(f) | 〃 | WR |
| 506 | 〃 | 3.9 | 2.2 | 1.5 | 〃 | WR |
| 507 | 〃 | 3.7(f) | 2.0 | 1.4(f) | 〃 | WR，一部欠 |
| 508 | 〃 | 3.5 | 2.4 | 1.3(f) | 淡灰色 | WR，鉄さび |
| 509 | 〃 | 3.7 | 2.2 | 1.5(f) | 濃緑灰色 | WR |
| 510 | 〃 | 3.6 | 1.9 | 1.5 | 緑灰色 | |
| 511 | 〃 | 3.8 | 2.4 | 1.5 | 〃 | WR，n |
| 512 | 〃 | 4.0 | 2.2 | 1.5 | 〃 | WR |
| 513 | 〃 | 3.8 | 2.0 | 1.5 | 〃 | WR |
| 514 | 〃 | 3.8 | 2.6 | 1.4 | 不明 | 鉄さび，n |
| 515 | 〃 | 3.6 | 1.9 | 1.5 | 〃 | WR |
| 516 | 〃 | 3.9 | 1.6 | 1.6 | 濃緑灰色 | WR |
| 517 | 滑石製臼玉 | 3.6 | 1.9 | 1.4 | 緑灰色 | |
| 518 | 〃 | 3.4 | 2.0 | 1.5 | 〃 | |
| 519 | 〃 | 3.8 | 1.7 | 1.5 | 〃 | WR |
| 520 | 〃 | 3.4(f) | 2.5 | 1.3 | 濃緑灰色 | WR |
| 521 | 〃 | 3.6 | 1.7 | 1.4 | 〃 | |
| 522 | 〃 | 3.7 | 2.0 | 1.5 | 灰褐色 | |
| 523 | 〃 | 3.7 | 2.5 | 1.4 | 濃緑灰色 | WR |
| 524 | 〃 | 3.7 | 2.2 | 1.5 | 〃 | |
| 525 | 〃 | 3.4 | 1.6 | 1.4 | 緑灰色 | WR |
| 526 | 〃 | 3.7 | 2.0 | 1.4 | 淡灰色 | |
| 527 | 〃 | 3.7 | 1.8 | 1.6 | 緑灰色 | |
| 528 | 〃 | 3.8(f) | 2.0 | 1.7 | 〃 | WR |
| 529 | 〃 | 3.6 | 1.7 | 1.7(f) | 濃緑灰色 | WR |
| 530 | 〃 | 3.6 | 2.0 | 1.4 | 不明 | 鉄さび |
| 531 | 〃 | 3.8(f) | 1.8 | 1.5 | 淡灰色 | WR |
| 532 | 〃 | 3.8 | 1.9 | 1.6(f) | 濃緑灰色 | WR |
| 533 | 〃 | 4.0 | 1.7 | 1.5(f) | 緑灰色 | WR，鉄さび |
| 534 | 〃 | 3.9 | 2.0 | 1.5 | 淡灰色 | 鉄さび |
| 535 | 〃 | 3.5 | 1.5 | 1.5(f) | 緑灰色 | |
| 536 | 〃 | 3.6 | 2.0 | 1.3 | 〃 | 鉄さび |
| 537 | 〃 | 3.7(f) | 1.8(f) | 1.5 | 灰褐色 | WR |
| 538 | 〃 | 3.7 | 2.2 | 1.4 | 緑灰色 | WR，鉄さび |
| 539 | 〃 | 3.8 | 1.9 | 1.4 | 灰褐色 | WR |
| 540 | 〃 | 3.4 | 1.7 | 1.4(f) | 濃緑灰色・黒灰色 | WR |
| 541 | 〃 | 3.6 | 2.3 | 1.4 | 緑灰色 | |
| 542 | 〃 | 3.6 | 2.0 | 1.5(f) | 〃 | WR，n |
| 543 | 〃 | 3.5 | 1.2 | 1.4 | 〃 | |
| 544 | 〃 | 3.7 | 1.4 | 1.4 | 淡灰色 | |
| 545 | 〃 | 3.7 | 2.1 | 1.2 | 不明 | WR，鉄さび |
| 546 | 〃 | 3.7(f) | 2.3 | 1.4(f) | 緑灰色 | 鉄さび，½欠 |
| 547 | 〃 | 3.6 | 2.4 | 1.3 | 不明 | 鉄さび |
| 548 | 〃 | 3.6 | 1.9 | 1.5 | 淡灰色 | |
| 549 | 〃 | 3.6 | 2.0 | 1.3(f) | 不明 | WR，鉄さび |
| 550 | 〃 | 3.5 | 1.9 | 1.4 | 緑灰色 | 鉄さび |
| 551 | 〃 | 3.8(f) | 2.4 | 1.4(f) | 不明 | WR，鉄さび |
| 552 | 〃 | 3.6(f) | 2.3 | 1.4(f) | 緑灰色 | 孔より |
| 553 | 〃 | 3.4 | 2.6 | 1.5 | 〃 | WR，鉄さび |
| 554 | 〃 | 3.6(f) | 1.8 | 1.5(f) | 〃 | n |
| 555 | 〃 | 3.7 | 2.2 | 1.4 | 淡青灰色 | 鉄さび |
| 556 | 〃 | 3.9(f) | 2.5 | 1.3(f) | 不明 | 鉄さび |
| 557 | 〃 | 3.6 | 1.4 | 1.4(f) | 淡灰色 | |
| 558 | 〃 | 3.7 | 2.0 | 1.5(f) | 不明 | WR，鉄さび |
| 559 | 〃 | 3.7 | 1.7 | 1.4(f) | 濃緑灰色 | WR |
| 560 | 〃 | 3.9(f) | 2.5 | 1.4 | 不明 | 鉄さび |
| 561 | 〃 | 3.8(f) | 1.9 | 1.3(f) | 不明 | WR，鉄さび |
| 562 | 〃 | 3.8 | 1.5 | 1.3(f) | 淡灰色 | 鉄さび，孔より |
| 563 | 〃 | 3.8 | 1.7 | 1.4 | 不明 | WR，鉄さび |
| 564 | 〃 | 3.5 | 1.2 | 1.7 | 緑灰色 | |
| 565 | 〃 | 3.8 | 1.7 | 1.3 | 不明 | 鉄さび |
| 566 | 〃 | 3.5(f) | 2.0 | 1.2 | 〃 | 鉄さび |
| 567 | 〃 | 3.6 | 1.8 | 1.4 | 〃 | 鉄さび |
| 568 | 〃 | 3.6(f) | 2.0 | 1.4 | 緑灰色 | 鉄さび，孔より |
| 569 | 〃 | 3.8(f) | 2.8 | 1.4 | 不明 | 鉄さび，n |
| 570 | 〃 | 3.7(f) | 2.3 | 1.4 | 〃 | 鉄さび |
| 571 | 〃 | 3.8(f) | 2.1 | 1.4(f) | 緑灰色 | 鉄さび，孔より |
| 572 | 〃 | 3.6(f) | 2.2 | 1.5(f) | 淡灰色 | WR，一部欠 |
| 573 | 〃 | 3.5 | 1.3 | 1.5 | 緑灰色 | |
| 574 | 〃 | 3.8(f) | 2.4 | 1.5(f) | 〃 | WR，n |
| 575 | 〃 | 3.8(f) | 2.4 | 1.4(f) | 不明 | 鉄さび |
| 576 | 〃 | 3.8(f) | 1.4 | 1.3(f) | 〃 | 鉄さび，n |
| 577 | 〃 | 3.7(f) | 1.3 | 1.3(f) | 濃緑灰色 | |
| 578 | 〃 | 3.7 | 1.0 | 1.5 | 緑灰色 | |
| 579 | 〃 | 3.8(f) | 2.3 | 1.4(f) | 〃 | 鉄さび |
| 580 | 〃 | 3.7 | 1.2 | 1.5 | 〃 | |
| 581 | 〃 | 3.7 | 2.0 | 1.5 | 不明 | 鉄さび，¾欠 |
| 582 | 〃 | 3.7(f) | 2.4 | 1.4(f) | 緑灰色 | 鉄さび，n |
| 583 | 〃 | 3.7(f) | 1.6 | 1.3 | 〃 | |
| 584 | 〃 | 3.6 | 1.6 | 1.4 | 淡灰色 | |
| 585 | 〃 | 3.8(f) | 1.6 | 1.2 | 不明 | 鉄さび，一部欠 |
| 586 | 〃 | 3.5 | 1.8 | 1.3 | 緑灰色 | 鉄さび |
| 587 | 〃 | 3.6(f) | 1.4 | 1.5(f) | 淡灰色 | 鉄さび，孔より |
| 588 | 〃 | 3.8 | 1.7 | 1.2 | 〃 | 鉄さび |
| 589 | 〃 | 3.5 | 1.8 | 1.3 | 緑灰色 | WR，鉄さび |
| 590 | 〃 | 3.4(f) | 2.7 | 1.3 | 〃 | ½欠 |
| 591 | 〃 | 3.7(f) | 1.7 | 1.4 | 〃 | WR，鉄さび，一部欠 |
| 592 | 〃 | 3.6(f) | 1.7 | 1.5(f) | 〃 | 鉄さび，孔より，一部欠 |
| 593 | 〃 | 3.6 | 1.5 | 1.5 | 〃 | WR |
| 594 | 〃 | 3.7(f) | 2.0 | 1.5(f) | 〃 | 鉄さび |
| 595 | ガラス製小玉 | 2.7 | 2.3 | 1.1 | 濃青色 | n |
| 596 | 〃 | 2.8 | 1.9 | 1.4 | 〃 | |
| 597 | 〃 | 2.5 | 2.2 | 0.8 | 緑紫青色 | n |
| 598 | 〃 | 3.1 | 2.4 | 0.6 | 黄緑色 | ½欠 |
| 599 | 〃 | 3.7 | 2.7 | 1.2 | 紫青色 | n |
| 600 | 〃 | 2.9 | 1.4 | 1.0 | 濃青色 | |
| 601 | 〃 | 2.9 | 1.6 | 1.2 | 緑紫青色 | 一部欠 |
| 602 | 〃 | 2.5(f) | 1.5 | 1.0 | 紫青色 | |
| 603 | 〃 | 2.6(f) | 1.1 | 0.8 | 〃 | |
| 604 | 〃 | 2.5 | 1.5 | 0.8 | 〃 | |
| 605 | 〃 | 2.5 | 1.7 | 0.8 | 〃 | 一部欠 |
| 606 | 〃 | 2.7 | 1.8 | 1.0 | 緑紫青色 | |
| 607 | 〃 | 2.3 | 1.5 | 1.1 | 〃 | n |
| 608 | 〃 | 2.2 | 1.4 | 1.0 | 濃青色 | |
| 609 | 〃 | 2.6 | 1.3 | 1.0 | 〃 | |
| 610 | 〃 | 3.2 | 2.4 | 0.9 | 黄緑色 | |
| 611 | 〃 | 2.9(f) | 1.7 | 1.1 | 〃 | |
| 612 | 〃 | 2.8 | 2.3 | 0.9 | 〃 | |
| 613 | 管玉 | 6.2 | 26.2 | 1.4/1.0 | 濃緑色 | n，風化 |
| 614 | 〃 | 6.7 | 24.8 | 1.2/1.1 | 〃 | 風化 |
| 615 | 〃 | 5.2 | 20.3 | | 〃 | n，風化 |
| 616 | 〃 | 6.0 | 16.2 | 1.2/2.5 | 〃 | 一部欠，風化 |
| 617 | 〃 | 3.9(f) | 10.0 | 1.3 | 緑色 | 孔より，一部欠，風化 |
| 618 | ガラス製小玉 | 5.5 | 4.9 | 2.3 | 暗青色 | k多，風化 |
| 619 | 〃 | 4.7(f) | 4.3 | 2.0(f) | 濃青色 | n |
| 620 | 滑石製臼玉 | 4.8 | 2.0 | 1.4 | 暗褐色 | WR，風化 |
| 621 | ガラス製小玉 | 8.5(f) | 4.8 | 2.0(f) | 紫青色 | 孔より |

凡例

外径，孔径で不整円・長円のもの及び厚さが不定のものは，各々の最大値を採り，孔径が両面で異なるものは，任意に上下として双方を記した。

略号の意味は，下記のとおりである。

- ○不整円・長円 …… (f)
- ○気泡が多い …… k多
- ○気泡穴が多い …… k穴多
- ○片面及び両面が傾斜 …… n
- ○縁が角ばっているもの …… I
- ○そろばん玉状を呈するもの …… S
- ○球状を呈するもの …… Q
- ○体部にわずかに稜が認められるもの …… WR
- ○孔の位置が片寄っているもの …… 孔より
- ○鉄さびが著しく付着しているもの …… 鉄さび

## ２．その他の遺構と遺物

**竪穴式住居跡**（第22図）

竪穴式住居跡は，本遺跡のほぼ中央に位置する第２号古墳の西約28ｍの地点にあり，東へのぴる尾根の緩傾斜面から検出された。住居跡の北側は谷地形となっている。住居跡は円形に近いプランを呈し，直径約5.3ｍを測る。壁高は西側で最高85㎝を測るが，住居の立地の関係上，北側の壁の一部は検出されなかった。

住居跡の西半分では，壁は二段になっている。これは，地山をまず約45°の角度で掘り込み，次に60°弱の角度で床面まで掘り込んでおり，壁の崩落を防ぐために行われたと考えられる。

住居跡内には，掘り方の見られない北側の一部を除いて幅10㎝～20㎝，深さ約５㎝の壁溝が壁の下端に接してめぐらされている。床面からはピットが６か所（P1～P6）検出された。このうち，P1～P4は，位置，規模から主柱穴と考えられる。各柱穴は，壁から約１ｍ内側の位置に配され柱穴間の距離は，P1－P4，P2－P3が240㎝前後，P1-P2，P4-P3が190㎝前後を測る。柱穴の大きさは，径20㎝～25㎝，深さ20㎝～35㎝を測る。P5，P6については形状，位置から柱穴とは考えにくい。従って本庄居は，４本柱の住居と考えられる。また，住居跡内のほぼ中央から，床面に接して不整形の焼土，P3の南から炭化物が検出された。

遺物としては，P1の南から石斧，南西隅から鉄片が出土し，その他に少量の弥生土器片が出土しているが，鉄片は小片のためその性格は不明である。

この住居跡の西壁の外側約２ｍの地点から，南北方向約５ｍにわたり柱穴と考えられるピット６か所（P7～P12）が検出された。柱穴の深さ及び底面のレベルはともに一定していないが，径はP10が20㎝とやや小形なのを除けば，30㎝前後でほぼ一定している。またP7－P8－P11－P12の柱穴間の距離は1.5ｍ～1.8ｍとほぼ等間隔である。このことから，柵列状の構造物が想定されるが，これに伴う遺物が出土しておらず，本住居跡との関連及びその性格については明らかにはできない。

**第１号住居跡状遺構**（第23図）

本遺構は，竪穴式住居跡の西約15ｍ，東へのびる尾根の傾斜面より検出された。尾根を高い方から隅丸の「コ」の字状に掘り込み平担面をつくったものである。

現存する壁は，南北方向304㎝，東西方向は北側で23㎝，南側で63㎝，高さは最高で30㎝を測る。なお，平担面の範囲は，地山が傾斜しているため，確認できなかった。

壁付近からはピットが３か所，壁内の北端と中央，南側の壁外から各１が検出された。規模は，北端のものが径30㎝，深さ44㎝，中央のものが径19㎝×24㎝，深さ33㎝，壁外のものが径８㎝×17㎝，深さ32㎝を測る。これらのピットは位置，規模，形状から考えて相互の関連に乏しく，性格については明確にできない。

本遺構は，壁の検出状況からみて住居跡の可能性があるが，明確な柱穴が見い出されず，遺物についても，埋土中及び周辺の斜面から弥生土器の小片が少量出土したが，本遺構に伴うと考えられるものはなく，その性格は明確にできなかった。

**第２号住居跡状遺構**（第23図）

本遺構は，竪穴式住居跡の東約59ｍの地点から検出した。北東へ下る斜面を掘り込んで平担面をつくったものである。現存する壁はＬ字状を呈し，長辺205㎝，短辺38㎝，高さは長辺の中央部で最高20㎝を測る。なお，平担面の範囲は，地山が傾斜しているため確認できなかった。

この平担面の南半分から，不整形の焼土，炭化物，土器がいずれも地山上10㎝前後の高さで検出された。なお，炭化物は，短辺側の壁外からも検出されている。本遺構は，出土遺物からみて，住居跡の可能性が考えられるが，柱穴，壁溝等の遺構がみられず確認できなかった。

また，住居跡状遺構の南から尾根と直交するように掘り込んでつくった平担面が検出された。現存する壁は，長さ約７m，高さは最高で53㎝を測る。平担面の範囲は，地山が尾根先端に向かってゆるやかに傾斜しているため確認できなかった。この平担面からは，径20㎝～25㎝，深さ15㎝～27㎝を測る小ピットが３か所検出された。これらのピットは，位置，形状など関連性が乏しく，その性格については不明である。また，北端から50㎝×75㎝，深さ９㎝の不整形の土壙が検出された。この平担面は，これに伴う遺物が出土していないこともあって，その性格は不明である。

なお，この平担面の壁の北端から北西方向に向かって約６mの範囲で地山を削り取った痕跡が検出されたが，第２号住居助状遺構及びこの平担面との関連，性格は不明である。（第16図参照）

**第１号土壙**（第24図）

第１号土壙は，本遺跡の西端に位置し，後世の地形変更による尾根北側の崖面付近から検出された。この土壙は，東半分が第２号土壙と重複しているが，新旧関係は確認できなかった。そのため土壙の掘り方は，西側の一部しか検出されなかったが，その形状から上縁部，底部とも円形に近いプランをもち，上縁径160㎝，底径130㎝程度と推定される。深さは現存部で最高142㎝を測る。

なお，この土壙に伴うと考えられる遺物は出土しなかったため，性格については不明である。

**第２号土壙**（第24図）

第２号土壙は，第１号土壙の東半分と重複し，崖面付近から検出された。後世の地形変更を受けているため，上縁部は，ほとんどが消滅しているが，底部は大部分が現存していた。上縁部，底部ともに円形に近いプランをもつと推定される。規模は，上縁部の規模については明確にはできないが，底部は，直径125㎝～140㎝程度と推定される。深さは現存部で最高107㎝を測る。

なお，この土壙に伴うと考えられる遺物は出土しなかったため，性格については不明である。

**第３号土壙**（第24図）

第３号土壙は，第２号土壙の北東約22m，第３号古墳の墳丘内から検出した。土層断面の観察により，この土壙は，第３号古墳の墳丘を掘り込んでつくられていることを確認した。

土壙の上縁部は長円形を呈し，径158㎝～190㎝，底部はほぼ円形で径153㎝を測る。断面の形態はわずかに袋状を示し，深さは40㎝～80㎝を測る。また，底面は平担である。

なお，土壙の底から約15㎝の間で，埋土中から多量の炭化物の細片が検出された。形態から考えて貯蔵穴の可能性が考えられるが，遺物がないこと，これに伴う遺構が周辺に見られないことなどから，性格については明らかにできなかった。

**第４号土壙**（第25図）

第４号土壙は，第３号土壙の南東約13mの地点にある。本土壙は，西側の一部が第５号土壙と重複しているが，新旧関係は確認できなかった。なお，本土壙は，後世の地形変更のため南側の部分を欠いている。

この土壙は，北端で幅が広くなり，南側を欠いているが，ほぼ長方形のプランを呈し，長軸はN 33°Eを指す。規模は，現存部で長さ112㎝，幅60㎝～77㎝，深さは北側で最高26㎝を測る。土壙内からは土器小片が出土した。形態から，墓壙の可能性が考えられよう。

**第５号土壙**（第25図）

第５号土壙は，東側の一部で第４号土壙と重複している。この土壙は，後世の地形変更もあって掘り方の一部を欠いており，形態的にはかなり不整となっているが，ほぼ長方形のプランをもち，長軸は，N 24°Eを指す。規模は，現存部で長さ174㎝，幅55㎝～76㎝，深さは西測の北寄りで最高32㎝を測る。

なお，土壙内から遺物は出土していないため，その性格については不明である。

**第６号土壙**（第25図）

第６号土壙は，第１号住居跡状遺構の南に隣接している。本土壙は後世の地形変更により，南側の一部を欠くが，ほぼ長方形のプランを呈し，長軸はN７°Wとほぼ南北を指す。規模は，現存部で長さ182㎝，幅は北端で最大69㎝を測り，南へいくに従って狭くなる。深さは西側の中央で最高32㎝を測り，底面は平担である。

なお，土壙内から遺物は出土していないため，性格については不明である。

**第７号土壙**（第26図）

第７号土壙は，第６号土壙の東約５ｍの地点から検出された。本土壙は，後世の地形変更により中央部分を欠くが，長方形のプランを呈し，長軸はN17°Eを指す。規模は，長さ253㎝，幅54㎝～74㎝を測る。深さは24㎝～63㎝を測り，底面は平担である。

なお，土壙内から遺物は出土しなかったため，その性格については不明である。

**第８号土壙**（第26図）

第８号土壙は，第７号土壙の西約５ｍの地点にあり，竪穴式住居跡の南東に近接する。

本土壙は，後世の地形変更により，南側の部分を欠くが，長方形のプランを呈すると推定され，主軸はN21°Eを指す。規模は，現存部で長さ180㎝，幅62㎝～86㎝を測る。深さは，北側で最高35㎝を測り，底面は平担である。

なお，土壙内から遺物は出土していないため，性格については不明である。

**遺　物**

遺物は，弥生土器，石斧及び銅鏡などが出土した。このうち，石斧は竪穴式住居跡内からの出土であり，銅鏡とほとんどの弥生土器は，遺構に伴わないものである。

弥生土器（第34図，第35図）

調査区域全体から弥生土器の破片が出土しているが，小片のものがほとんどであるため，図示し得たものは少ない。そのうち遺構に伴うものは３点（１，３，４）のみであり，他のほとんどは，斜面から流れ込みの状態で出土している。器種は甕が多いが，壷，高坏なども少量出土している。

出土土器のうちの多くは，竪穴式住居跡北側の斜面から出土している。これらは，腐植土中から少量の貝殻とともに，比較的集中して出土したもので，本来一か所にあったものが，後世の地形変更に伴い散乱したと推定される。

また，小片のため図示できなかった土器のうち，第４号土壙内出土のものに，甕の口縁部と考えられるものがある。

なお，個々の出土土器については，観察表（第４表）として後掲する。

石　斧（第35図）

石斧は，竪穴式住居跡のP1の南，床面直上から出土したものである。石材は流紋岩質のもので完形品である。長さ12.8㎝，刃部幅5.6㎝，厚さは中央で2.8㎝，重さは305ｇを測り，全体にうすい感じを与える。刃部は，形態的には蛤刃と考えられるが，片側のみ研磨され，稜が認められる。

銅　鏡（第36図）

銅鏡は，第２号住居跡状遺構とその南にある平担面の間から出土した。この銅鏡は，地山面上約10㎝の高さで，鏡背面を上に向け，東側に傾いて出土しており，上方からの流れ込みの可能性がある。上方には，第２号古墳の東側斜面に設けられた墳丘外の埋葬主体があるが，銅鏡の周辺からは古墳時代のものと考えられる遺物は出土していない。一方，銅鏡とほぼ同一の高さで若干量の弥生土器の小片が出土している。

銅鏡は，内行花文鏡の　から内区にかけての破片である。大きさは，5.3㎝×6.8㎝で長円形を呈し，厚さは端部で1.6㎝を測る非常に薄いもので，重量は，33ｇを測る。銅質は非常に良好で白銅質であり，表裏とも淡黒色を呈し，全体に光沢がある。全体に研磨がほどこされているが，とくに，破面は丸みをもつほどていねいに研磨されており，再使用されたことがわかる。

鉦は，半球形を呈し，径2.2㎝，高さ1.0㎝，鉦孔幅0.6㎝を測る。鉦座は四葉座であり，間にかすかに「長宜子孫」の銘文が読みとれる。この外面に平頂素圏帯がめぐり，内行花文帯にいたる。内行花文帯には，５花文が現存するが，本来は８花文あったものと推定され，内区外側の推定直径は7.6㎝となる。花文間に銘及び文様はみられない。

**小　結**

今回の調査で検出された遺構のうち，古墳以外のものは，竪穴式住居跡１基，住居跡状遺構２基，土壙８基である。これらは，第２号住居跡状遺構を除き，すべて遺跡の西寄りに位置する。

竪穴式住居跡は，４本柱のものであり，直径約5.3ｍの円形に近いプランをもつ。住居跡内からは，少量の弥生土器片，石斧などが出土している。住居跡状遺構は，その性格を明らかにすることはできなかったが，第２号住居跡状遺構内からは，焼土，炭化物とともに弥生土器２点が出土している。土壙は，第１号土壙から第３号土壙までの３基が，基本的には円形のプランを呈し，他は長方形のプランを呈する。第４号土壙からは，少量ではあるが，弥生土器片が出土しており，墓壙の可能性もある。その他の土壙からは，遺物は出土しておらず，その性格及び時期については不明であるが，第３号土壙については，土層断面の観察の結果，第３号古墳よりも新しいことを確認した。

本遺跡からは，遺跡全体にわたって弥生土器の破片が出土しているが，遺構に伴うものは少なく，出土土器から年代を推定で'きるものは，第２号住居跡状遺構と第４号土壙だけである。第２号住居跡状遺構からは，２点（第34図３，４）の弥生土器が出土している。いずれも，甕の口縁部から胴部にかけての破片である。３は，口縁部はゆるやかに外反し，端部はわずかに下方に肥厚する。内面の胴部はヘラ削り，外面の胴部にはヘラナデがみられる。４は，口縁部はゆるやかに外反し，端部はわずかに厚みを減じ，平らに仕上げている。内面の胴部はヘラ削り，外面の胴部にはハケ目がみられる。

これらの土器の特徴から，第２号住居跡状遺構の年代は，弥生時代後期後半に求められよう。

第４号土壙内出土の土器は，小片のため図示し得なかったが，甕の口縁部と考えられるものがある。これは，「く」の字状に外反する口縁で，端部を平らに仕上げている。この土器の特徴から，第４号土壙の年代も弥生時代後期後半に求められよう。

なお，竪穴式住居跡からも少量の弥生土器片が出土しているが，図示し得たものは，二重口縁を呈する壷の口縁部（第34図１）のみである。したがって年代の推定は困難であるが，この土器を手がかりとすれば，弥生時代後期後半とみられよう。

本遺跡出土の弥生土器のほとんどは，斜面から流れ込みの状態で出土している。これらの土器には，若干古い特徴をもつもの（第34図２，第35図17）もあるが，多くのものは太田川下流域の弥生時代後期後半の土器に共通する特徴をもつようである。

今回の調査の結果，本遺跡は，弥生時代後期後半を中心とした時期に集落が営まれていたことを確認した。調査区域全域から，弥生土器が出土することから，さらに多くの遺構が存在していたと考えられるが，今回の調査では検出できなかった。このことから，古墳築造時にかなりの弥生時代の遺構が破壊された可能性も想定できよう。

# 第４表　池の内遺跡出土弥生土器観察表

| 器種 | 番号 | 出土地点 | 法　量(cm) | 形態について | 成形・調整について | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 壺 | 1 | 竪穴式住居跡 | 口径（推定）<br>8.2 | 外反する口縁の上半部は，大きく内傾し二重口縁となっている。<br>口縁端部は厚みを減じる。 | 磨滅が著しく調整は不明。 | 色調：褐色<br>胎土：良好<br>焼成：不良 |
| | 2 | 第１号，第２号土壙東側（斜面） | 不　明 | 頸部のみ残存している。 | 内面はハケ目後，ていねいなナデ。<br>外面は頸部に断面三角形の凸帯を貼り付け，凸帯以上はヨコナデ。<br>凸帯の下はナデ後，４条単位の波状文を２本めぐらせ，その間に３条の凹線をめぐらせている。 | 色調：内面褐色<br>外面橙褐色<br>胎土：大粒の砂粒を含むが良好<br>焼成：良好 |
| 甕 | 3 | 第２号住居跡状遺構 | 口径（推定）<br>10.9 | 口縁部はゆるやかに外反し，端部はわずかに下方に肥厚する。 | 内面は，口縁部から頸部はヨコナデ。胴部はヘラ削り後ナデ。<br>外面は，口縁上半部ヨコナデ，口縁下半部から頸部はハケ目後ヨコナデ，胴部はヘラナデ。胴部下半はヘラナデの痕跡が顕著。 | 色調：内面褐色<br>外面橙褐色<br>胎土：良好<br>焼成：やや軟調 |
| | 4 | 第２号住居跡状遺構 | 口径（推定）<br>14.6<br>胴部最大径<br>21.4 | 口縁部はゆるやかに外反する。端部はわずかに厚みを減じ平らに仕上げている。<br>胴部の張りは小さい。 | 内面は口縁部から頸部は，ヨコナデ，胴部はヘラ削り後ナデ。<br>外面は，口縁部から頸部はヨコナデ，胴部は，ハケ目後ナデ。胴部下半は，ハケ目の痕跡が顕著。 | 色調：淡褐色<br>胎土：良好<br>焼成：やや軟調<br>外面胴部下半にスス付着 |
| | 5 | 竪穴式住居跡北側（斜面） | 口　径　21.7<br>胴部最大径<br>22.9<br>底　径　4.7<br>器　高　30.2 | 口縁部は「く」の字状に外反する。端部はわずかに下方に肥厚し，中央がわずかに凹んでいる。胴部の張りは小さく，底部はわずかに凹底を呈す。 | 内面は，口縁部ヨコナデ，頸部は指頭による接合後ヨコナデ，胴部以下はヘラ削りの後粗いナデ。<br>外面は，口縁部から頸部はヨコナデ，胴部以下はヘラナデ。頸部下にヘラ状工具による刻み目を施す。 | 色調：褐色<br>内外面に黒斑あり<br>胎土：良好<br>焼成：良好 |
| | 6 | 第２号古墳東側（斜面） | 口　径　15.3<br>胴部最大径<br>15.4<br>器　高　14.4 | 口縁部は厚みを減じつつゆるく外反し，端部は，わずかに下方に肥厚する。<br>底部は丸底に近い。 | 内面は，口縁部はヨコナデ，頸部は部分的にヘラ削り後ヨコナデ，胴部以下はヘラ削り。<br>外面は，口縁部ヨコナデ，頸部はハケ目後，ヨコナデ，胴部以下は，ハケ目後，部分的にナデ。 | 色調：橙色<br>外面胴部下半に黒斑あり<br>胎土：良好<br>焼成：良好 |
| | 7 | 竪穴式住居跡北側（斜面） | 口　径　19.7<br>胴部最大長<br>19.4 | 口縁部は「く」の字状に外反し，口縁部の厚みはほぼ均一である。<br>胴部の張りは小さい。 | 内面は，口縁部はヨコナデ，頸部から胴部の上部はヘラナデ，以下はヘラ削り後，粗いナデ。<br>外面は，口縁部から頸部はヨコナデ，胴部はハケ目後，下半部に粗いナデ。 | 色調：内面　褐色<br>外面　橙褐色<br>胎土：良好<br>焼成：良好 |
| | 8 | 竪穴式住居跡北側（斜面） | 口　径　20.5 | 口縁部は「く」の字状に外反する。端部は下方にわずかに肥厚し，平らに仕上げている。 | 内面は，口縁部はヨコナデ，頸部以下はヘラ削り後ナデ。<br>外面は，口縁部から頸部はヨコナデ，胴部はハケ目後，部分的にナデ，頸部下にヘラ状工具による刻み目を施す。 | 色調：淡褐色<br>外面に黒斑あり<br>胎土：良好<br>焼成：良好 |
| | 9 | 竪穴式住居跡上側（斜面） | 口径（推定）<br>24.8 | 口縁部はゆるやかにひらく。口縁部の厚みは，ほぼ均一で，端部は平らに仕上げている。 | 内面は，口縁部はハケ目後，口縁上部にヨコナデ，頸部以下はヘラ削り後，頸部から胴部上半はヘラナデ。<br>外面は，ハケ目後，口縁上部から端部にヨコナデ。 | 色調：淡褐色<br>外面に黒斑あり<br>胎土：良好<br>焼成：良好 |

| 器種 | 番号 | 出土地点 | 法　量(cm) | 形態について | 成形・調整について | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 甕 | 10 | 竪穴式住居跡北側（斜面） | 胴部最大径 12.9 | 口縁部は厚みを減じつつ，「く」の字状に外反する。 | 内面は，口縁部はヨコナデ，頸部以下はヘラ削り後ナデ。<br>外面は，口縁上部はヨコナデ，以下はハケ目後，粗いナデ。 | 色調：赤褐色<br>胎土：良好<br>焼成：良好 |
| 高坏 | 11 | 竪穴式住居跡北側（斜面） | 口径（推定） 22.6 | 坏部の破片である。<br>口縁部は，短く直立し，端部はまるく仕上げている。 | 内面は，口縁部ヨコナデ，体部はハケ目後ナデ。<br>外面は，口縁部ヨコナデ，体部はハケ目。<br>口縁部と体部の接合痕あり。 | 色調：赤褐色<br>胎土：良好<br>焼成：良好 |
| | 12 | 第1号住居跡状遺構北側（斜面） | 不　明 | 脚部の破片である。 | 内面は，しぼり成形後ヘラナデ，ただし上部は棒状工具による押え。<br>外面は，下部がハケ目，他はナデと推定される。 | 色調：橙褐色<br>胎土：砂粒多し<br>焼成：不良 |
| その他 | 13 | 第2号古墳東側（斜面） | 口径（推定） 20.9 | 口縁部の破片と考れられる。端部は上下に拡張する。 | 内外面とも端部はヨコナデ，他はナデ。端部に5条の波状文を施す。 | 色調：橙褐色<br>胎土：良好<br>焼成：不良 |
| | 14 | 竪穴式住居跡北側（斜面） | 底径（推定） 20.0 | 脚部と推定される。<br>端部はわずかに上下に肥厚する。 | 内外面ともヨコナデ，端部に4条の波状文あり。また，端部に粘土粒を貼り付けたと推定される。 | 色調：褐色<br>胎土：良好<br>焼成：やや軟調 |
| | 15 | 竪穴式住居跡北側（斜面） | 不　明 | 底部は丸底に近いが，棒状工具による押えのため，わずかに凹んでいる。 | 内面は，ヘラ削り後，底部は軽いナデ。<br>外面はハケ目。 | 色調：赤褐色<br>胎土：良好<br>焼成：良好 |
| | 16 | 第1号住居跡状遺構北側（斜面） | 不　明 | 底部は丸底に近い。 | 内面は，ヘラ削り後ナデ。<br>外面は，ハケ目後ナデ。 | 色調：内面褐色<br>外面橙褐色<br>内面に黒斑あり<br>胎土：砂粒多し<br>焼成：軟調 |
| | 17 | 第1号古墳墳丘盛土中 | 底　径　7.9 | 台部または脚部である。 | 内面は，ヘラ削り後ナデ。<br>外面は，端部がヨコナデ，他はヘラナデ。<br>底部は，焼成後穿孔されていると推定される。 | 色調：橙褐色<br>胎土：良好<br>焼成：良好 |
| | 18 | 表　採 | 不　明 | 手ずくねの小形土器である。 | 指頭成形後，内面ナデ。 | 色調：淡褐色<br>胎土：良好<br>焼成：良好 |

# Ⅳ　池の内第２号古墳について

池の内第２号古墳は，池の内遺跡のほぼ中央に位置しており，その規模及び位置から，池の内古墳群の中心をなすものと考えられる。そこで，調査区域外であるが，昭和56年７月に広島県教育委員会によって実施された試掘調査の成果をふまえ，今回その概要を紹介することとしたい。

本古墳は，標高47.38ｍを測り，地形観察及び，試掘調査の成果から，直径約28ｍを測る円墳と考えられる。墳丘はほぼ完存しているが，南東側が鉄塔建設の際に削り取られており，さらに，墳端部には山道が設けられ壇築状に周囲をめぐっている。墳頂には，径約13ｍを測る平担面があり，南東寄りの地点に大形の板石２枚がみられる。墳丘の高さは，墳丘をめぐる平担部から2.5ｍ～3.5ｍを測るが，地形からみて，3.5ｍ～4.5ｍ程度と推定される。広島県教育委員会の試掘調査の結果，本古墳は，葺石及び円筒埴輪をもち，西側に溝のあることが確認されている。溝の規模は，地形状態から長さ20ｍ，幅８ｍ程度と推定される。

なお，墳丘の北側の一部に，小円礫の散乱がみられるが，これと葺石の関係は明らかではない。

周囲にめぐらされた平担面を古墳築造時のものと推定して２段築成とする意見がある。しかし，この平坦部は南北で約１ｍの比高差があり，現存する山道と連なって上方へ向かうことから考えて，二段築成の可能性は少ないと考えられる。

試掘調査により，南東側の墳裾付近から鉄製品が出土した。出土位置から，本古墳の一部が削り取られた際に流出したことが想定される。馬鍬（第32図11）は，鍛造品で３本の歯をもち，長さ11.6㎝，幅10.0㎝を測る。３本の歯は，長さ８㎝前後，幅は中央で1.0㎝～1.4㎝，厚さ0.8㎝～0.9㎝を測り，先端はまるみをもちつつとがる。袋部は，厚さ３㎜～４㎜の鉄板を内側に折り曲げたもので，歯に対して直角につく。端部の形状は円形に近く径2.1㎝～2.4㎝を測るが，内に入るにしたがって扁平になる。鉄斧（第32図15）は，鍛造の有袋鉄斧であり，全長14.0㎝，刃部最大幅5.8㎝を測る。袋部は，厚さ３㎜の鉄板を内側に折り曲げており，端部は円形で径4.1㎝を測るが，内に入るにしたがって扁平になる。袋部の一部と刃先をわずかに欠失している。鉄刀（第31図３）は，刃部先端を欠失し，現存長85.2㎝を測る。全体に鋸化が著しく，わずかに湾曲しいる。また，部分的に木質が残存レている。関部は直角に切られ，茎尻は細くつき出している。目釘孔は２か所あり，径3.5㎜と4.5㎜を測り，関寄りの方が大きい。各部の計測値は次のとおりである。

| | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 刃部 | 長さ | （現存） | 68.6㎝ | 茎部 | 長さ | | 16.6㎝ |
| | 幅 | 関部 | 2.9㎝ | | 幅 | 関部 | 2.5㎝ |
| | | 中央 | 2.9㎝ | | | 中央 | 1.9㎝ |
| | 背の厚さ | 関部 | 0.9㎝ | | 背の厚さ | 関部 | 0.9㎝ |
| | | 中央 | 0.9㎝ | | | 中央 | 0.7㎝ |

このうち，鉄製馬鍬は，現在のところ県下では唯一の出土例である。また，鉄刀は，今回の調査で本古墳の東側に隣接する第５号主体から出土したものと，その形態が類似している。

池の内第２号古墳について，現在まで得られた資料は少ないが、規模，構造，形状から太田川下流域では，傑出した古墳ということができる。

本古墳の築造時期については，未発掘であり，時期を比定できる遺物が少ないため明確にしがたい。しかし，本古墳は，池の内古墳群中最大の規模をもち，尾根のほぼ中央の最も良好な場所に位置していることから，池の内古墳群中でも，比較的早い時期に築造されたものと推定されよう。

# Ⅴ　ま　と　め

今回の調査により，調査区内から古墳４基，墳丘外の埋葬主体10基のほか，竪穴式住居跡１基，住居跡状遺構２基，土壙８基が検出された。この結果，古墳築造以前，弥生時代後期後半を中心とした時期に集落が営まれていたことがわかったが，その全容については明確にしえなかった。ここではまず，本遺跡出土の特徴的な遺物である鏡片及び把手脚付短頸壷について若干の考察を加え，後に本古墳群について述べることでまとめとしたい。

**ア．鏡片について**

池の内遺跡出土の銅鏡は，長宜子孫銘内行花文鏡である。鏡片であり，内区の文様を意識して形を楕円形に加工している点が特徴的である。

鏡片が，埋葬施設及び住居跡から出土する例は，北九州を中心に相当数知られている。(注1) 時期から見れば，弥生時代後期から古墳時代初頭に集中しており，その大部分が漢代の舶載鏡の破片である。破鏡の行なわれる意味については，舶載鏡の入手困難な地域での不足を補うために行なわれたとの考え方もあるが，(注2) 異論のある現時点では明言はさけておきたい。

広島県内での出土例は，６遺跡７例が知られるが，これらはすべて舶載鏡の破片と考えられ，破面は角が丸くなる程度に研磨されるのが通例である。出土した遺跡の時期は，４世紀から５世紀前半までの古墳時代前半期を中心とした時期であり，北九州などよりは，若干遅くまで残るようである。出土遺構の内訳は，古墳５例，溝１例，不明１例である。この中には，本遺跡の約4.6km北方に所在する神宮山１号古墳から出土した内行花文鏡片も含まれる。（第５表参照）

池の内遺跡の場合も，舶載鏡の鏡片を研磨して使用していることは，上記の例と共通している。本遺跡出土例の場合，遺構に伴っていないため時期を明確にしがたいが，周辺から弥生土器の小片若干が出土していることから，弥生時代後期に属する可能性が強い。ただ，石槌権現例では，古墳周辺の埋葬主体から鏡片が出土しており，本遺跡の場合も西側斜面上に分布する埋葬主体からの流れこみの可能性も考えられよう。

いずれにしろ，弥生時代後期，あるいは古墳時代前半期のある時期に，鏡片とはいえ舶載鏡を手に入れることのできる勢力がこの地域に存在していたことは考えられよう。

**イ．把手脚付短頸壷について**

この把手脚付短頸壷は，第３号古墳Ａ主体上面表土中から出土している。その出土状態からみて，おそらくＡ主体に伴うものと考えられるが，同一墳丘上にＢ主体も存在しており，表土中からの出土でもあることから明言はしがたい。この須恵器は，短く立ち上る口縁部，張りの強い肩，大きな把手，「八」の字状に開く脚部などの特徴を備え，肩部には斜格子文，胴部，脚部には列点文が施されている。これと同様な特徴を備えたもののうち，国内で出土したものは現在知るところ７例である。(注3) しかし，国内の窯跡からの出土は確認されておらず，朝鮮半島南部伽耶地域に同様の器形のものが多く出土していることから，国内で出土したものも朝鮮半島からの舶載品と考えられている。

本古墳出土例も，器形・胎土・調整ともに伽耶地域出土のものと酷似しているが，胎土分析によって陶邑産の可能性が高いとの指摘がされており，注目される。しかし，陶邑はもとより，国内の窯からの出土がみられない現時点において速断はさけておきたい。ただ，須恵器の母胎の１つに伽耶地域の陶質土器があげられており，(注4) 渡来工人の手になるといわれる一須賀窯の例などから考えても，この須恵器が伽耶地域から渡来した工人によって製作された可能性も考えられよう。

本古墳出土のものの時期について，国内の他の遺跡の出土例から考えると，５世紀初頭の三雲例[注5]に較べて，把手のつく位置が若干低く，胴部も丸味を持っていることなど新しい要素がみられる。このことから，５世紀中葉と考えられる六十谷例[注6]や野中例[注7]までは下らないものの，それに近い時期とすることができよう。この年代は，第３号古墳のＡ主体とＢ主体の関係から見ても矛盾なく受け入れられるものといえよう。また，有田例[注8]や榊山例[注9]などでも，最古式に近い須恵器に伴った形で出土しており，本古墳出土のものと時期的に若干類似した状況をみせている。

本古墳出土のものが，国内で製作されたものであるとしても，伽耶地域出土のものと酷似した特徴を有しており，時期的に大きな違いが存在するとは考えられない。いずれにしろ，本古墳出土の把手脚付短頸壺は，国内に須恵器が普及する以前，須恵器生産が国内で始まった頃のものととらえることができよう。

**ウ．池の内古墳群について**

本古墳群は，円墳５基及び周辺の埋葬主体10基からなる。これらの内部主体の大部分は，土壙を掘りこんで木棺を納め，その周囲に石材を配置したもので，基本的には類似した構造をとっているといえる。

まず，円墳５基についてみると，その分布は，①第１号古墳と第３号古墳，②第２号古墳と第４号古墳，③第５号古墳の３ヵ所に分かれて造られている。この中で，第５号古墳については，周辺に遺構も検出されておらず，若干孤立した感じもする。これらは，遺物からみると，丘陵の西側にある第１号・第３号古墳が，玉類を主とするのに対して，東側に存在する第４号古墳や第５号古墳は，鉄製品が遺物のほとんどを占めていると言える。また，第２号古墳からも，試掘調査の際，鉄製品３点が出土しており，西側と東側に分布する古墳の間には，遺物の面で異った様相がみられる。ただ，これらの古墳の間には，内部主体の構造や主軸の方位などに共通点が存在しており，相互に関係を持っていたことがうかがわれる。

各古墳の築造順位と築造の時期については，切り合い関係及び占地から見て，第３号古墳より第１号古墳が後出し，第２号古墳より第４号古墳が後出すると考えられる。第５号古墳については，削平を受けており不明な点が多いが，鉄鏃及び鉄鏃の形態などから，第４号古墳や第５号主体などより若干後出する時期のものと考えられる。以上のようなこと及び，周辺から出土した須恵器などから，築造順位として一応は，第３号古墳→第２号古墳→第４号古墳→第１号・第５号古墳ととらえておきたい。また，時期については，第３号古墳は，出土した須恵器からみて５世紀中葉を若干さかのぼる時期，第１号・第５号古墳は，主体部から出土した遺物及び周辺の須恵器などからみて，５世紀末から６世紀初頭ととらえられる。このことから，本古墳群は，遅くとも５世紀中葉を若干さかのぼる時期から６世紀初頭のころの間に築造されたものと考えられる。

本古墳群を特徴づけているものの１つに，古墳周辺の埋葬主体の存在があげられる。その分布は，Ａ・Ｂ２群に分けられるようである。Ａ群は，第１号・第３号古墳周辺のグループで，内部に石材を配置した土壙墓２，箱式石棺１，須恵器を利用した甕棺１である。Ｂグループは，第２号古墳東側斜面に分布するグループで，内部に石材を配置した土壙墓４，石材を持たない土壙墓１，石蓋と棺台を持つ主体１からなりたっている。Ｂグループについては，第５号・第６号・第10号主体が尾根中央部を占めているのに対して，第７号・第８号・第９号主体が尾恨の南北両斜面に造られており，占地の点で相違がみられる。これは，第５号主体の遺物が古式な様相を呈しており，第９号主体出土の須恵器がそれより若干新しい時期のものと考えられることから，築造時期による相違ととらえることもできよう。出土した遺物としては，須恵器，鉄製品，玉類などがあげられる。ただ，円墳４基から出土した遺物と比較すれば，質的にも量的にも較差がみられ，明確な遺物を出土しなかったものがその半数を数える。ただ，第５号主体については，本古墳群中最も豊富な遺物を出土し，内部主体の規模も４基の円墳の主体部に匹敵するものであり，他の埋葬主体とは異った

様相を呈している。しかし，これも本主体が，第２号古墳の東側墳裾に近接した位置に造られていること，及び第２号古墳の試掘の際検出した鉄刀と類似したものが本主体から出土していることなどを考えると，本主体は，第２号古墳の被葬者との密接な関係を前提としてはじめて成立しえたものと考えられる。以上のように，古墳と周辺の埋葬主体の間には，内部主体の構造や主軸の向きなど共通する部分も多いが，遺物や内部主体の規模などに較差が存在していると言えよう。また，時期については，内部から出土した須恵器から第１号主体が５世紀後半，第９号主体が５世紀末から６世紀初頭と考えられ，，他の埋葬主体も出土遺物や埋葬主体の分布状況からみて，近接する古墳と同時期あるいは若干後出する時期のものと考えて大過なかろう。

次に，本古墳群出土の遺物についてみれば，２つの特徴を指摘できよう。それは，第一に鉄製農工具の出土状況，第二に玉類についてである。まず，鉄製農工具の出土状況であるが，本古墳群出土のものは全部で９点あり，その内５点は第５号主体，２点は第２号古墳の試掘調査の際，他の２点は第４号古墳・第５号古墳より各１点出土したものである。これら鉄製農工具の出土状況をみると，第２号古墳周辺の遺構からの出土が大部分を占めており，これらの主体部の被葬者の性格を考える上で重要である。第二に，玉類についてであるが，本古墳群においては，古墳からだけでなく周辺の埋葬主体からも玉類が出土しており，総数646点を数える。太田川下流域において，本古墳群とほぼ同時期と考えられる古墳の中で玉類が多量に出土した例は，弘住第２号古墳の1,740点は例外として，恵下１号古墳[注10]190点，恵下２号古墳[注11]139点などがあげられる程度である。これに対して本古墳群の場合，調査を行った４基の古墳中２基，周辺の埋葬主体[注12]10基中４基から玉類が出土しており，数量的にも50点以上出土したものが４基を数える。出土した主体部をみると，墳丘内墳丘外の違いなく分布しているようである。いずれにしろ，太田川下流域において，玉類を副葬した主体部がこれほど集中して分布している例はみられず，注目すべき状況といえよう。

以上のように，池の内遺跡は，５世紀中葉を若干さかのぼる時期から６世紀初頭にかけて営まれた古墳群と考えられる。その主体部は，須恵器を使った甕棺や，石材を配置した土壙墓など，周辺にはみられない構造をとっており，本古墳群の独自性をうかがわせる。また，遺物からみても，日本での出土例の極めて少い把手脚付短頸壷を含めた多くの古式の須恵器や多量の玉類など優れたものを出土している。今回調査されなかった本古墳群中最大の第２号古墳の存在を含めて考えたとき，本古墳群は太田川下流域において傑出した古墳群の１つと言えよう。

ところで，本遺跡の所在する山本川流域には，５世紀代になって三王原古墳や権地古墳などの優れた遺物を持つ古墳が次々に造営されており，その中で本遺跡の西750ｍに位置する空長古墳群は，本古墳群と同時期の古墳群と考えられる。空長古墳群は，円墳４基中２基の内部主体に，北九州で多く発見される竪穴系横口式石室を採用しており，金銅製三輪玉，蛇行剣身，古式の須恵器などの遺物が出土している。このような，独自性を持った優れた古墳群が２群同時に近接して形成されていることは，広島湾頭に位置するこの地域に，当時の太田川下流域における中心的な勢力の１つが存在していたことを推定させる。

（注１）正岡睦夫「鏡片副葬について」『古代学研究』第90号　1979　古代学研究会
　　高橋　徹「廃棄された鏡片」『古文化談叢第６集』1979　九州古文化研究会
（注２）高倉洋彰「弥生時代副葬遺物の性格」『九州歴史資料館研究論集』2　1976
（注３）出土遺跡は以下のとおりである。
　　コフノ　遺跡（長崎県上県郡上対馬町）
　　三雲遺跡，堺Ｉ－46号住居跡（福岡県糸島郡前原町）
　　有田遺跡，31街区２号住居跡上層（福岡市早良区）
　　上々浦遺跡（福岡県甘木市）

榊山古墳（岡山市新庄下）
野中古墳（大阪府藤井寺市）
六十谷遺跡（和歌山県和歌山市）

（注４）中村浩「須恵器生産の諸段階－地方窯成立に関する－試考－」『考古学雑誌』第69巻第１号　1981
（注５）福岡県教育委員会『三雲遺跡』Ⅳ福岡県文化財調査報告書65　1983
（注６）北野耕平「初期須恵質土器の系譜－紀伊六十谷出土の土器とその年代－」「神戸商船大学紀要』17　1969
（注７）北野耕平『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室研究報告第２冊　1976
（注８）山崎純男「福岡市有田遺跡出土の陶質土器と古式須恵器」『古文化談叢』第６集1978九州古文化研究会
（注９）島崎東「備中榊山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』３　1982　岡山県史編纂室
（注10）広島市教育委員会『弘住遺跡発掘調査報告」1983
（注11）広島県教育委員会『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』1977
（注12）同上

〈参考文献〉

銅鏡関係
樋口隆康『古鏡』新潮社　1979
須恵器及び陶質土器関係
楢崎彰一監修『日本陶磁の源流』柏書房　1984
楢崎彰一編ｐ『世界陶磁全集』２日本古代　小学館　1979
大阪府教育委員会『陶邑』Ⅰ～Ⅳ　1976～1979
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981
定森秀夫「韓国慶尚南道釜山・金海地域出土陶質土器の検討」『平安博物館研究紀要』７　1982
金元龍他編『世界陶磁全集』17　韓国古代　小学館　1979

第５表　広島県内鏡片出土地名表

| 遺跡名 | 内容 | 所在地 | 鏡式 | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 釜鋳谷遺跡 | 不明 | 山県郡筒賀村 | 四葉座内行花文鏡 | 弥生時代末～古墳時代初頭 | 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3)』1982 |
| 神宮山１号古墳 | 古墳 | 安佐南区佐東町緑井 | 長宜子孫銘四葉座内行花文鏡 | ４世紀代 | 広島市役所『新修広島市史』第一巻 1961 |
| 四拾貫第９号古墳 | 古墳 | 三次市四拾貫町 | 獣帯鏡　？ | ５世紀前半 | 広島県双三郡三次市史料総覧編修委員会『広島県双三郡三次市史料総覧』第５巻 1974 |
| 石鎚権現第５号古墳墳丘裾第14号土壙墓 | 土壙墓 | 福山市駅家町 | 飛禽鏡 | ５世紀前半 | (財)広島県埋蔵文化財調査センター『石鎚権現遺跡群発掘調査報告』1981 |
| 石鎚山第２号古墳 | 古墳 | 福山市加茂町 | 円圏座内行花文鏡<br>蝙蝠座内行花文鏡 | ４世紀後半～末 | 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚山古墳群」1981 |
| 神辺御領遺跡Ｅ地点 | 溝 | 深安郡神辺町 | 獣帯鏡　？ | 古墳時代前期　？ | 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター『神辺御領遺跡』1981 |

（注）鏡式については、古瀬清秀「広島県出土の中国鏡について（上）」『広島大学文学部紀要』第42巻1982を参考にした。

# 付　　編

Ⅰ　池の内遺跡出土須恵器の胎土分析

奈良教育大学　　三　辻　利　一

Ⅱ　亀岡遺跡発掘調査報告

# Ⅰ　池の内遺跡出土須恵器の胎土分析

奈良教育大学　三　辻　利　一

池の内第３号古墳は５世紀中葉の古墳である。この時期には広島県下には須恵器窯跡はないので，この古墳から出土した須恵器は外部からの搬入品であろうと推定される。今回，胎土分析した２点の須恵器は，№１(第28図19)が池の内第３号古墳から，№２(第28図18)が，第２号古墳墳裾東側から出土したものである。№１の資料は多くの考古学者が器形・模様からみて，朝鮮半島産と推定しているものである。２点の須恵器の蛍光Ｘ線分析の結果について報告する。

データの正確さを期するため，貴重な資料片ではあるが，最小限度の大きさの小片に切りとり，100～200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は直径２㎝の塩化ビニール製リングに入れ，15トンの圧力を加えてプレスし，コイン状のペレットに成形して蛍光Ｘ線分析用試料とした。蛍光x線の測定にはＴｉを２次ターゲットとして使用し，真空下でＫ，Ｃａを，また，Ｍｏを２次ターゲットとして使い，空気中でＦｅ，Ｒｂ，Ｓｒを定量した。定量分析には岩石標準試料ＪＧ－１を使用した。分析データはＪＧ－１による標準化値で表示されている。

池の内遺跡出土の２点の須恵器は朝鮮半島産か大阪陶邑産かという問いかけで分析データを整理した。図１には大阪陶邑産須恵器と池の内遺跡の２点の須恵器のＲｂ－Ｓｒ分布図を示す。№１，２とも大阪陶邑領域の周辺に入って分布しており，この図をみる限り，２点とも，大阪陶邑産の可能性はある。図２には朝鮮半島産陶質土器と池の内遺跡の２点の資料のＲｂ－Ｓｒ分布図を示す。朝鮮半島産陶質土器は神戸商船大学，北野耕平教授が慶州周辺を中心に採集したものである。図２をみると，№２の資料は朝鮮グループの分布領域に入っているが，№１の資料は完全にはずれて分布しており，朝鮮半島産である可能性はまずない。

次に，図３にはＫ－Ｃａ分布図を示してある。右側には大阪陶邑産須恵器と池の内遺跡の２点の資料をプロットしてある。№１は大阪陶邑領域内に分布しているが，№２は大阪陶邑領域よりずれて分布しており，

図１．大阪陶邑産須恵器，および，池の内遺跡出土須恵器のＲｂ－Ｓｒ分布図

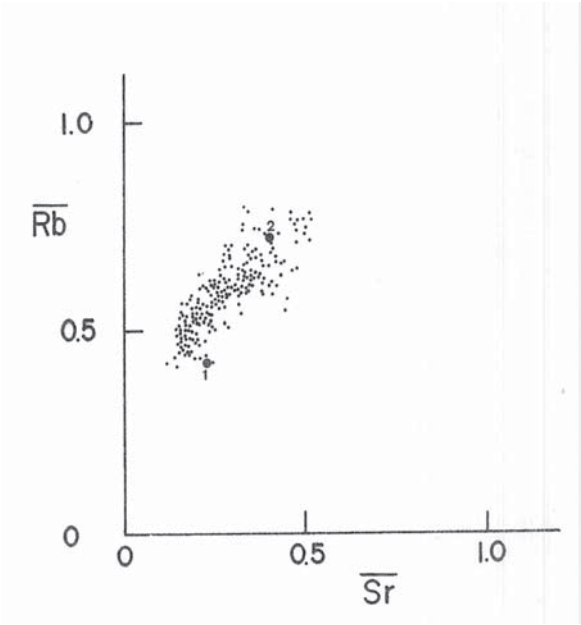



図２．朝鮮半島産陶質土器，および，池の内遺跡出土須恵器のＲｂ－Ｓｒ分布図

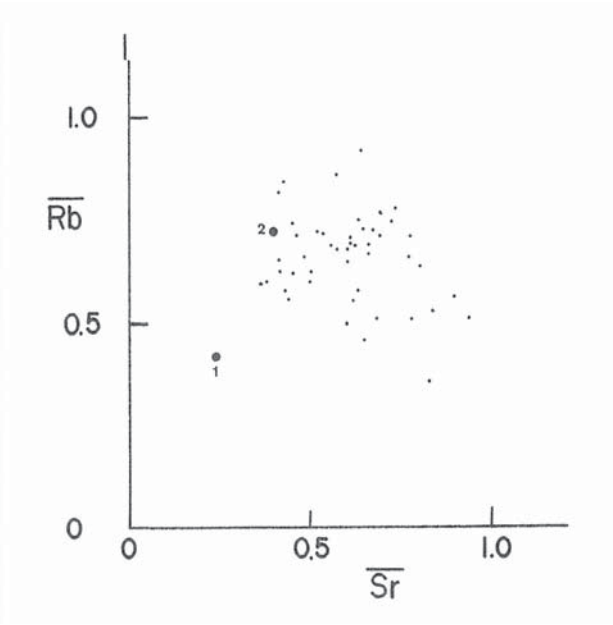
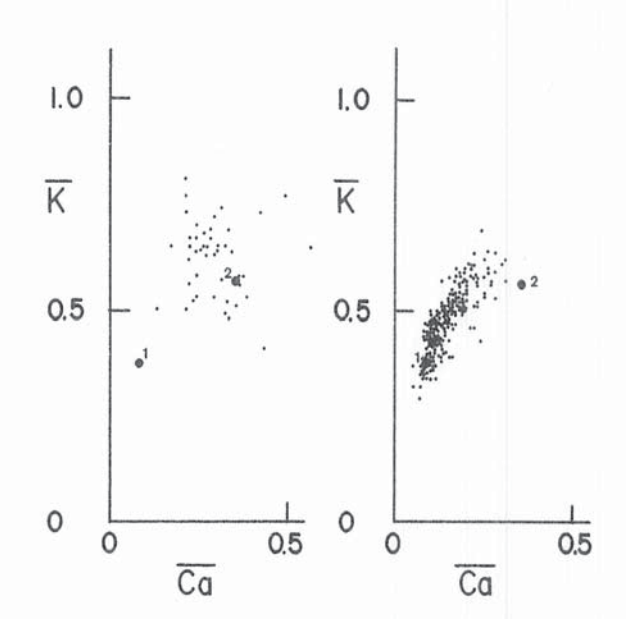


図３．大阪陶邑産須恵器朝鮮半島産陶質土器，および，池の内遺跡出土須恵器のK-Ca分布図

朝鮮半島産陶質土器　　大阪陶邑産須恵器




大阪陶邑産である可能性は少ないことを示す。一方，左側の図には朝鮮半島産陶質土器と池の内遺跡の２点の資料のＫ－Ｃａ分布図を示してある。№１は完全に朝鮮産グループからはずれており，図２のＲｂ－Ｓｒ分布図の結果と併わせて，朝鮮半島産陶質土器であることを否定する。№２の方は朝鮮グループ内に分布しており，図２のＲｂ－Ｓｒ分布図の結果と併わせて，朝鮮半島産陶質土器の可能性が十分あることを示す。

なお，Ｆｅ因子は朝鮮半島産陶質土器と大阪陶邑産須恵器の相互識別をする上に有効ではないのでここでは省略した。(1)

以上の結果，肉眼鑑定でどの考古学者も朝鮮半島産だという№１の資料の胎土は朝鮮半島産ではなく，大阪陶邑産須恵器と同質であった。大阪陶邑が有力な産地である。一方，№２は肉眼鑑定では確かなことは分からなかったが，胎土からみると，大阪陶邑産である可能性はきわめて低く，逆に，朝鮮半島産である可能性が高い。この２点の試料は後日，放射化分析して，朝鮮半島産か大阪陶邑産かを識別する上に有効な因子であるＬａ量を測定する予定である。蛍光X線分析のデータだけとはいえ，№１の資料は朝鮮半島産である可能性は殆んどなく，逆に，大阪陶邑産の可能性は高い。もし，№１の資料が大阪陶邑産とすると，器形が朝鮮半島産陶質土器に酷似するところから，朝鮮半島の工人が大阪へ渡来してきて，大阪陶邑で作った須恵器であるということになる。このような須恵器は大阪府高石市水源池遺跡からも検出されており，考古学者にとってきわめて興味深い問題を提供しよう。

〈参考文献〉

(1)　三辻利一らｒ日本の古代遺跡における朝鮮産陶質土器の検出第１報」『考古学と自然科学』第16号983

# Ⅱ　亀岡遺跡発掘調査報告

## １．はじめに

広島市教育委員会では，昭和59年４月，広島市安佐南区祇園町大字長東字亀岡の丘陵の造成計画を知り，分布調査を行った結果，埋蔵文化財の存在することを確認した。そこで，造成主であるアサ開発株式会社とその取扱いについて協議を行ったが，地形的条件から設計変更等による現状保存は不可能であり，記録保存もやむを得ないとの結論にいたった。これをうけて，広島市教育委員会は，昭和59年６月14日から６月21日まで，池の内遺跡と並行して，発掘調査を実施した。

## ２．調査の概要

亀岡遺跡は，広島市安佐南区祇園町大字長東字亀岡に所在する。本遺跡は，低丘陵の尾根上にあり，眼前に太田川の沖積地が広がる良好な場所に立地している。この低丘陵は，現状では，独立丘陵となっているが，本来は，標高356ｍの景浦山から北東へ派生した丘陵の先端部にあたり，周辺が宅地化された結果，独立丘陵を呈するようになったものである。尾根の現状は，後世の地形変更が著しく，自然地形を残している部分は少なかった。調査は，この自然地形の残存している東側部分について実施した。
その結果，箱式石棺１基と壷棺１基を検出した。

**箱式石棺**（第38図）

本石棺は，現存する尾根の東北端，斜面にかかる部分に位置し，本遺跡発見の契機となった箱式石棺である。石棺を埋置した墓壙の掘り方は，地山に達しておらず，土層観察などによっても，掘り方を明確にすることはできなかった。

本石棺は，内法で長さ92㎝，幅24㎝，深さ27㎝を測る小形のものである。石棺の主軸はN71°Ｅを指す。石棺の四壁は７枚の板石からなり，小口に各１枚，北壁に２枚，南壁に３枚配されている。板石は東小口のものを縦方向に使用しているが，他の６枚は横方向に使用している。また，東側に比較的大きな石材を使用している。蓋石は，２枚現存しており，大形の方は，50㎝×60㎝を測る。石棺の規模からみて，西寄りの１枚を欠失したものと推定される。蓋石の上面及び縁辺には大小の角礫が置かれている。
本石棺の頭位は，棺材の配置状況から東寄りと考えられる。また，その規模から小児用と推定される。

なお，棺内から遺物は出土しなかった。

**壷　棺**（第38図）

壷棺は，箱式石棺の南約1.5ｍ，地山が急傾斜で南側へ落ちる地点にある。壷棺を埋置したと考えられる墓壙の掘り方は，北側から東側にかけての一部しか検出できなかったため，墓壙の形状，規模は不明である。墓壙の底面は，壷の形状に対応して中央が深くなっている。壷は，底面から5㎝ほど上に口縁部を東側に向けて横向きに埋置され，主軸はN69°Ｅを指す。埋置きれた状態で壷の体部の上面にあたる部分は割れ，一部を欠失しているが，内部に落ち込んだ破片の状況から，後世の破壊を受けたものと考えられる。壷の口縁部に接して，縦14㎝，横22㎝，厚さ６㎝と縦５㎝，横15㎝，厚さ２㎝を測る大小２枚の板石が検出された。これらの板石は，その位置関係から，木蓋の支えあるいは石蓋として使用された可能性がある。この壷棺は，規模から小児用と考えられる。

なお，棺内から遺物は出土しなかった。

**遺　物**

遺物は，遺跡の西側表土中から須恵器が少量出土しているが，小片のため図示することはできなかった。また，箱式石棺，壷棺の周辺からは，遺物は出土していない。

土師器（第39図）

壷棺に使用されたものである。二重口縁を呈するもので，口径21.0㎝，胴部最大径35.1㎝，器高44.5㎝を測る。口縁部は，強く外反した後，明瞭な稜線を呈して屈曲し，厚みを減じつつ外反気味に立ち上る。口縁端部は平らに仕上げている。胴部は球形を呈し，底部は丸底に近い。内面の頸部以下はヘラ削り，外面の口縁部から胴部下半まではハケ目調整がみられる。

## 3．ま　と　め

調査の結果，本遺跡からは，箱式石棺１基と壷棺１基が検出された。いずれも，その規模から小児用と考えられる。

本遺跡の存在する尾根は，大部分が削平されているため，明確にすることはできないが，①本遺跡の西側から須恵器の細片が出土していること，②本遺跡の西約200mの地点にある文化女子短大グランド遺跡とは，本来同一尾根であることから，本遺跡は，小児用の埋葬施設２基にとどまるものとは考えられない。

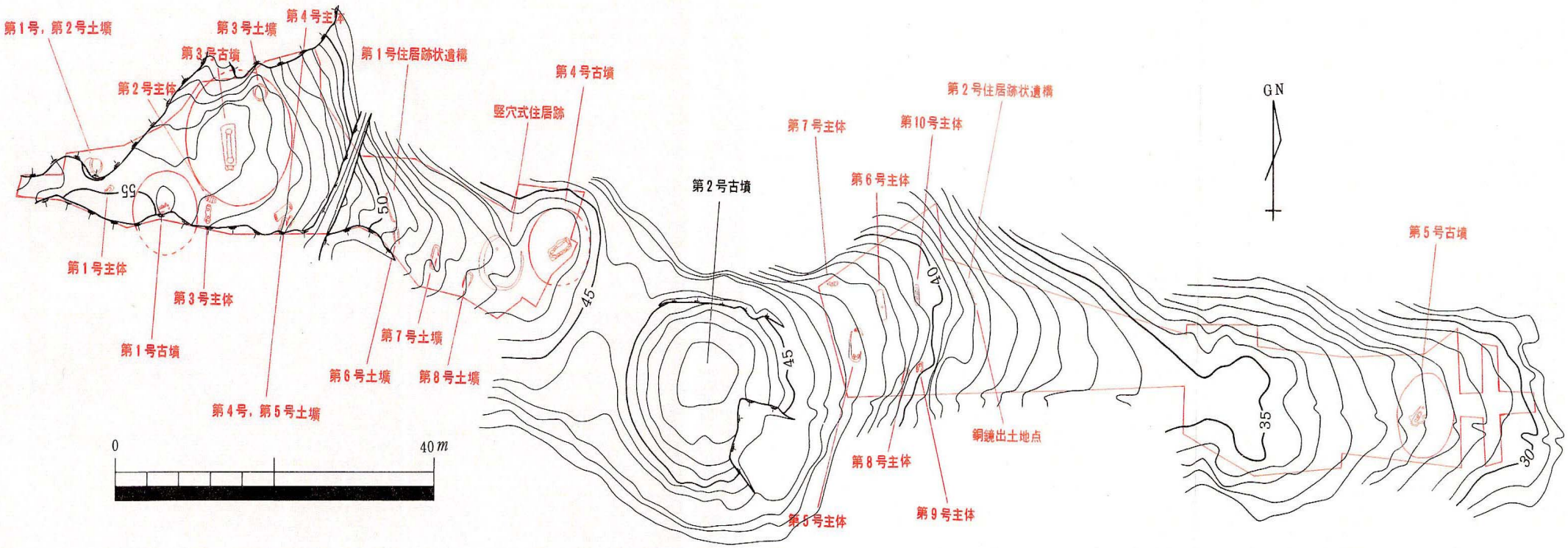
壷棺の時期は，使用された土師器の口縁部の形態的特徴などから，４世紀の後半から５世紀初頭と推定でさよう。箱式石棺は，尾根の中心線に近い位置にあり，壷棺よりも良好な場所に位置している。このことからみて，壷棺は箱式石棺を意識して傾斜面に埋置きれた可能性がある。このような占地からみると，箱式石棺が壷棺にやや先行するようであるが，これに伴う遺物が出土していないため，明らかにすることはできない。

周辺の古墳時代の遺跡をみると，空長古墳群，池の内古墳群，権地古墳などがある。これらは，概ね５世紀代に比定されるものであり，本遺跡は，現在までのところ，この地域で古墳時代の最古に位置づけられるものである。

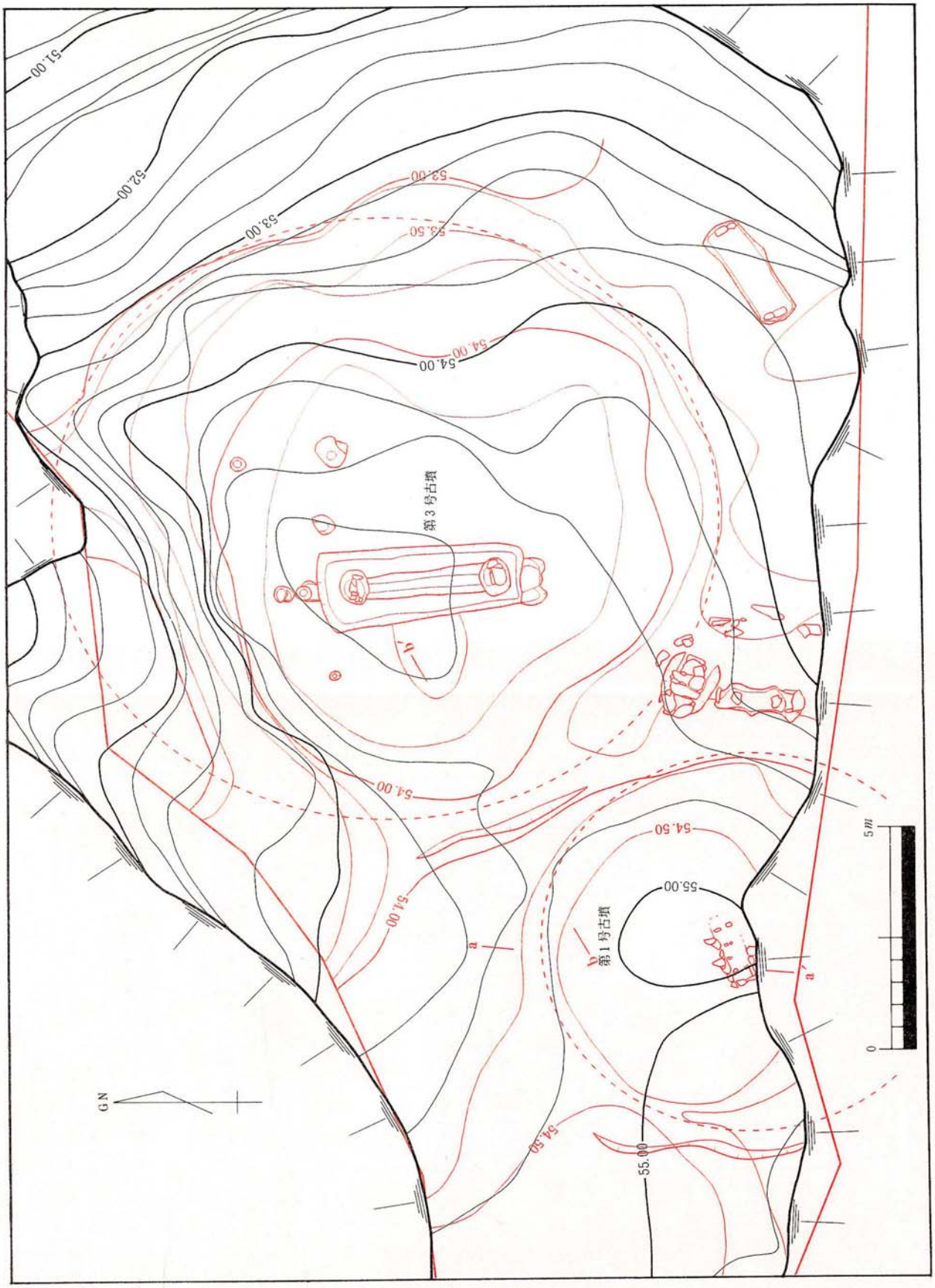
# 図　　面

1．池の内遺跡　2．亀岡遺跡　3．九郎杖遺跡　4．権地遺跡　5．文化女子短大グランド遺跡
6．長束修練院裏遺跡　7．空長古墳群　8．光見寺遺跡　9．東山本寺山遺跡　10．浄円寺古墳群
11．三王原古墳　12．上組古墳　13．戸谷山古墳　14．大谷遺跡　15．芳ヵ谷遺跡　16．長う子遺跡
17．大町矢ヶ谷遺跡

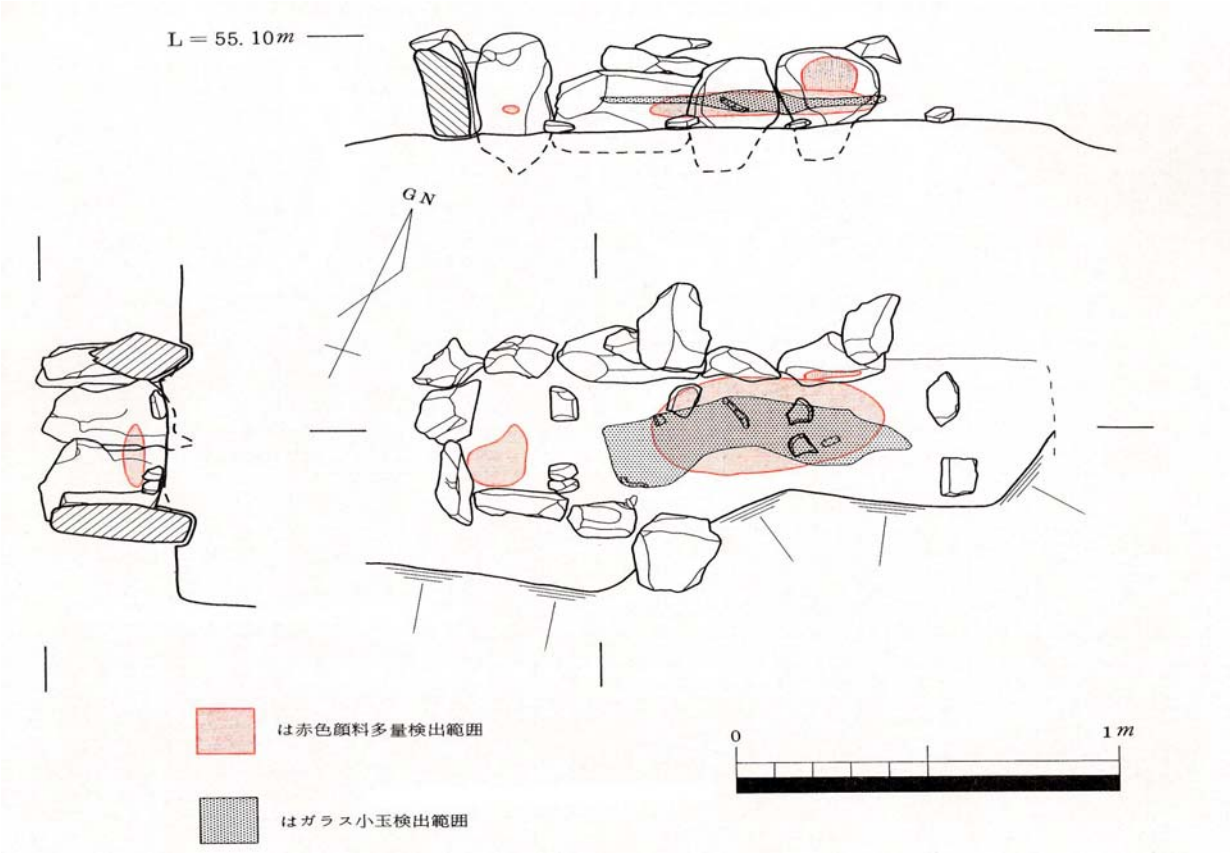
第１図　池の内遺跡の位置と周辺の主要遺跡



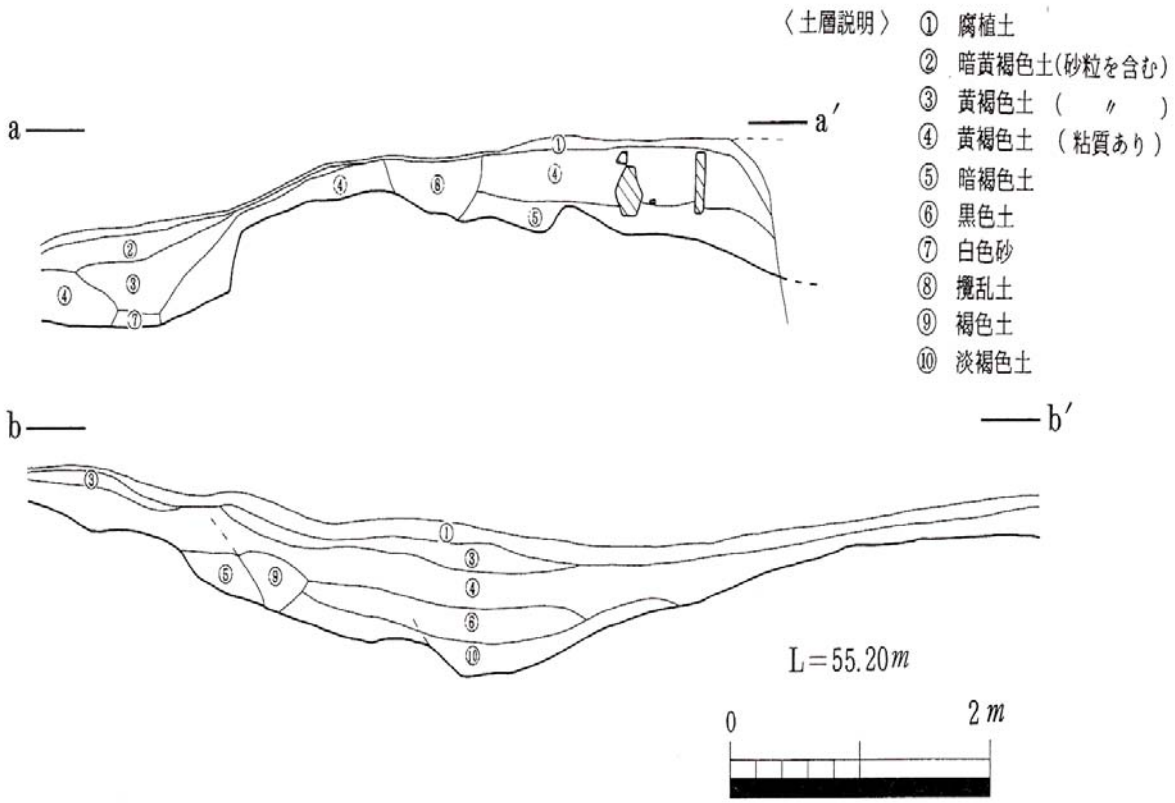

第２図　池の内遺跡地形図及び遺構配置図



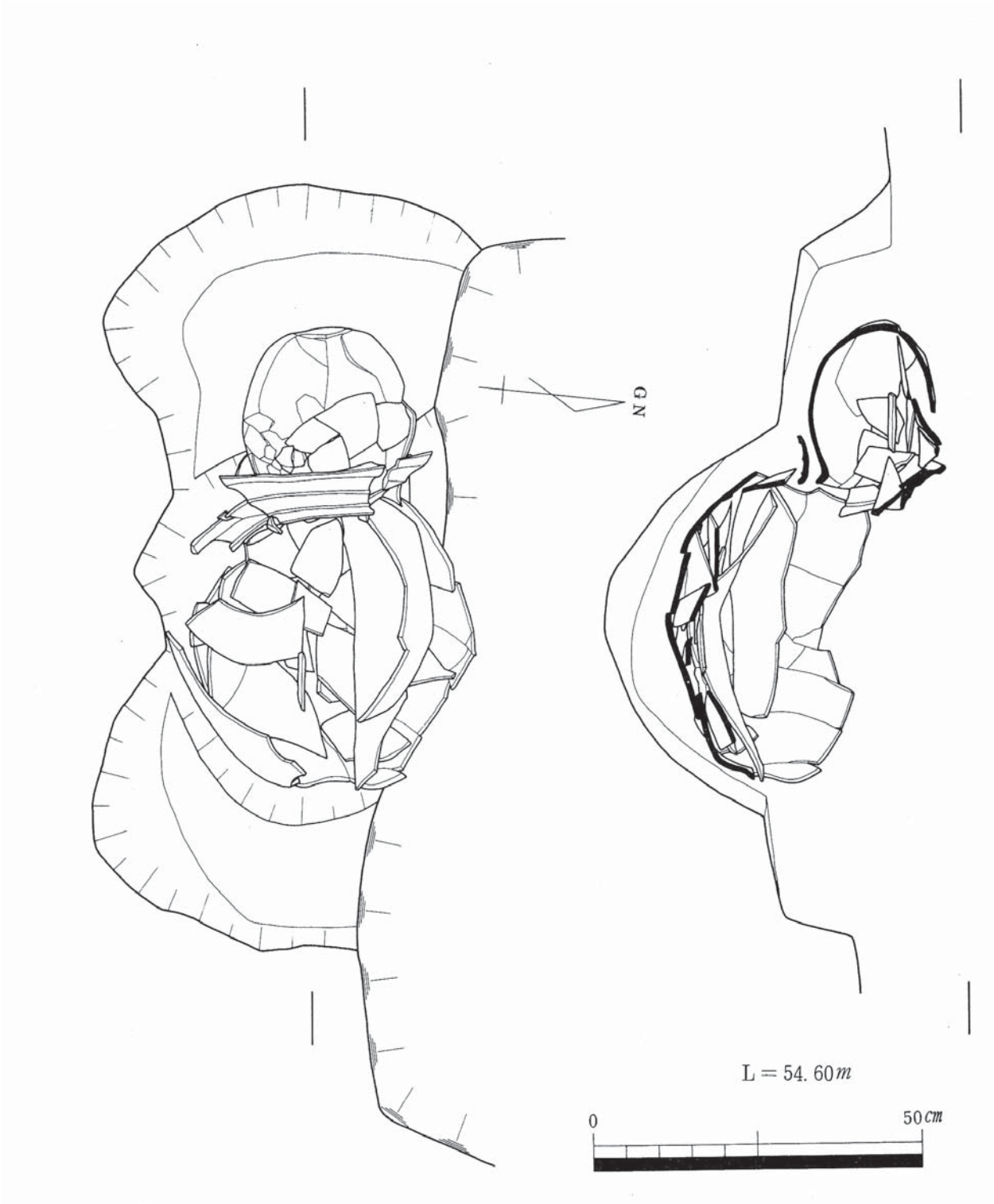

第３図　第１号古墳・第３号古墳測量図



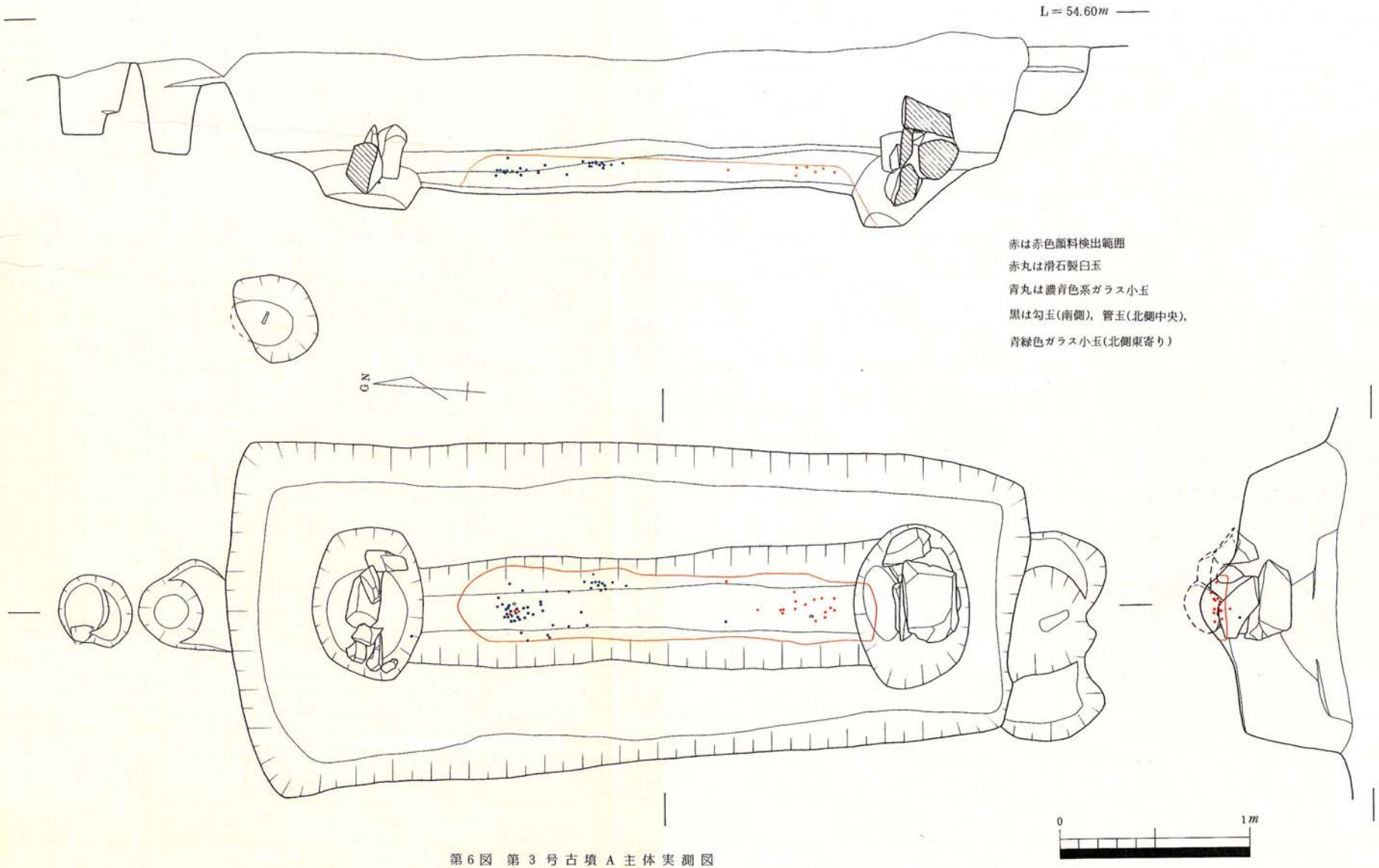

第４図　第１号古墳（上），第１号古墳－第３号古墳間（下）断面図



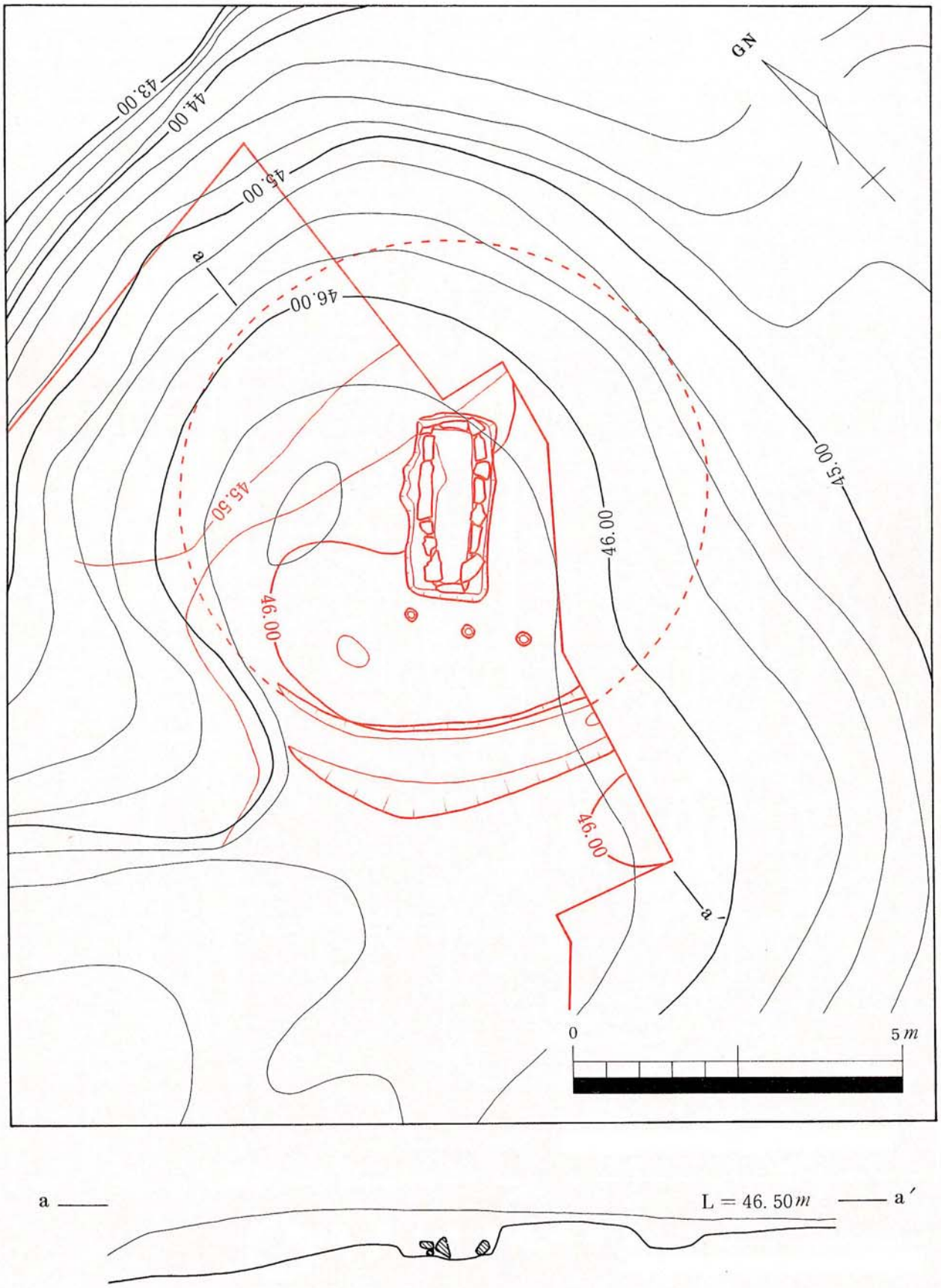

第５図　第１号古墳内部主体実測図



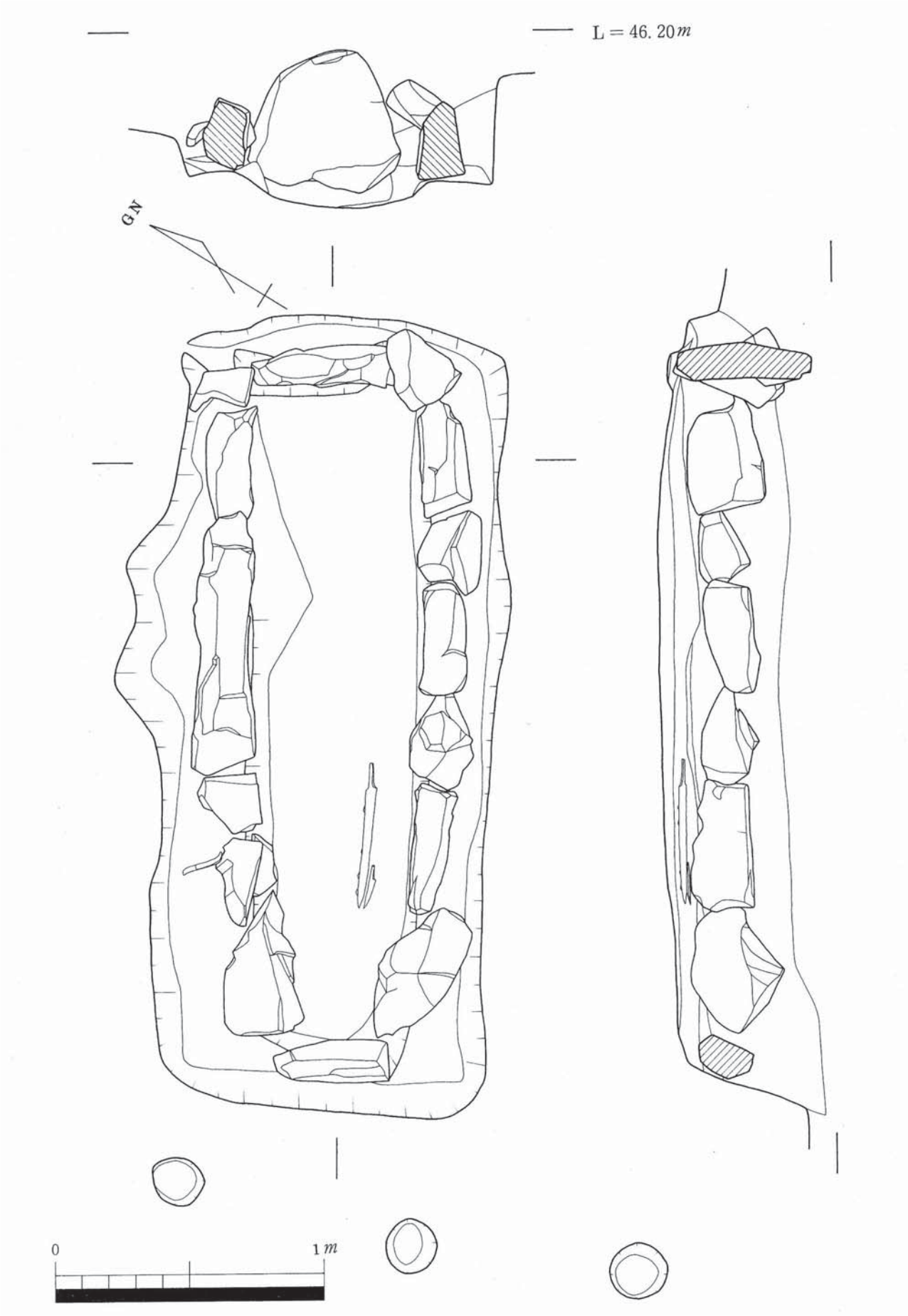

第７図　第３号古墳Ｂ主体実測図



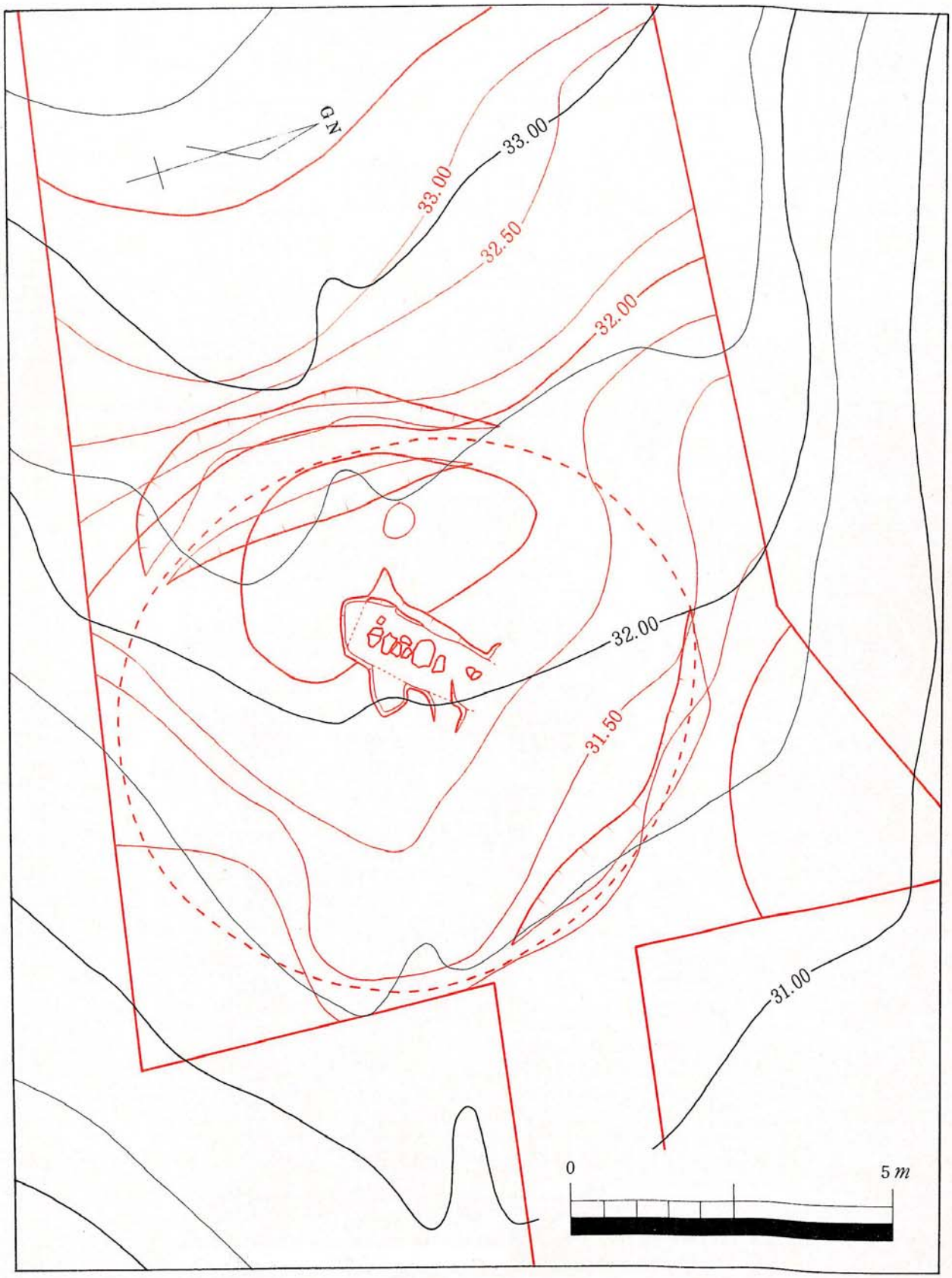

第6図　第3号古墳A主体実測図



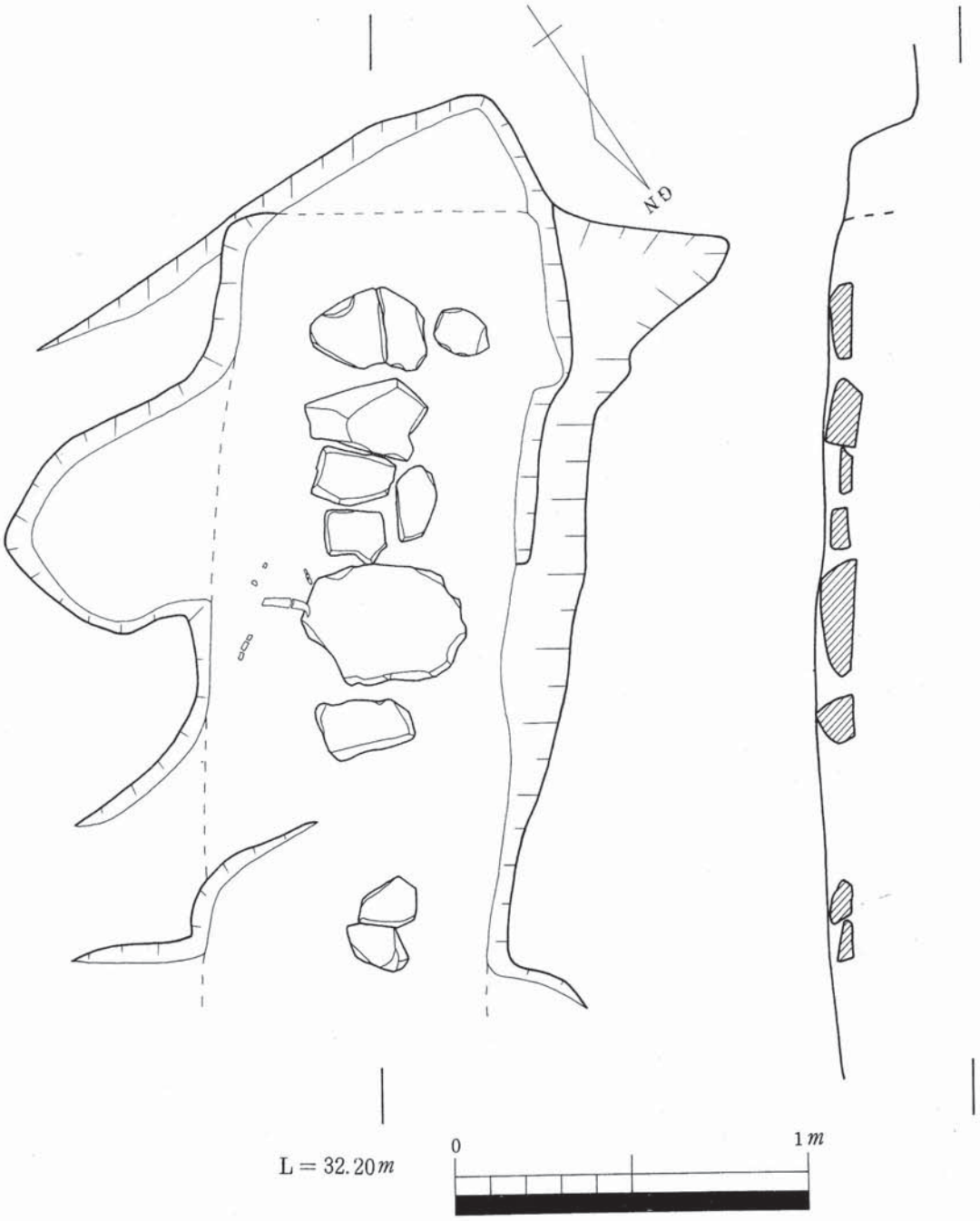

第８図　第４号古墳測量図



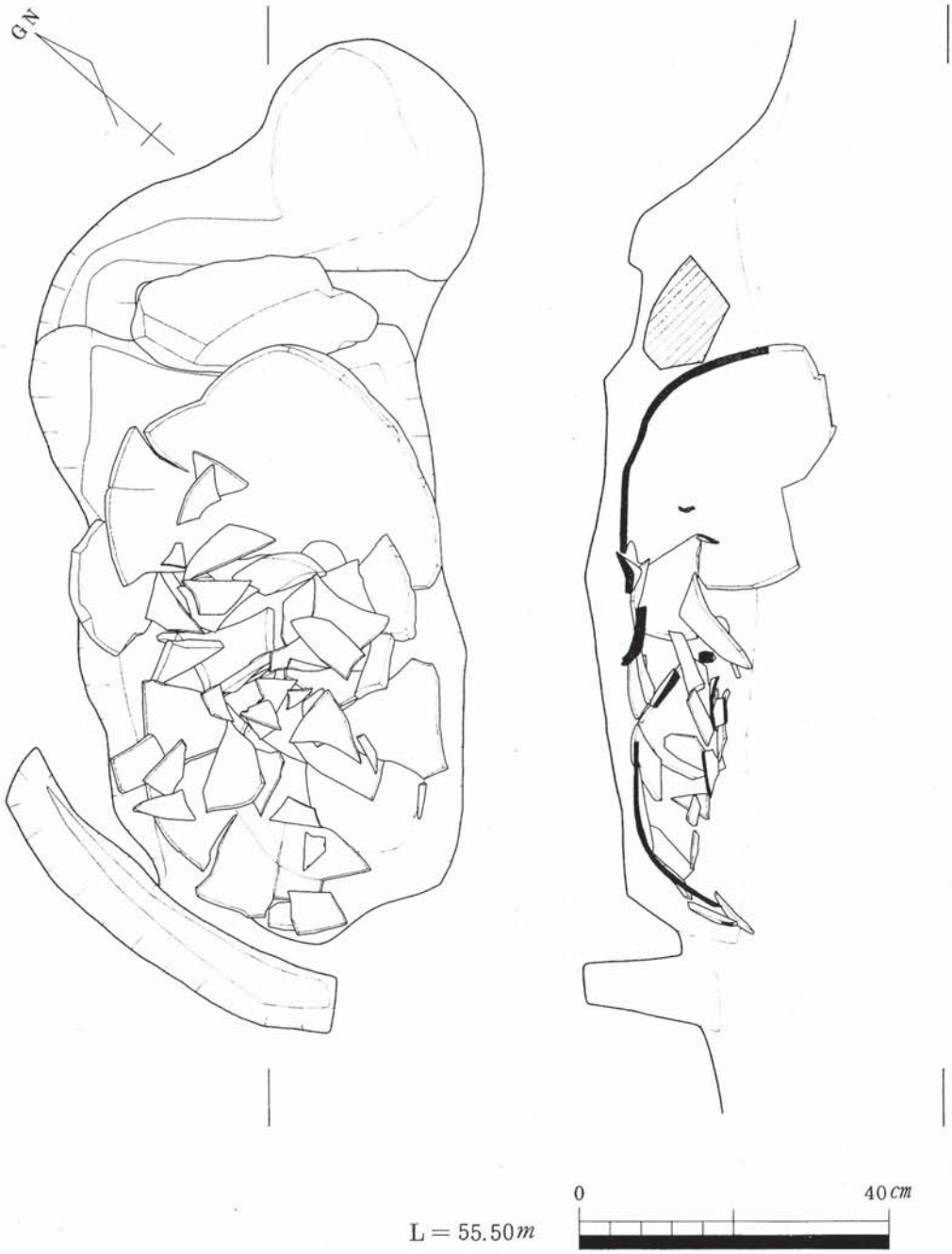

第９図　第４号古墳内部主体実測図



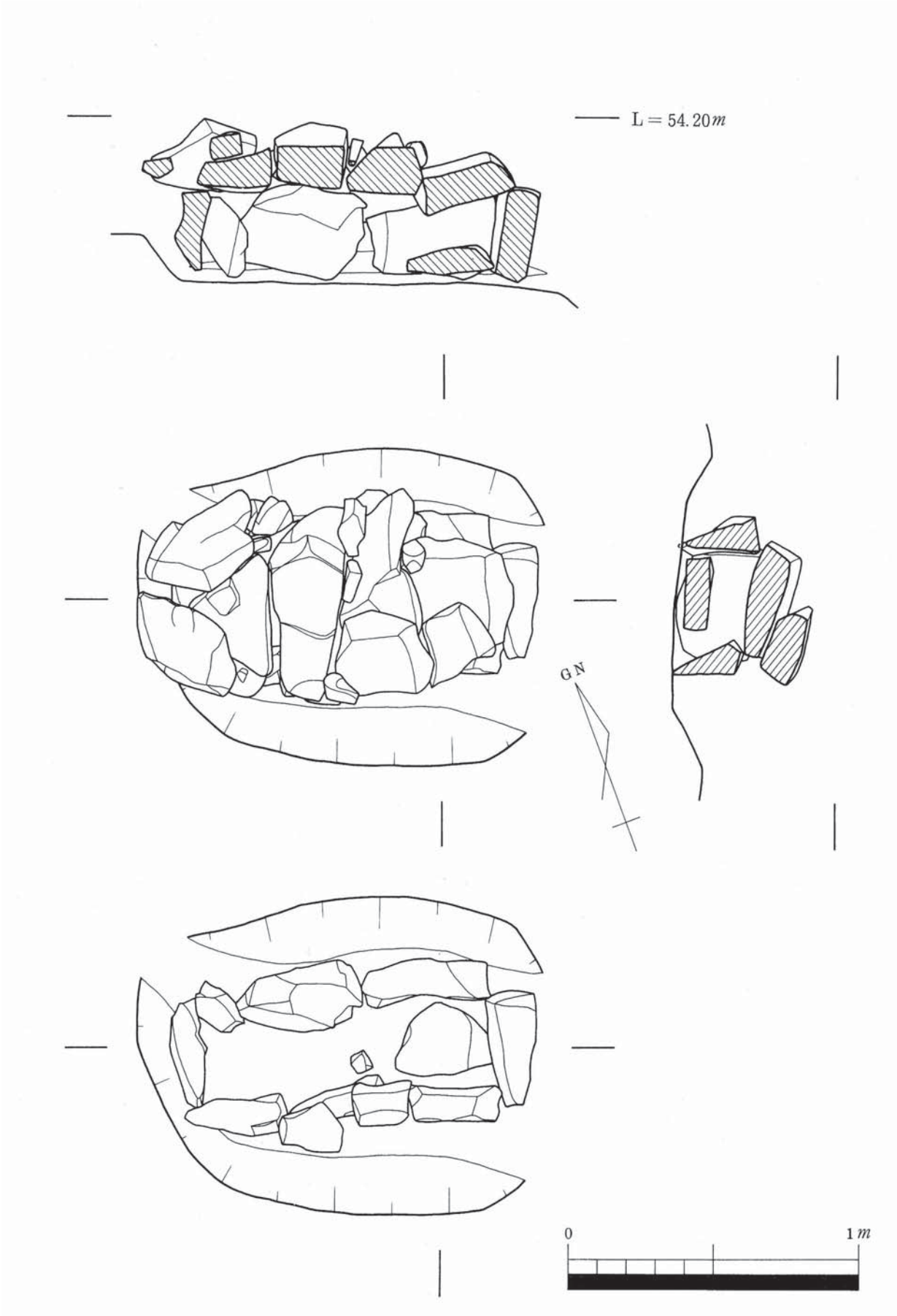

第10図　第5号古墳測量図



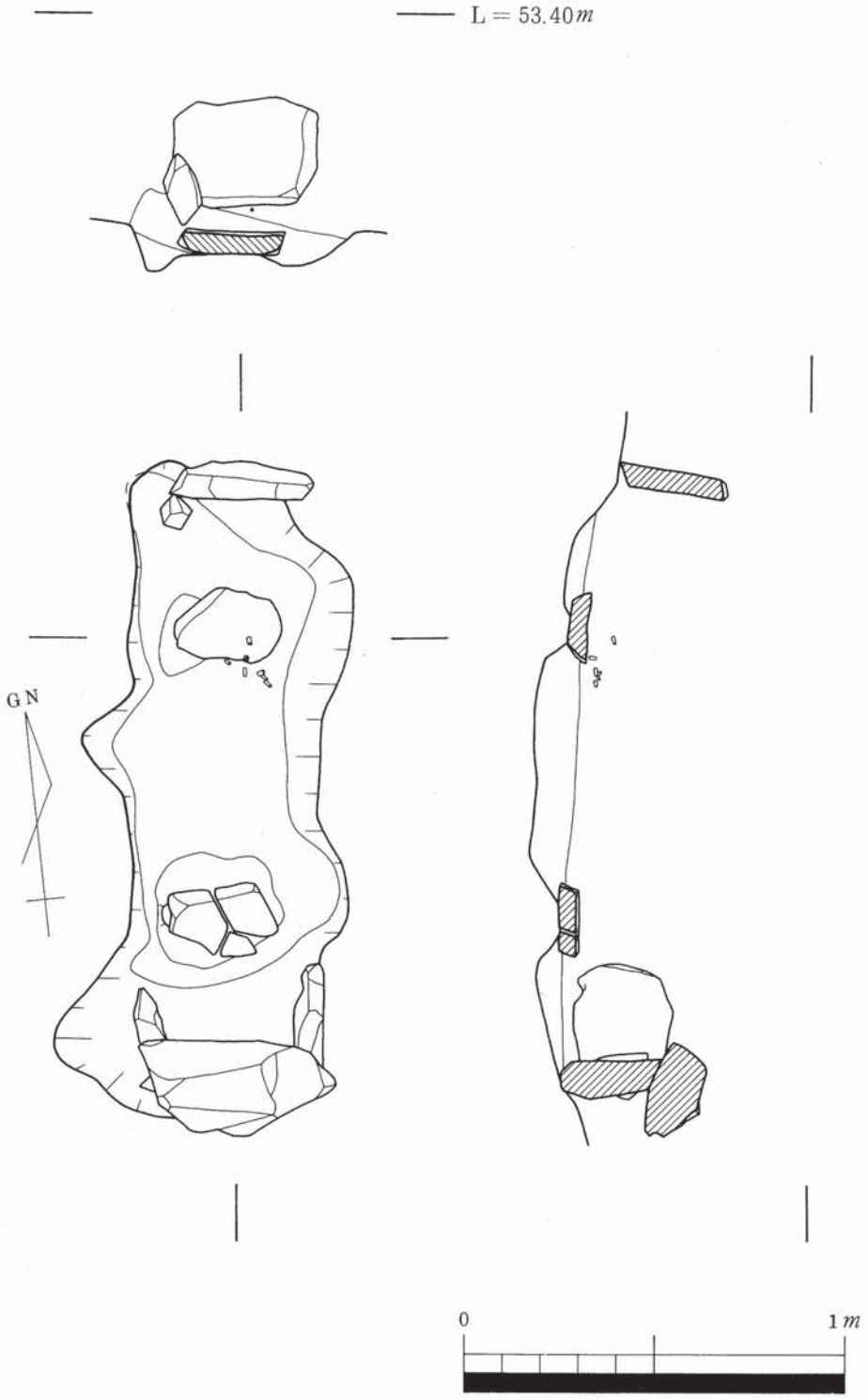

第11図　第5号古墳内部主体実測図



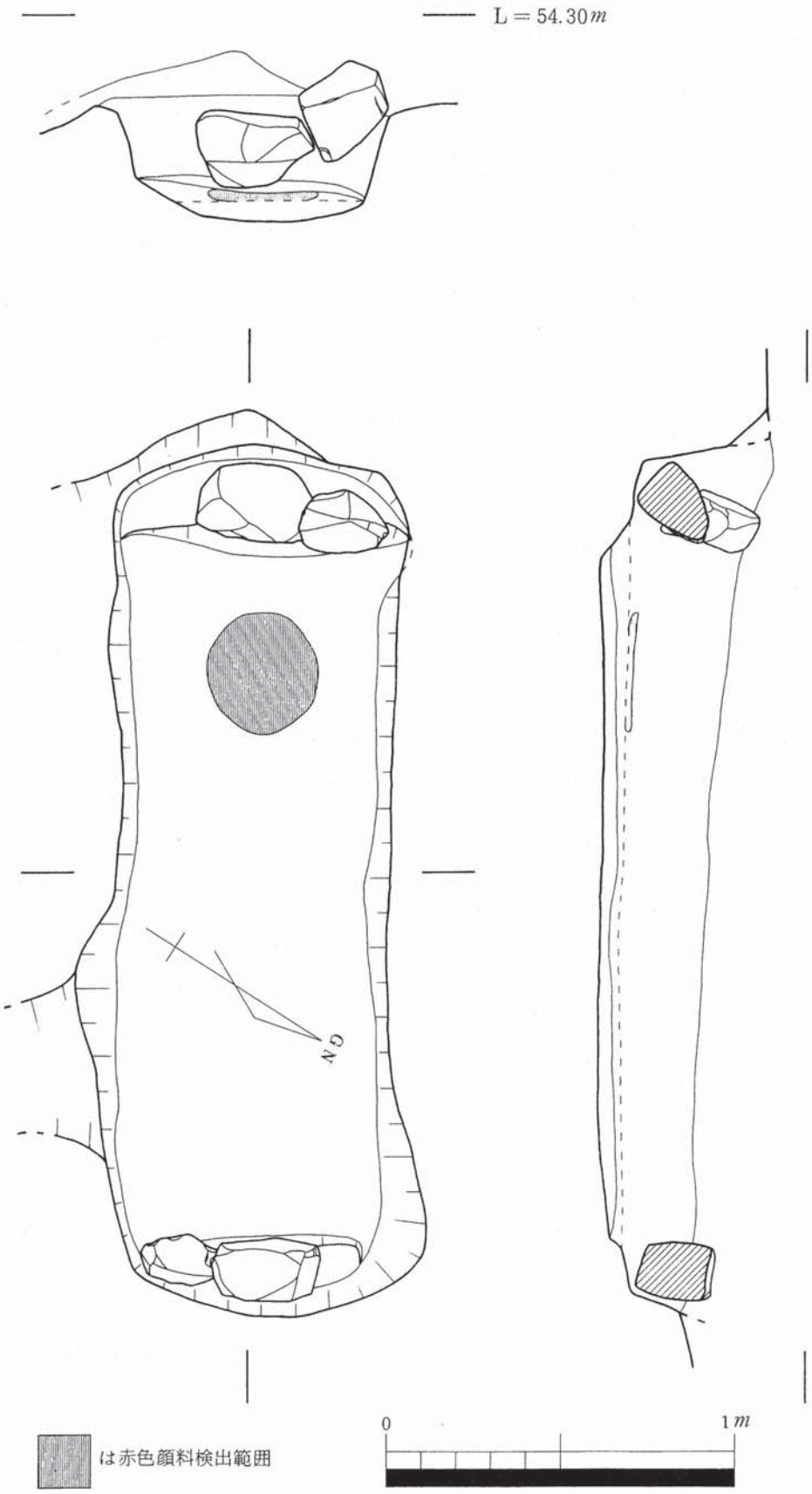

第12図　第1号主体実測図



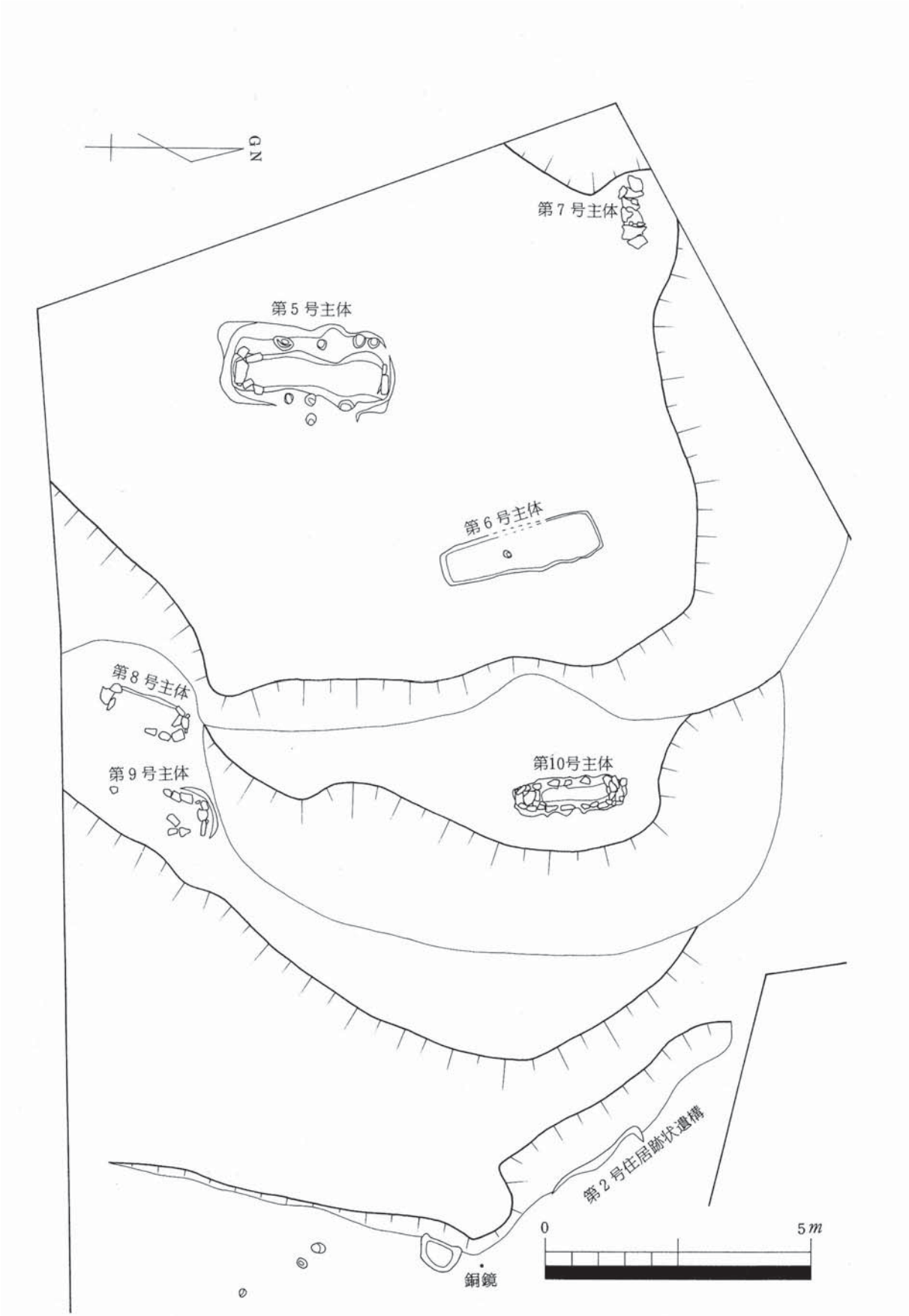

第13図　第2号主体実測図



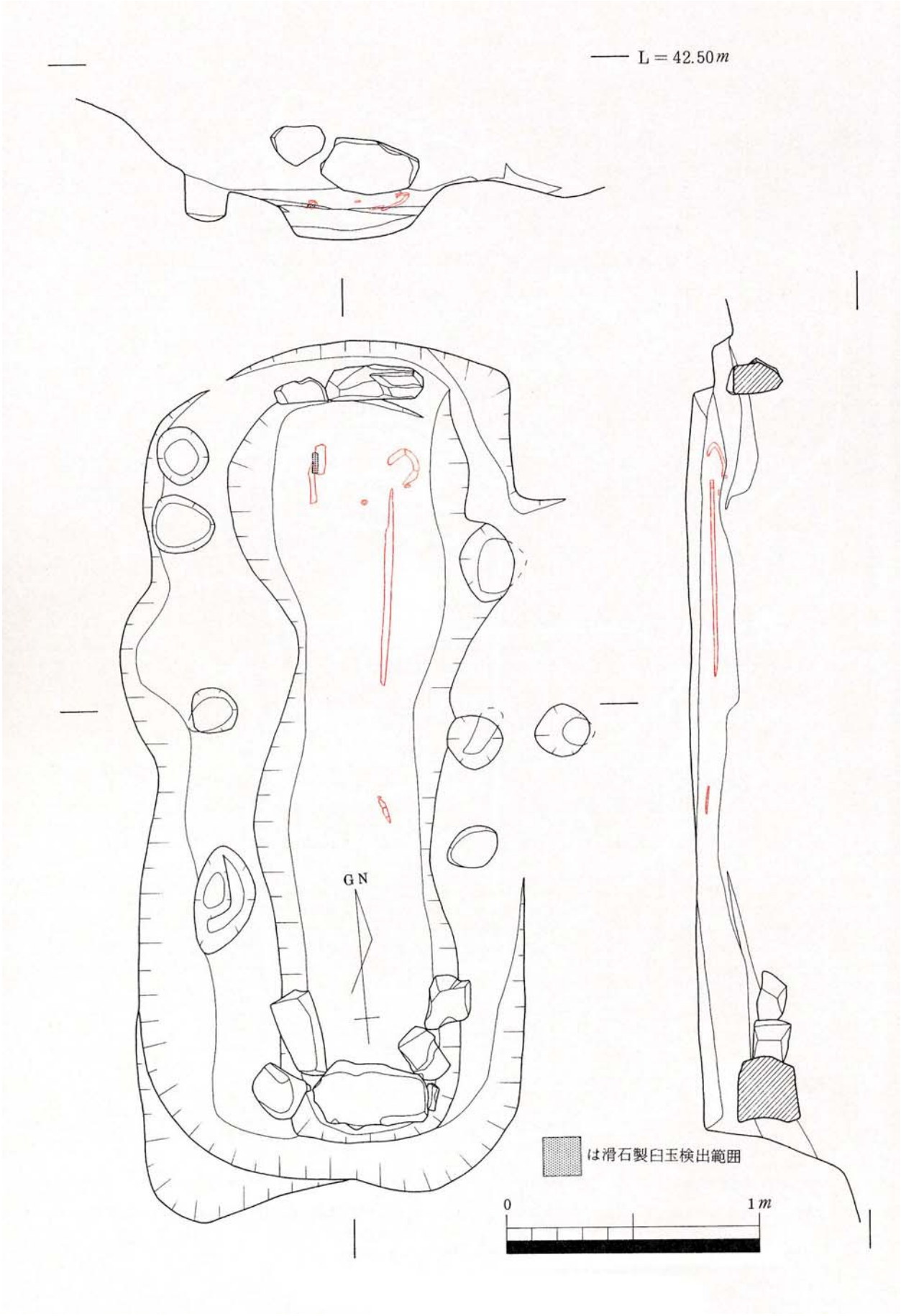

第14図　第3号主体実測図



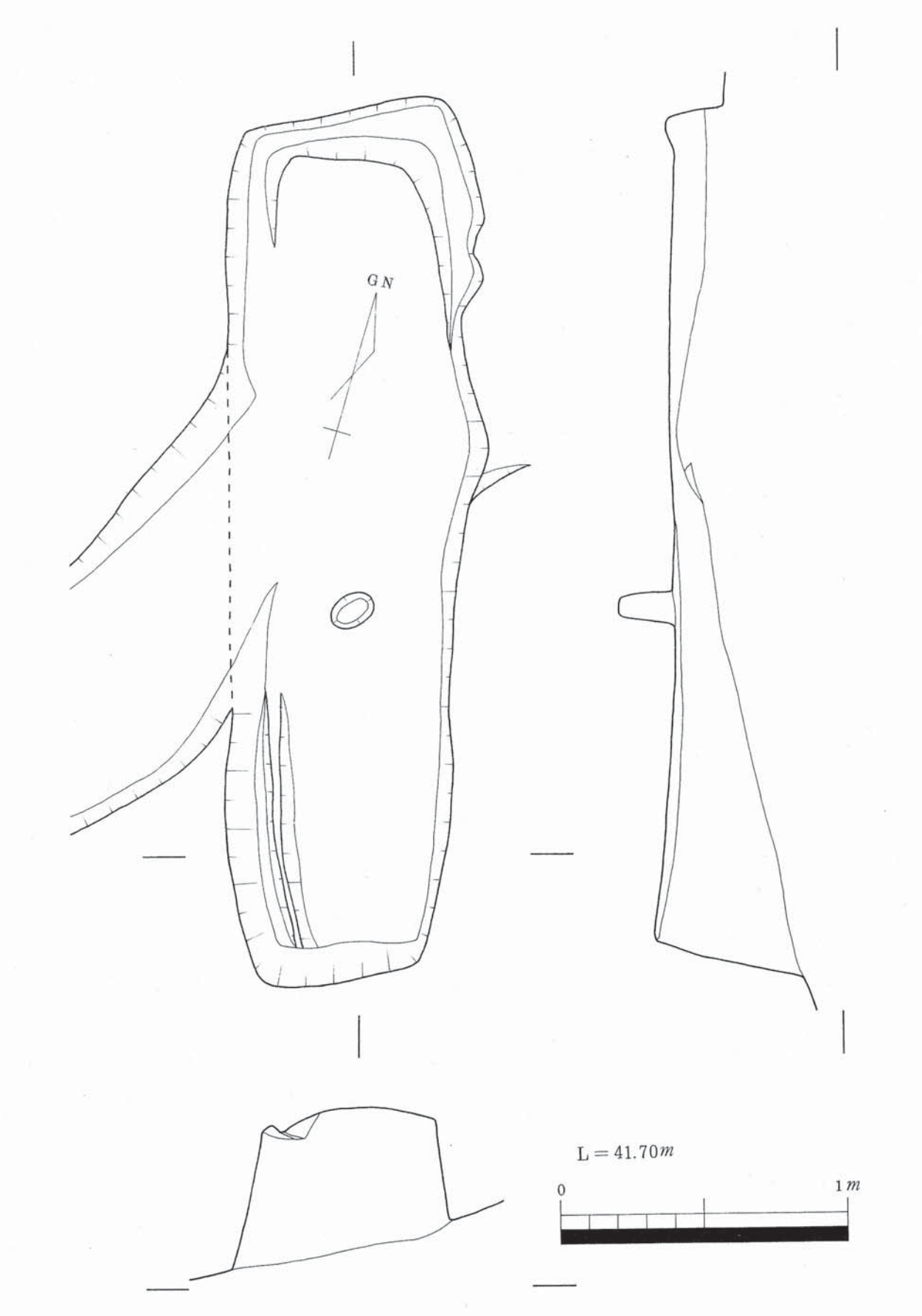

第15図　第4号主体実測図




第16図　第5号主体周辺遺構配置図

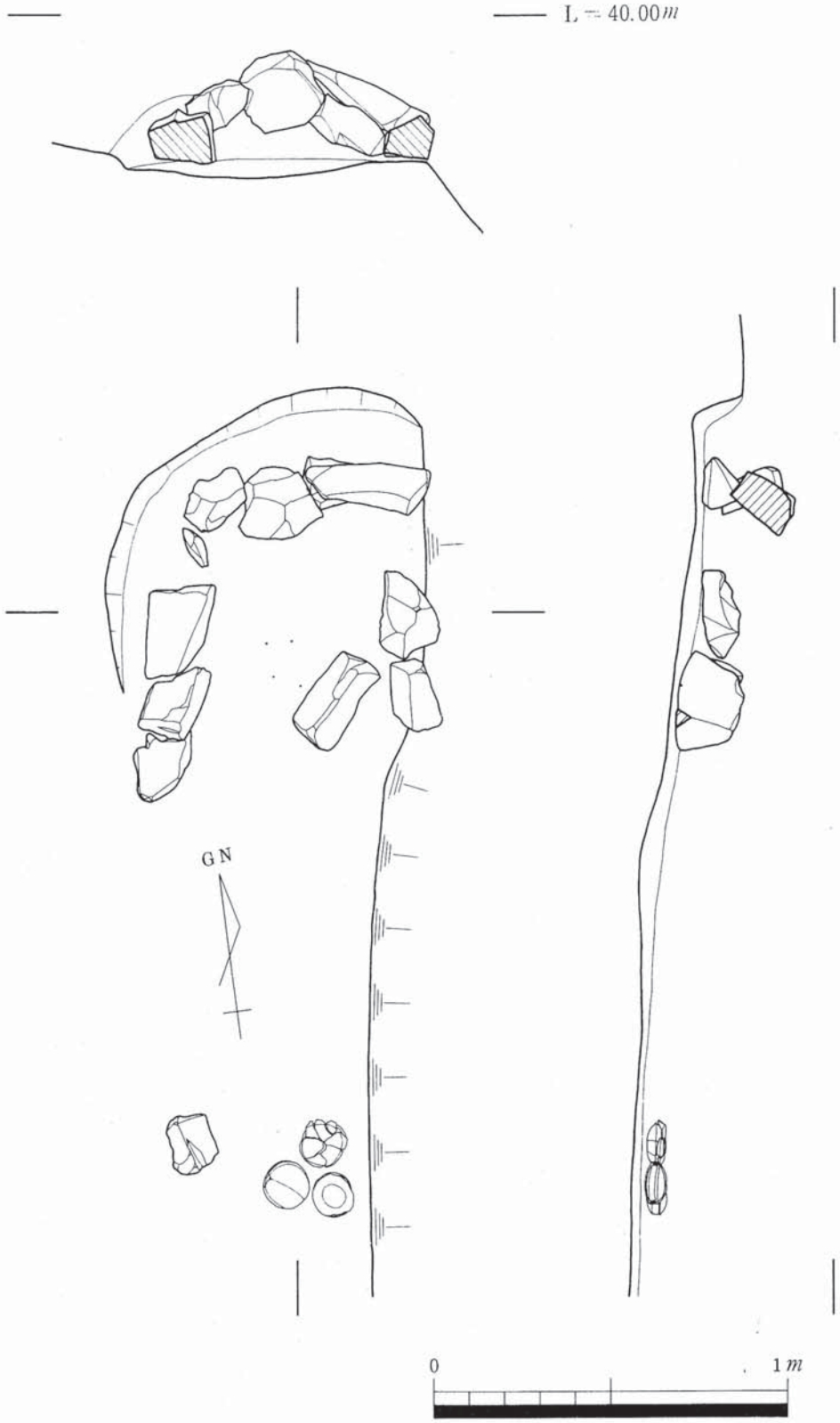



第17図　第5号主体実測図

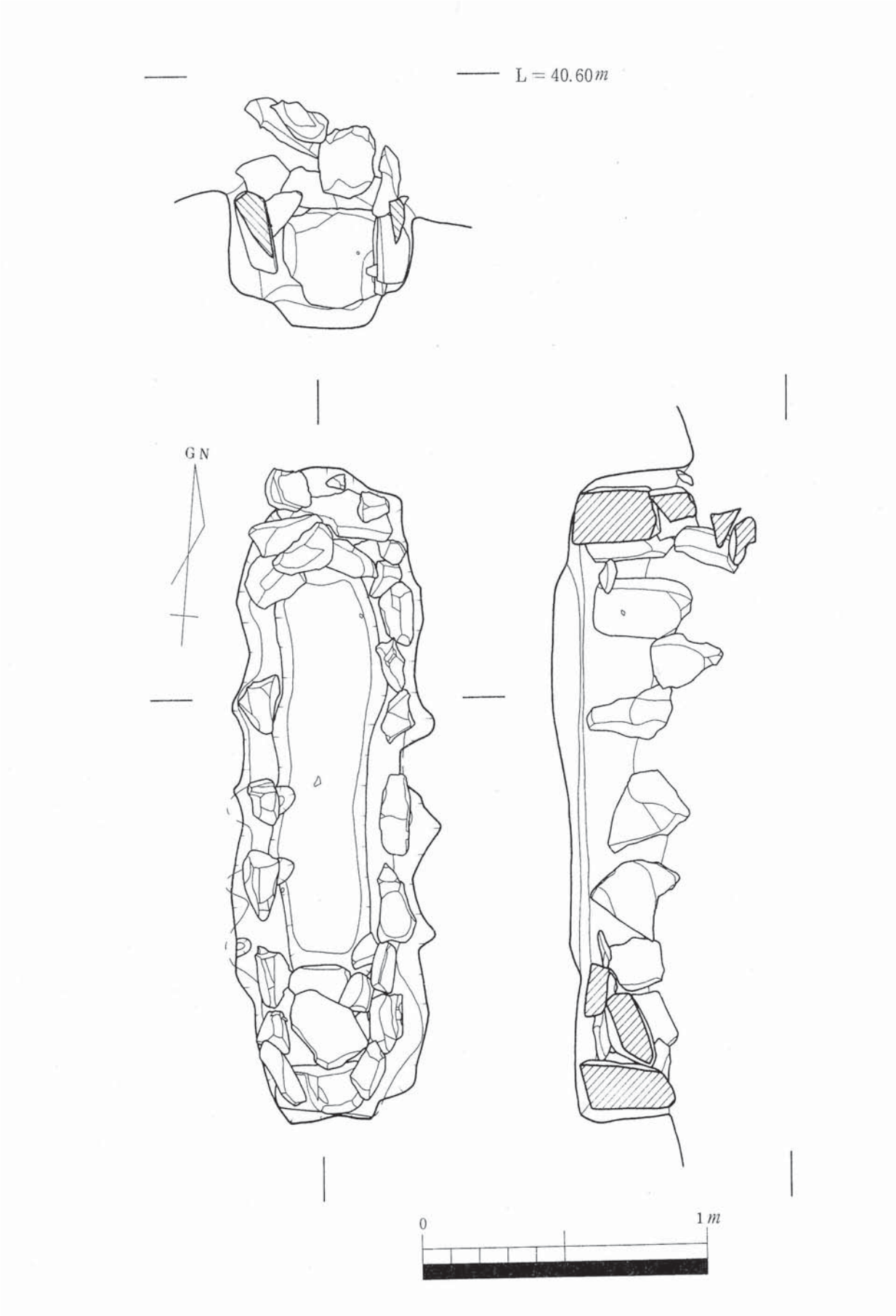



第18図　第6号主体実測図

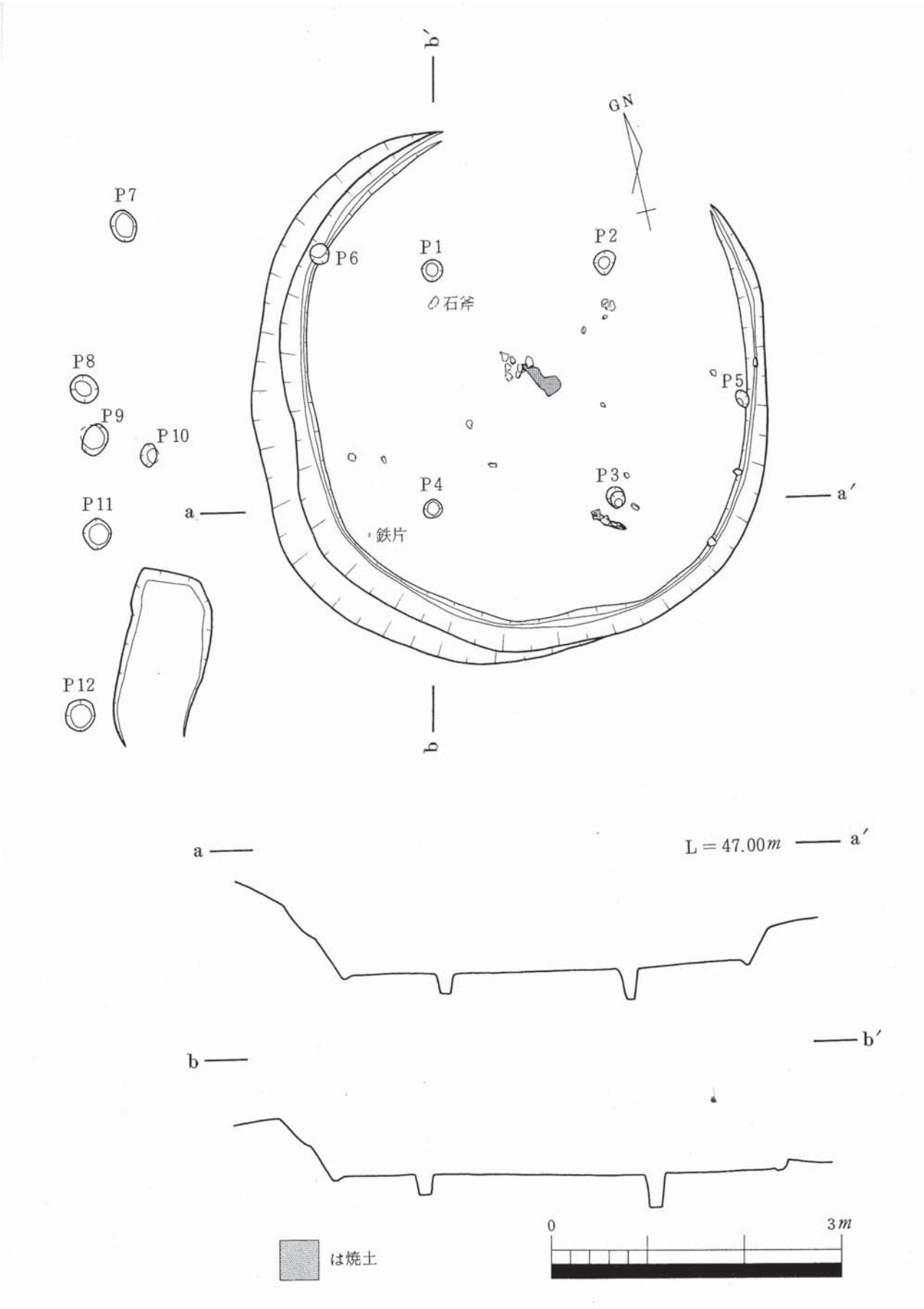
第19図　第７号主体(上)，第８号主体（下）実測図



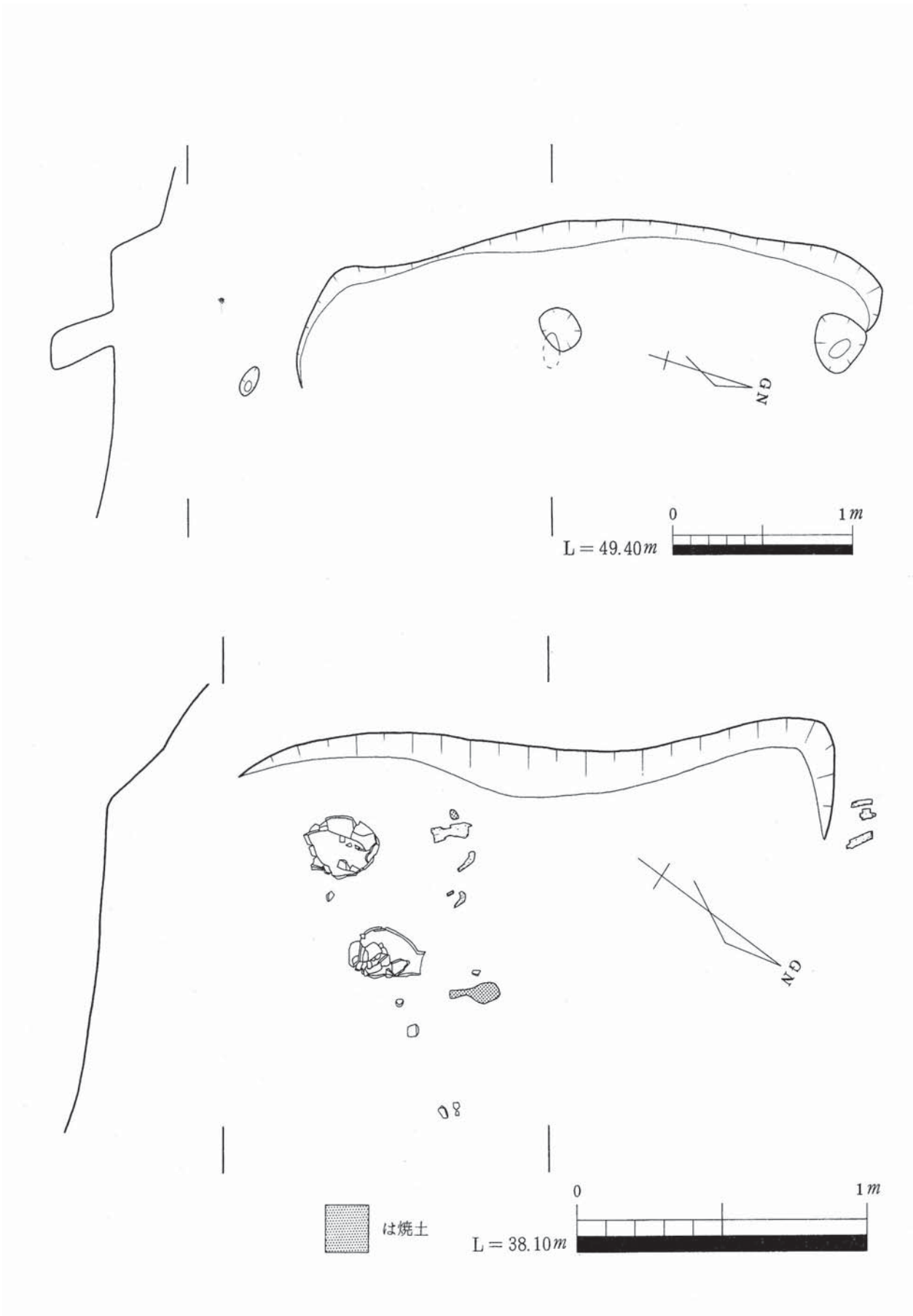

第20図　第9号主体実測図



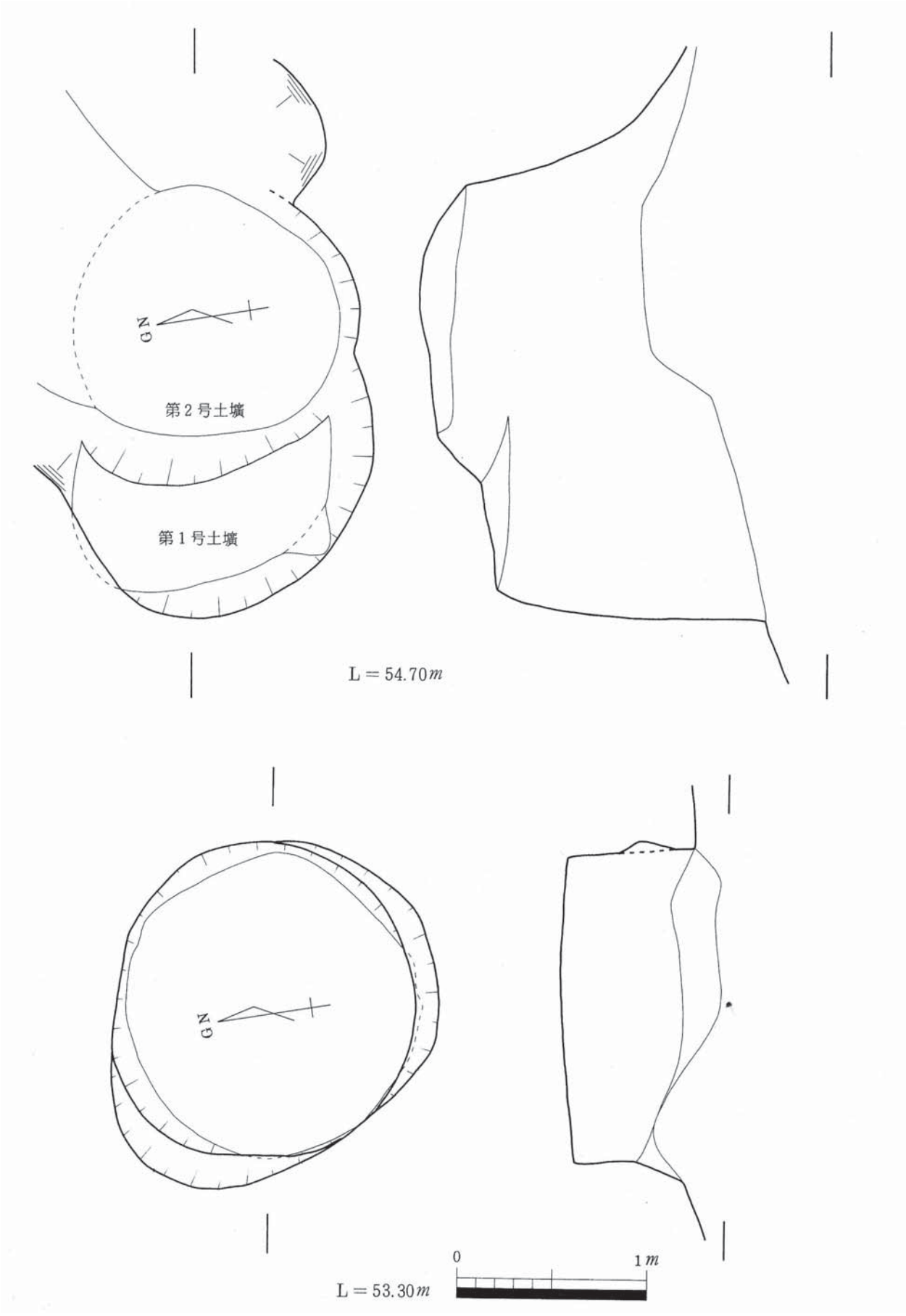

第21図　第10号主体実測図



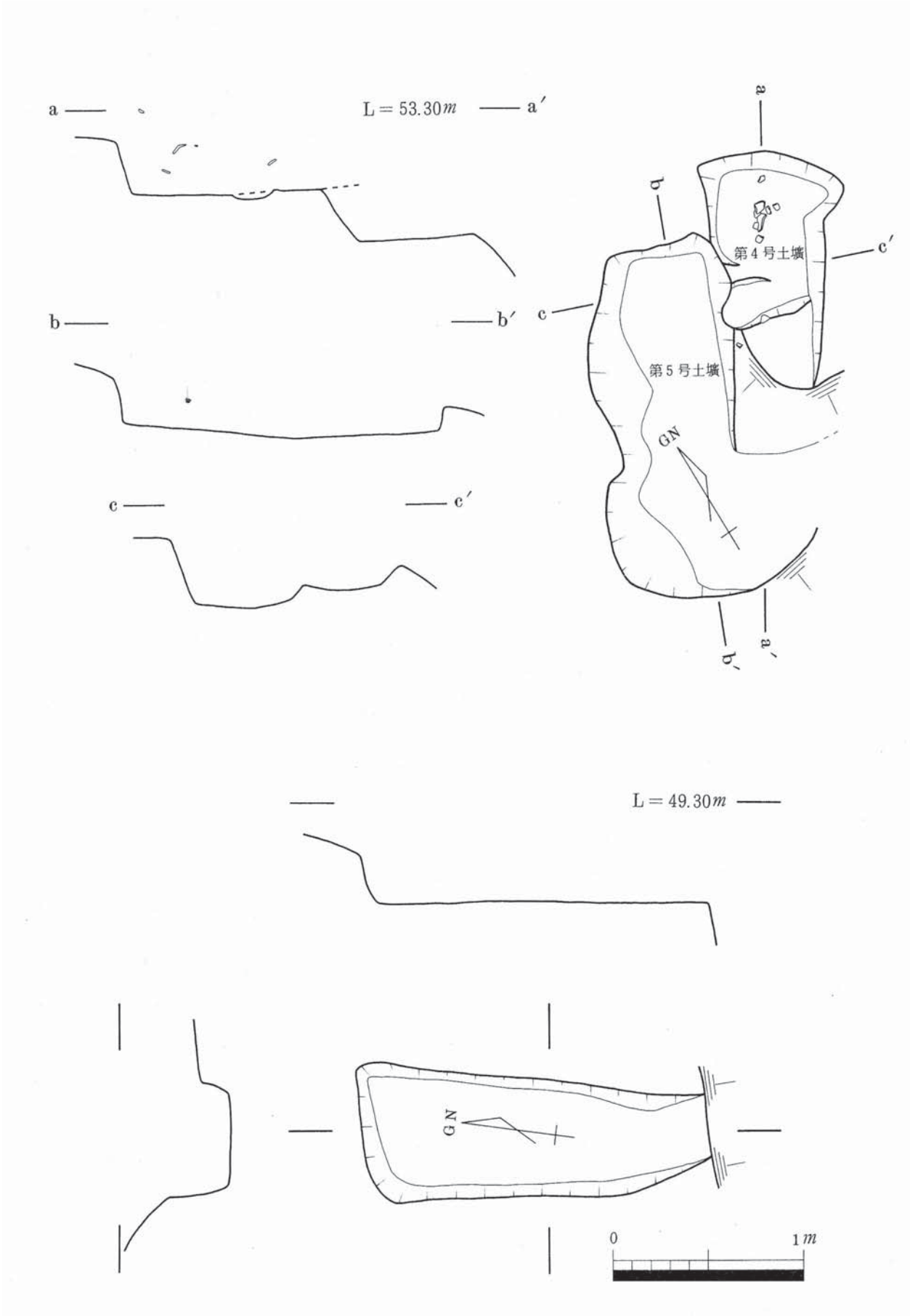

第22図　竪穴式住居跡実測図



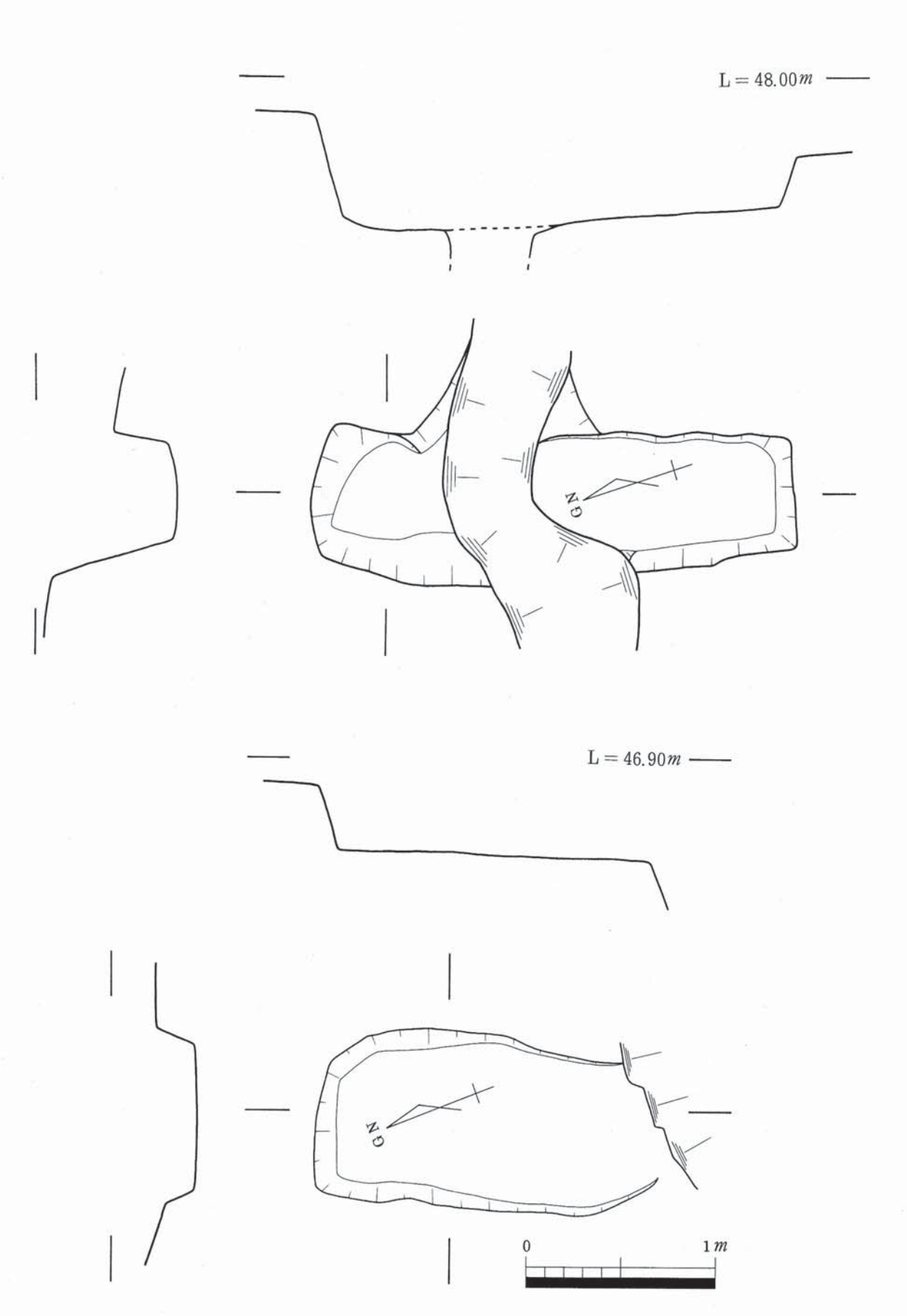

第23図　第1号住居跡状遺構（上），第2号住居跡状遺構（下）実測図




第24図　第1号，第2号土壙（上），第3号土壙（下）実測図

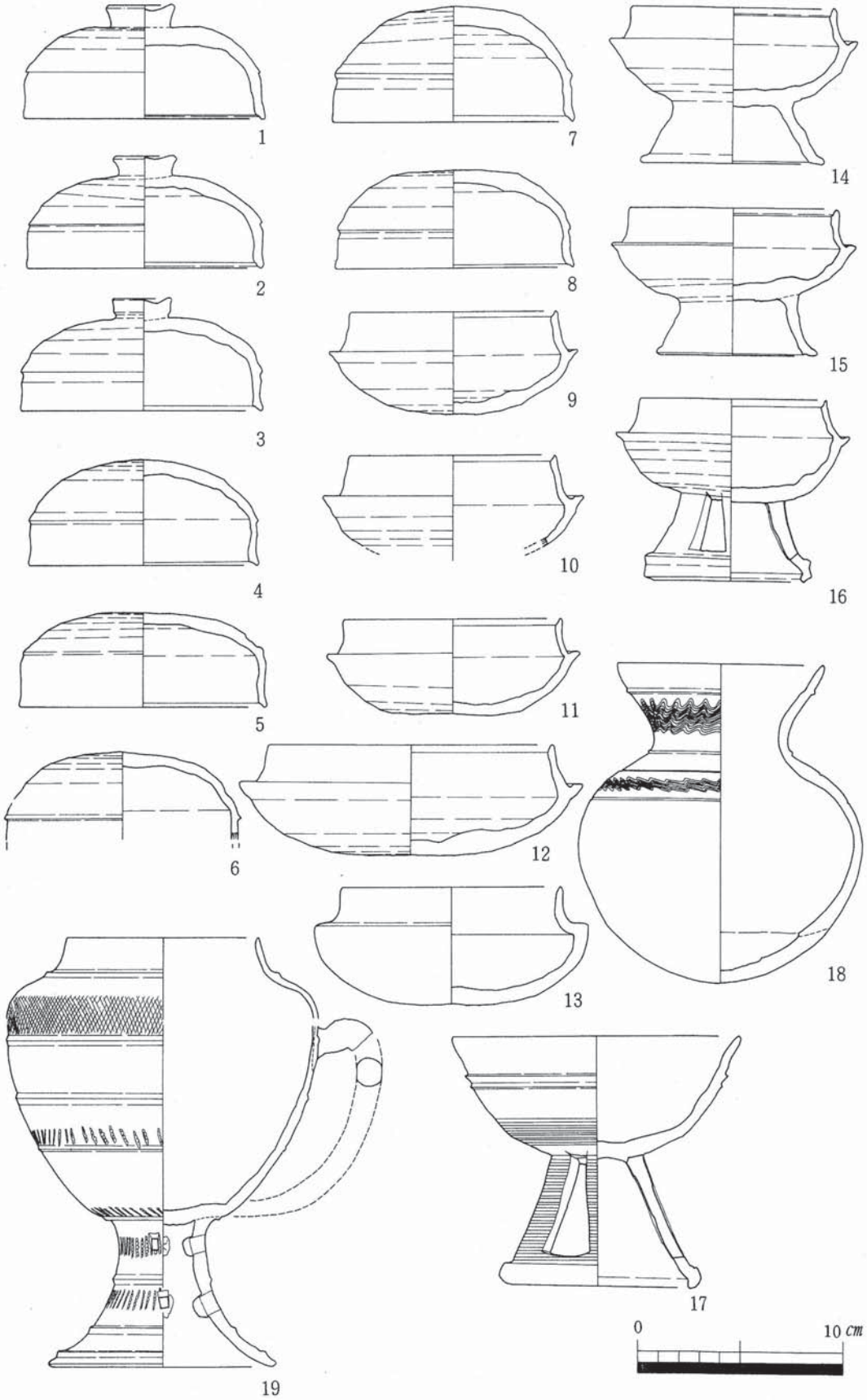



第25図　第4号，第5号土壙（上），第6号土壙（下）実測図

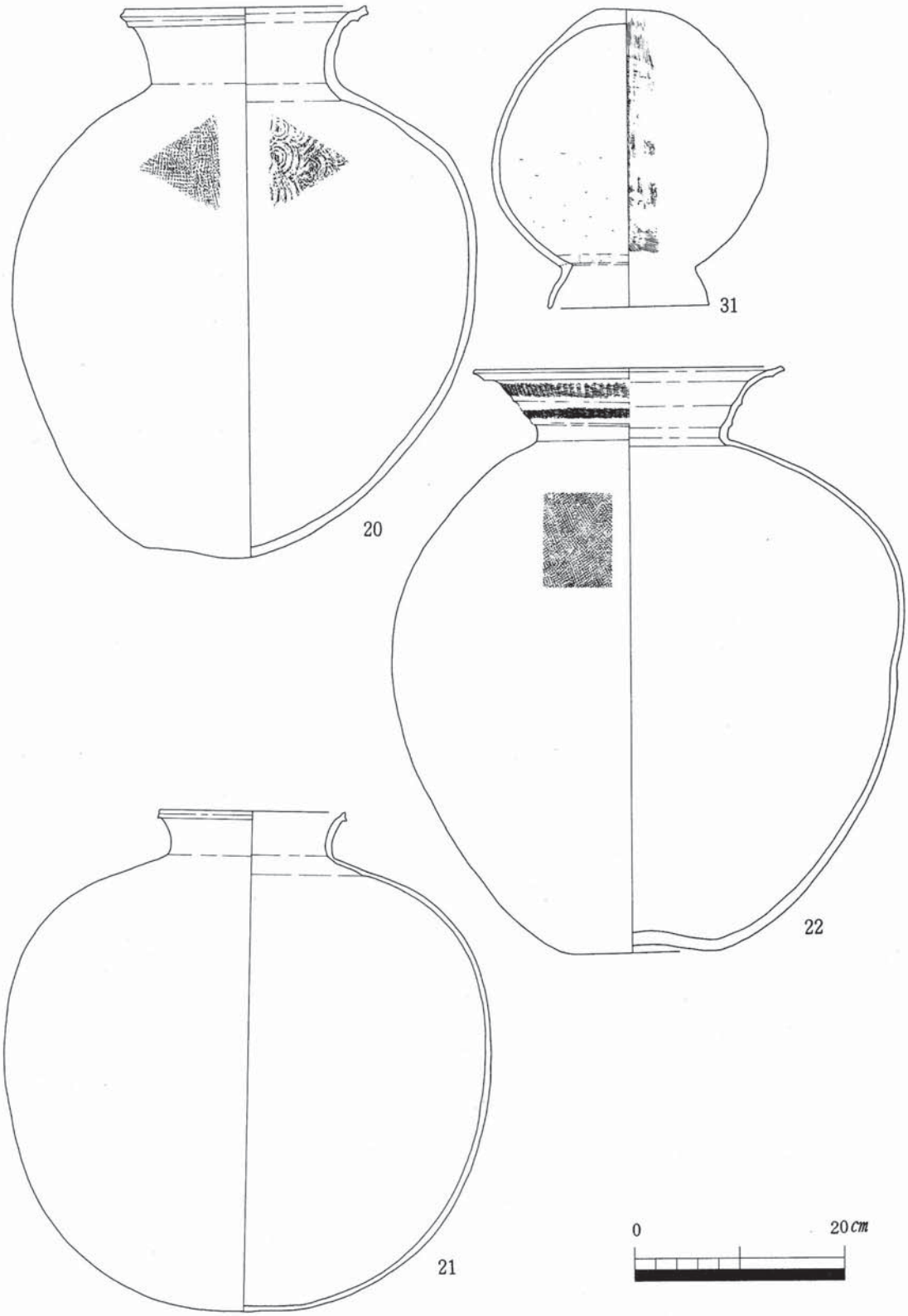



第26図　第7号土壙（上），第8号土壙（下）実測図

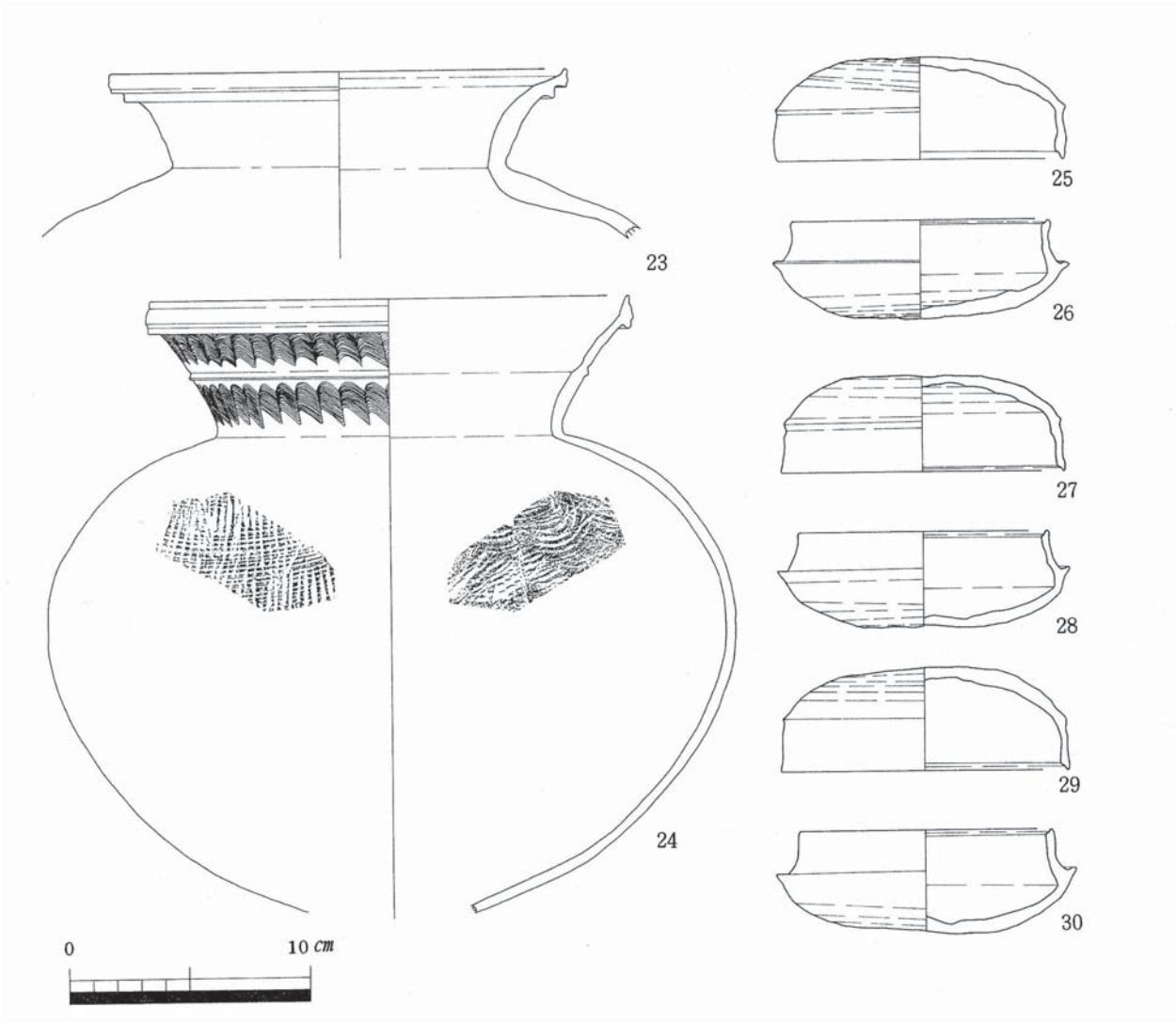
第27図　第2号古墳地形測量図



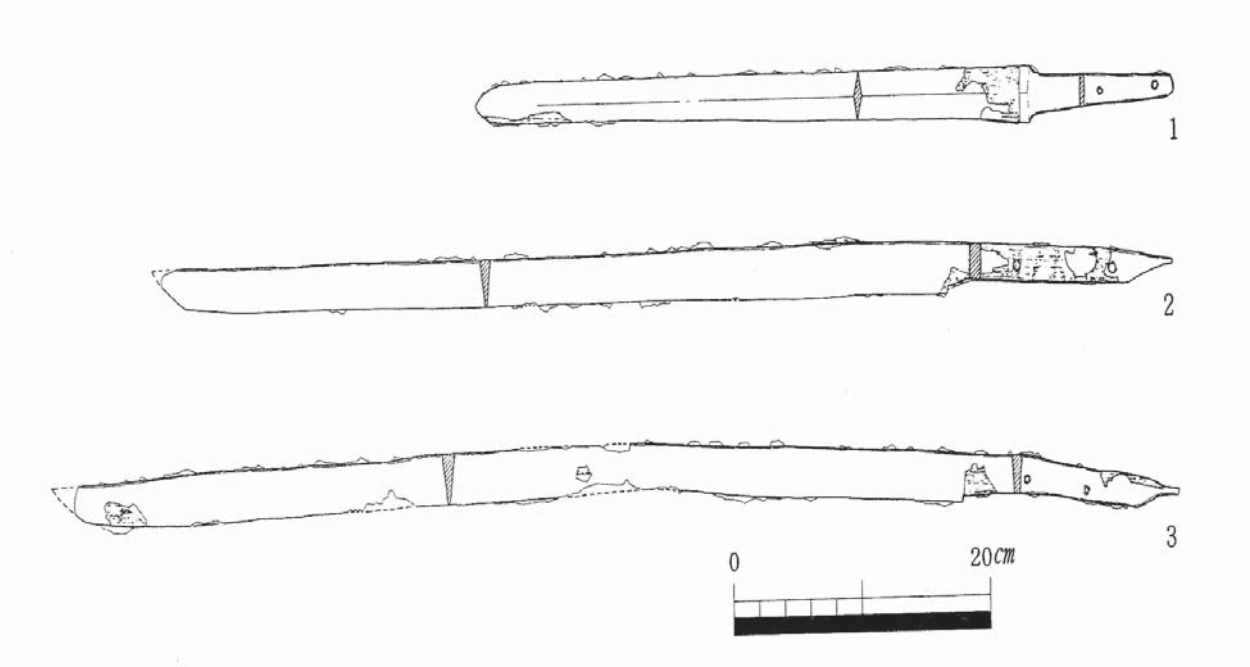

第28図　池の内遺跡出土須恵器実測図（1）



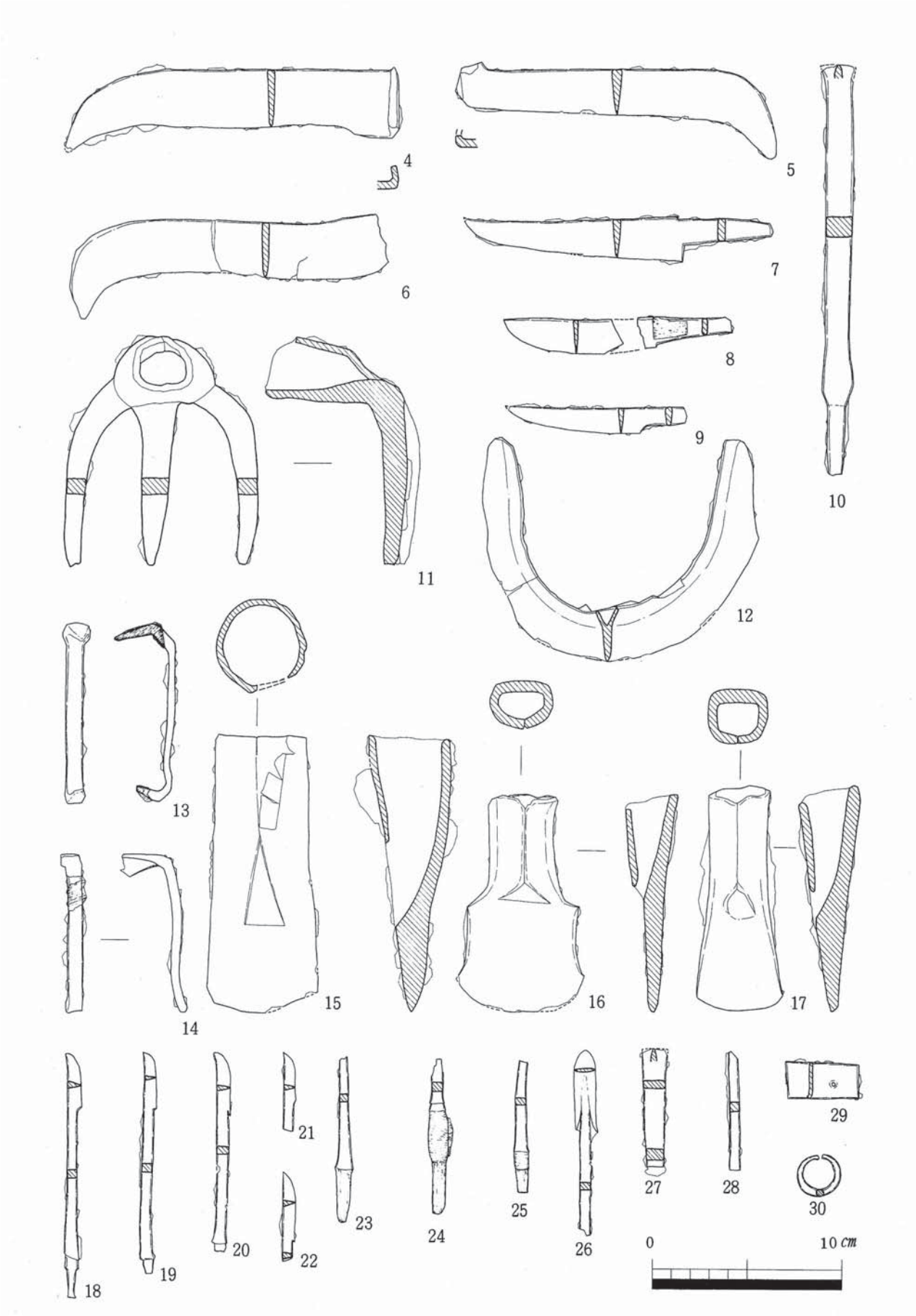

第29図　池の内遺跡出土須恵器及び土師器実測図



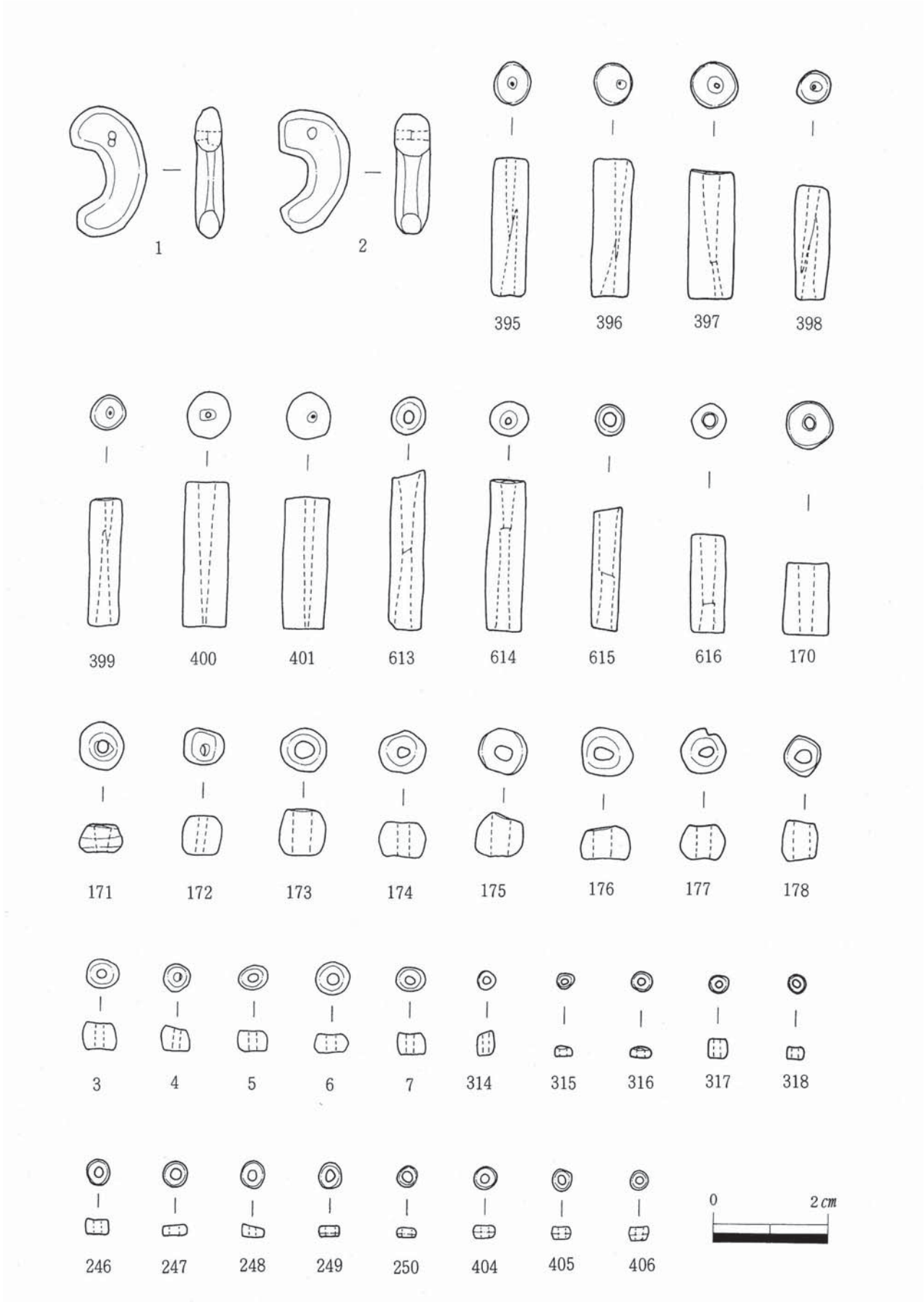

第30図　池の内遺跡出土須恵器実測図（２）



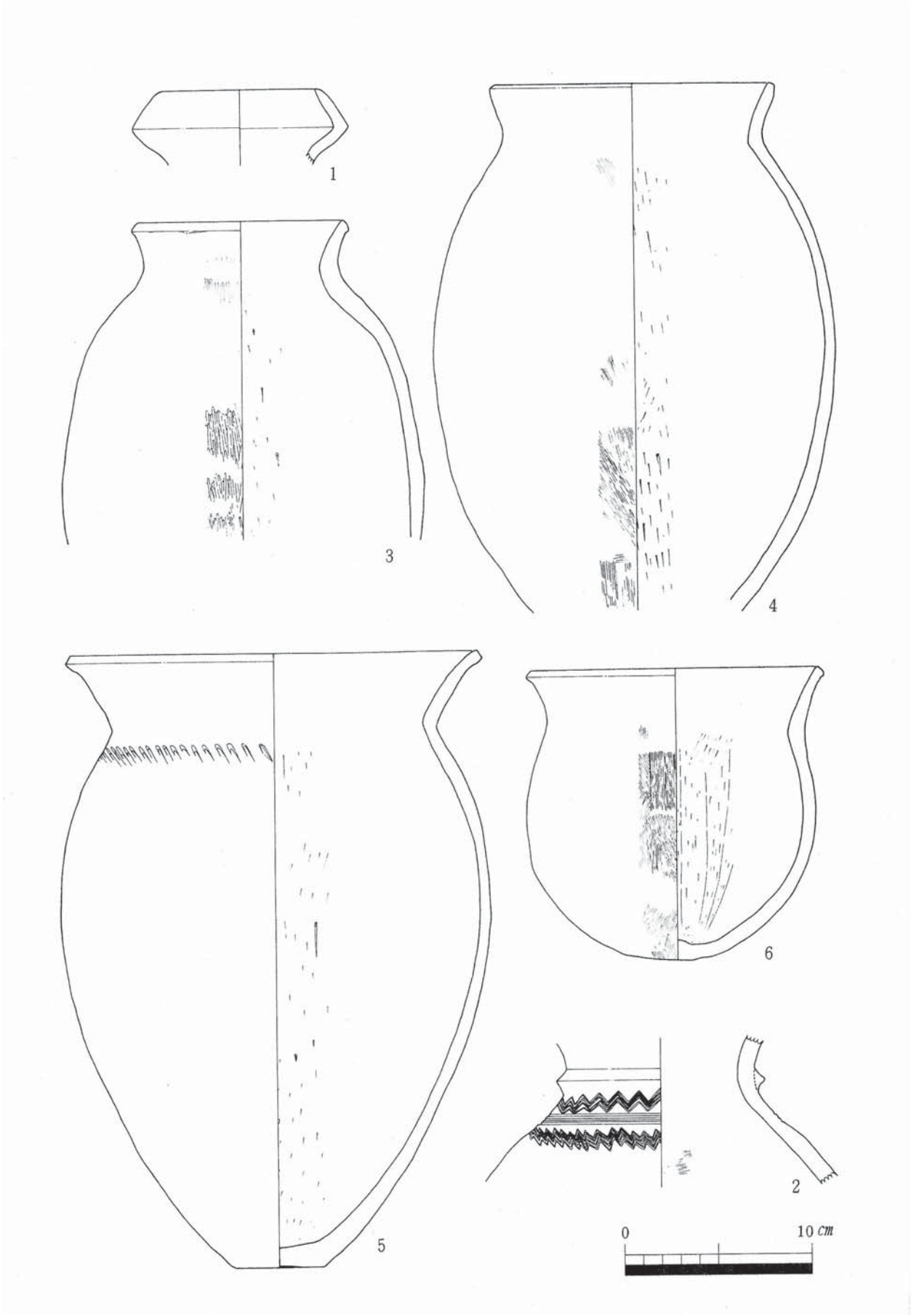

第31図　池の内遺跡出土鉄剣及び鉄刀実測図



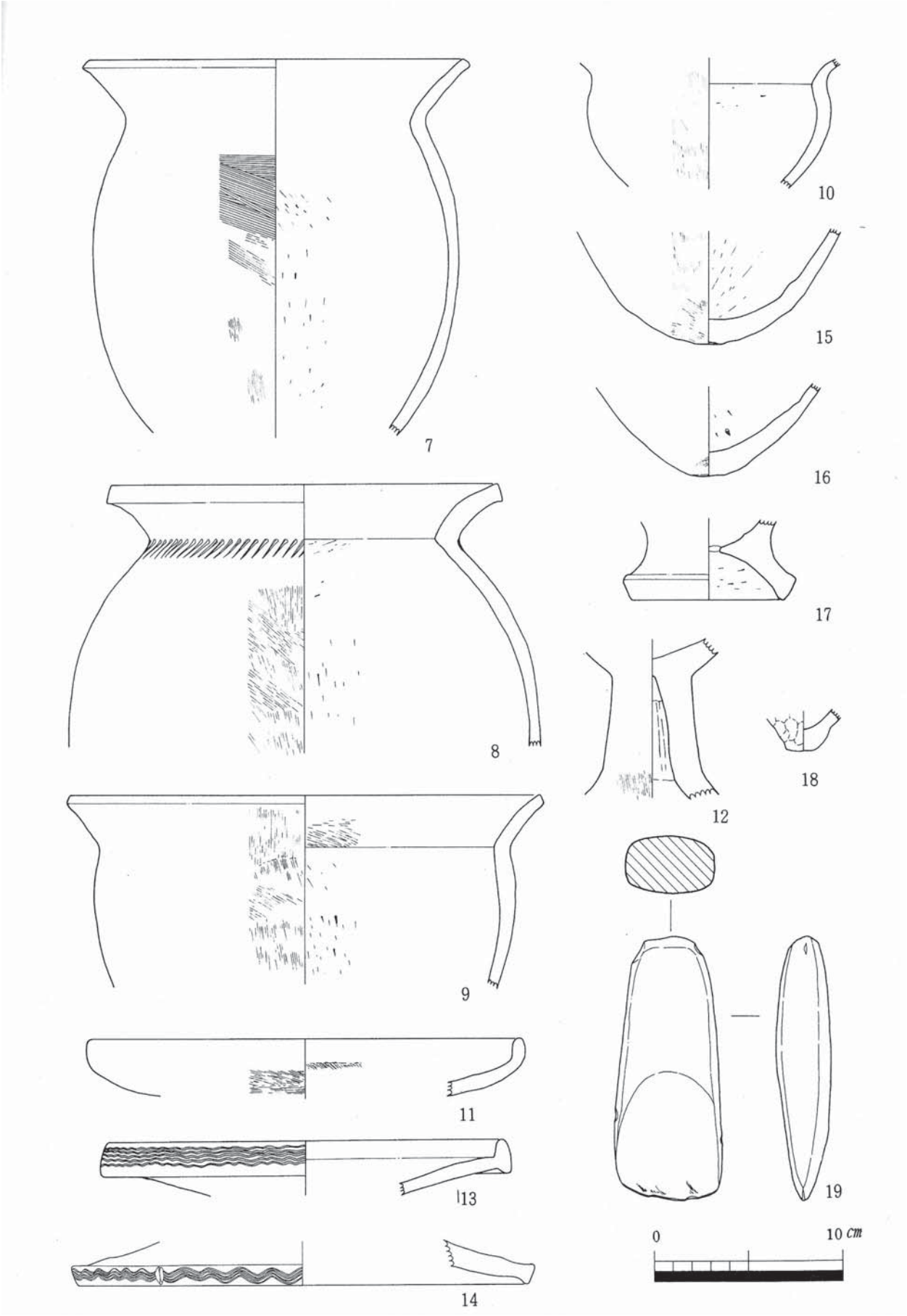

第 32 図　池の内遺跡出土鉄製品及び耳輪実測図



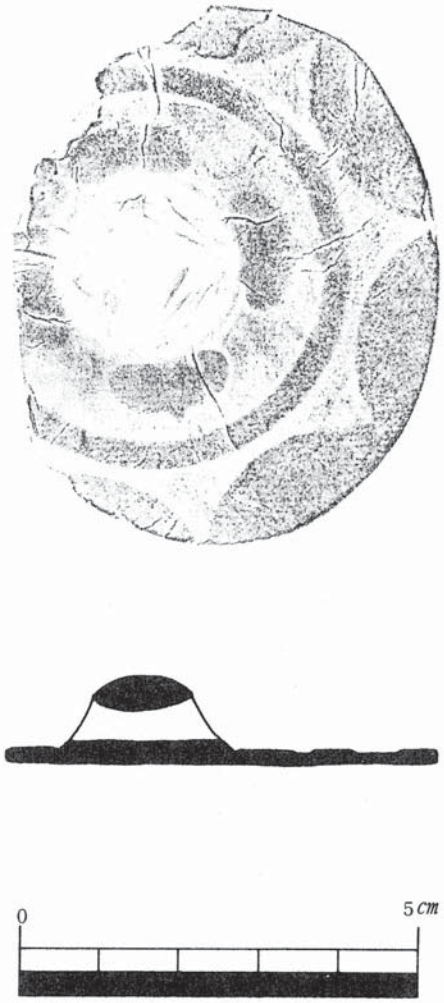

第33図　池の内遺跡出土玉類実測図



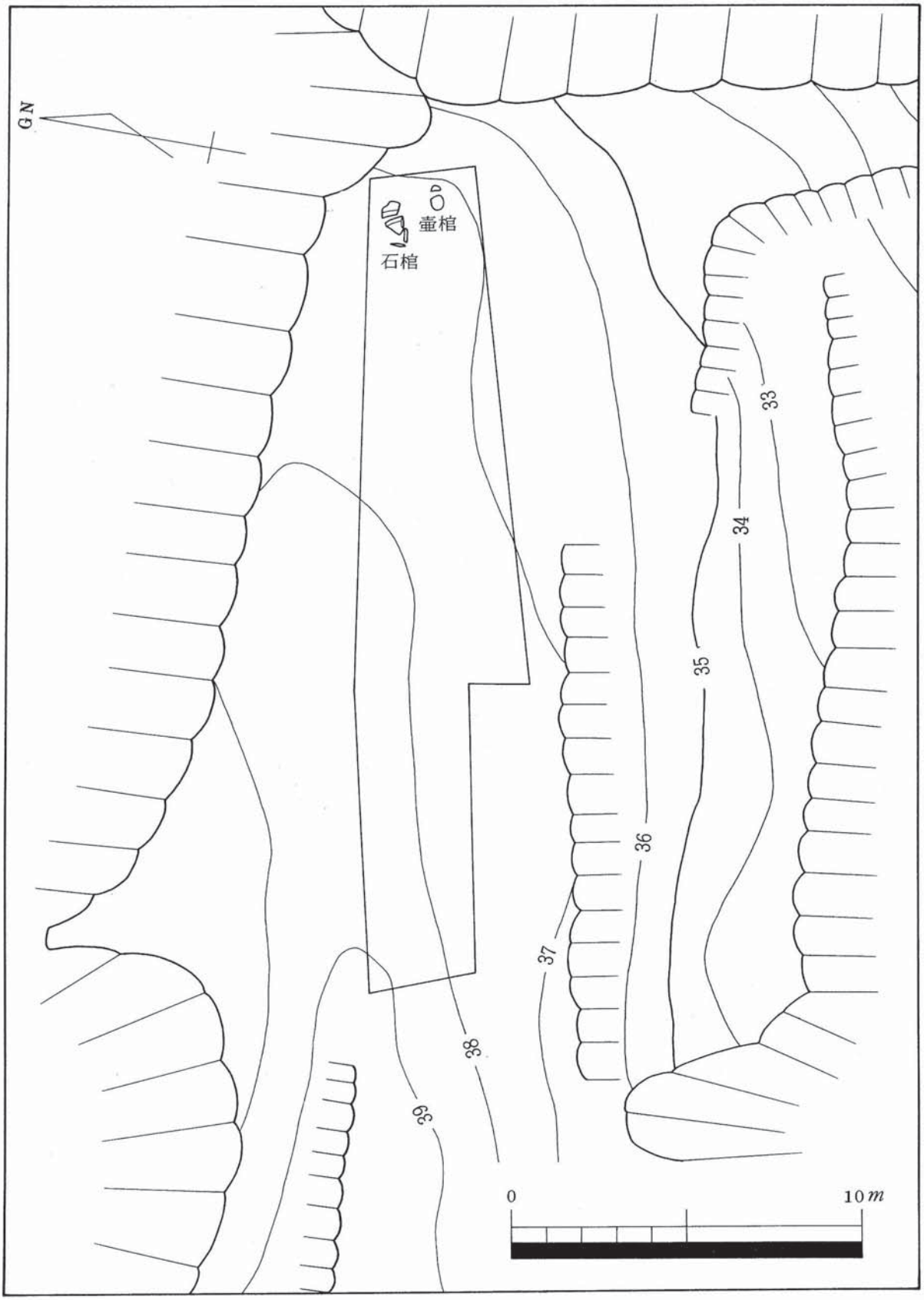

第34図　池の内遺跡出土弥生土器実測図



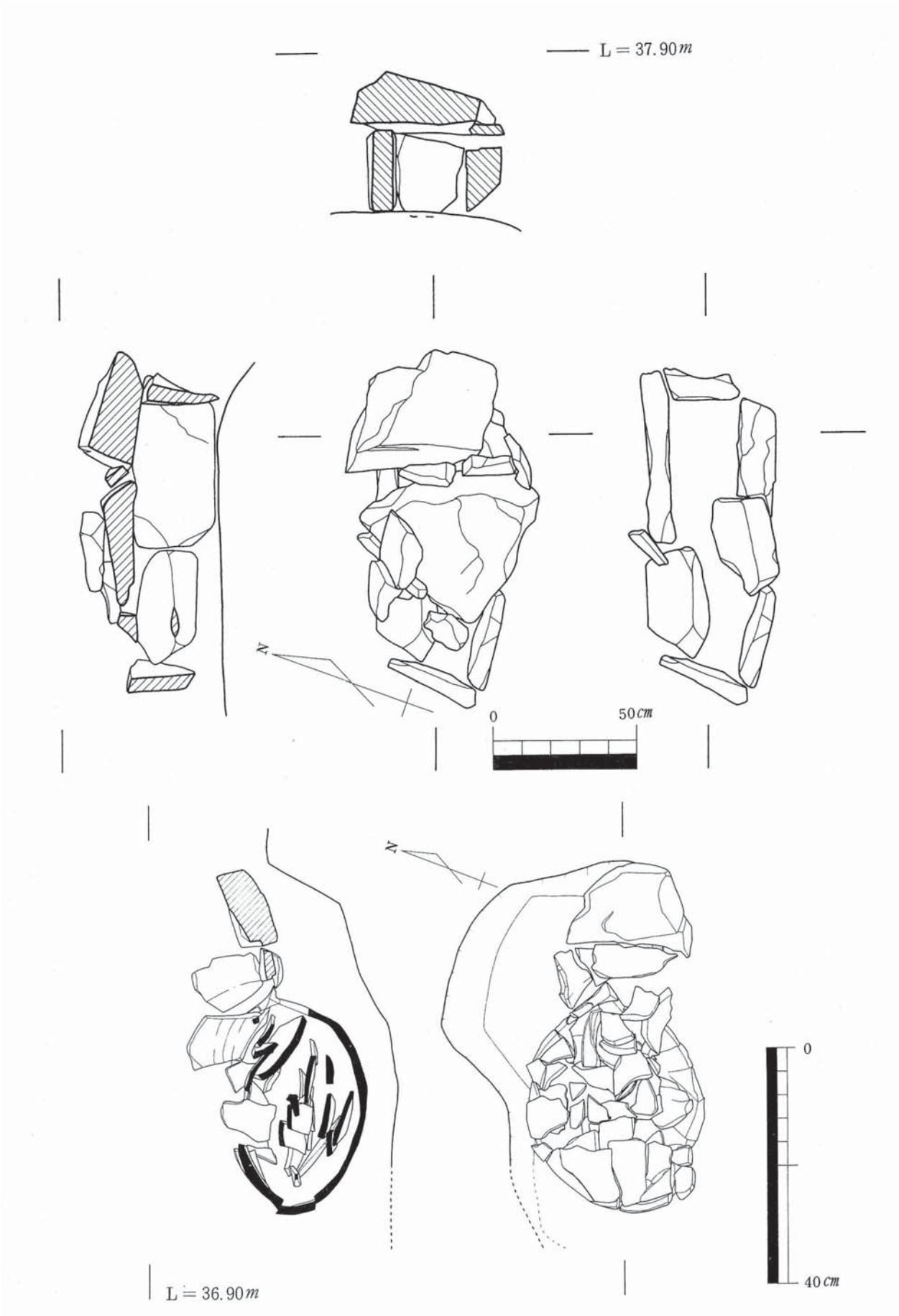

第35図　池の内遺跡出土弥生土器及び鉄斧実測図



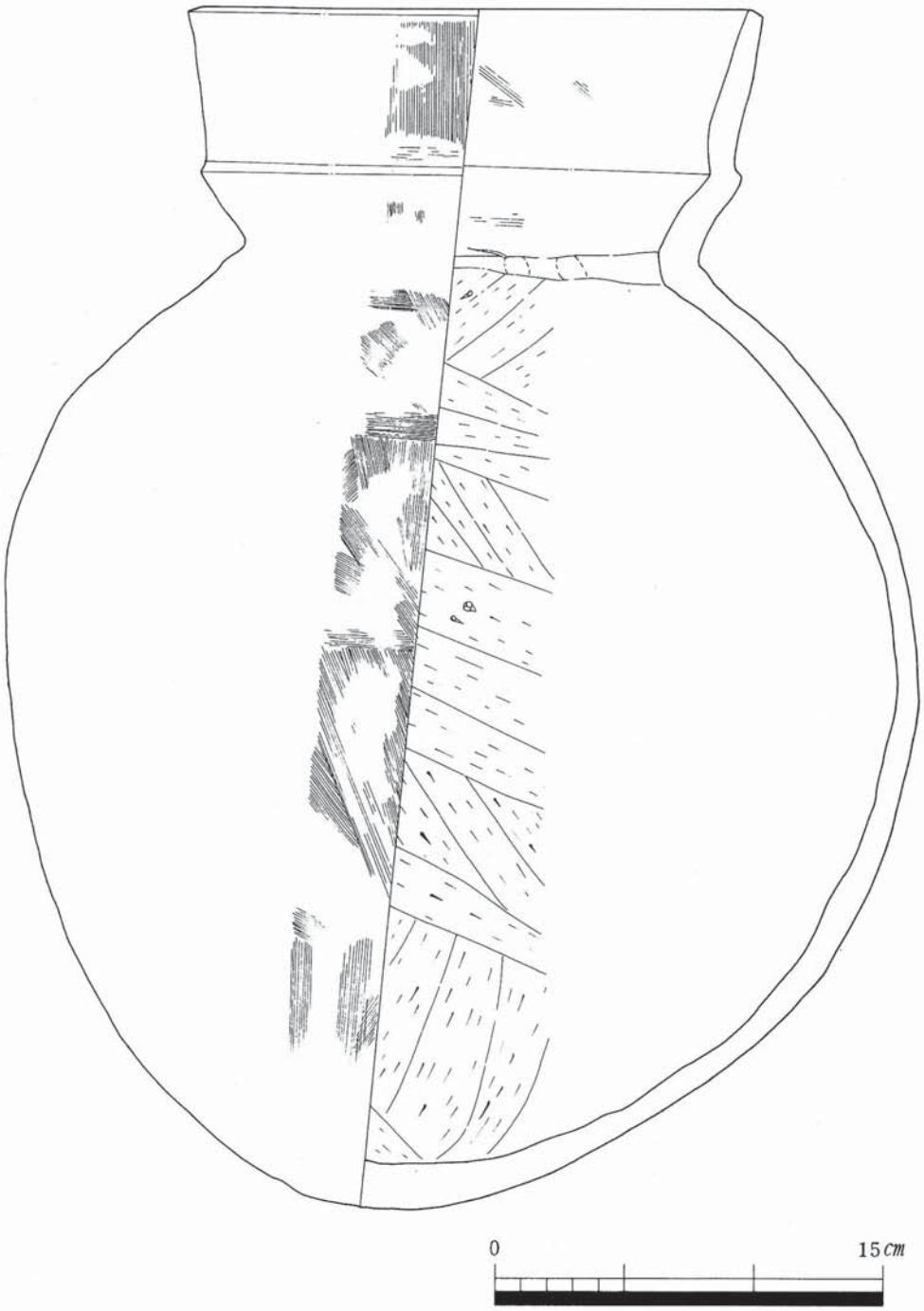

第36図　池の内遺跡出土銅鏡拓影




第37図　亀岡遺跡遺構配置図




第38図　亀岡遺跡箱式石棺（上），壺棺（下）実測図

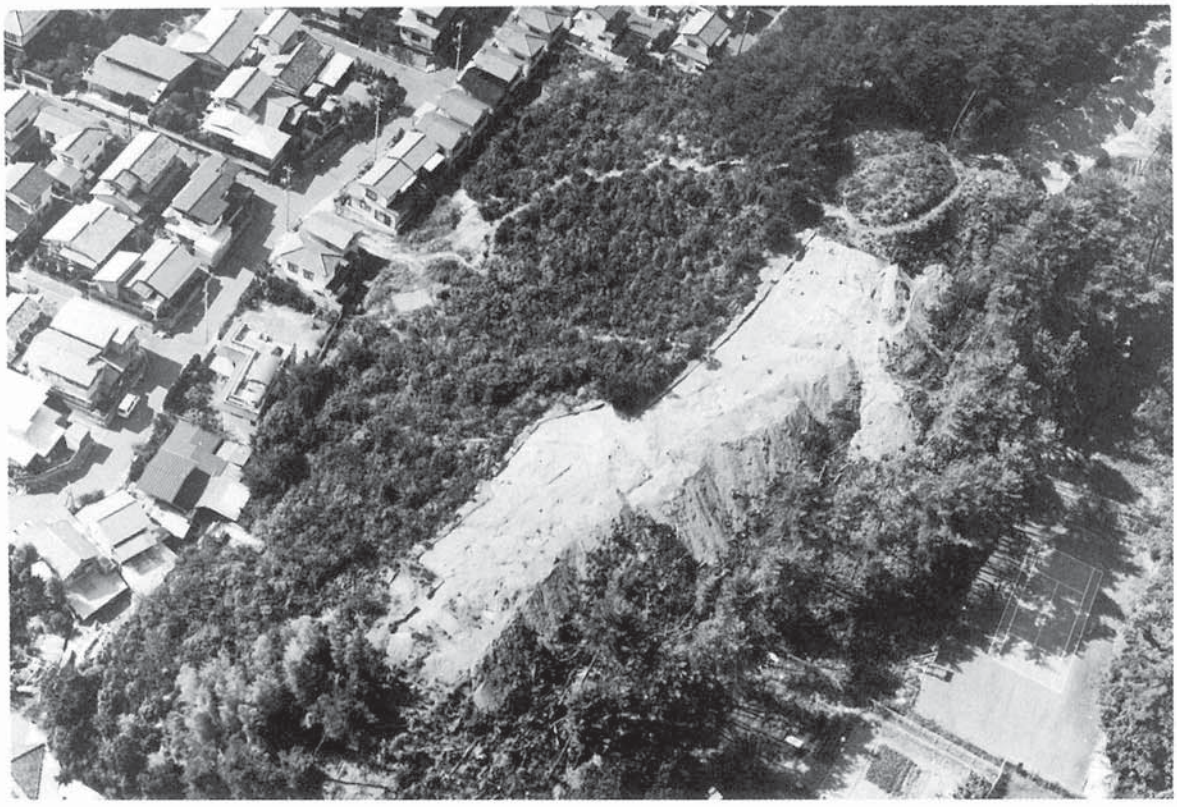



第39図　亀岡遺跡出土土器実測図

# 図　　版

池の内遺跡全景（西から，航空写真）

a. 池の内遺跡西側調査区（北から，航空写真）

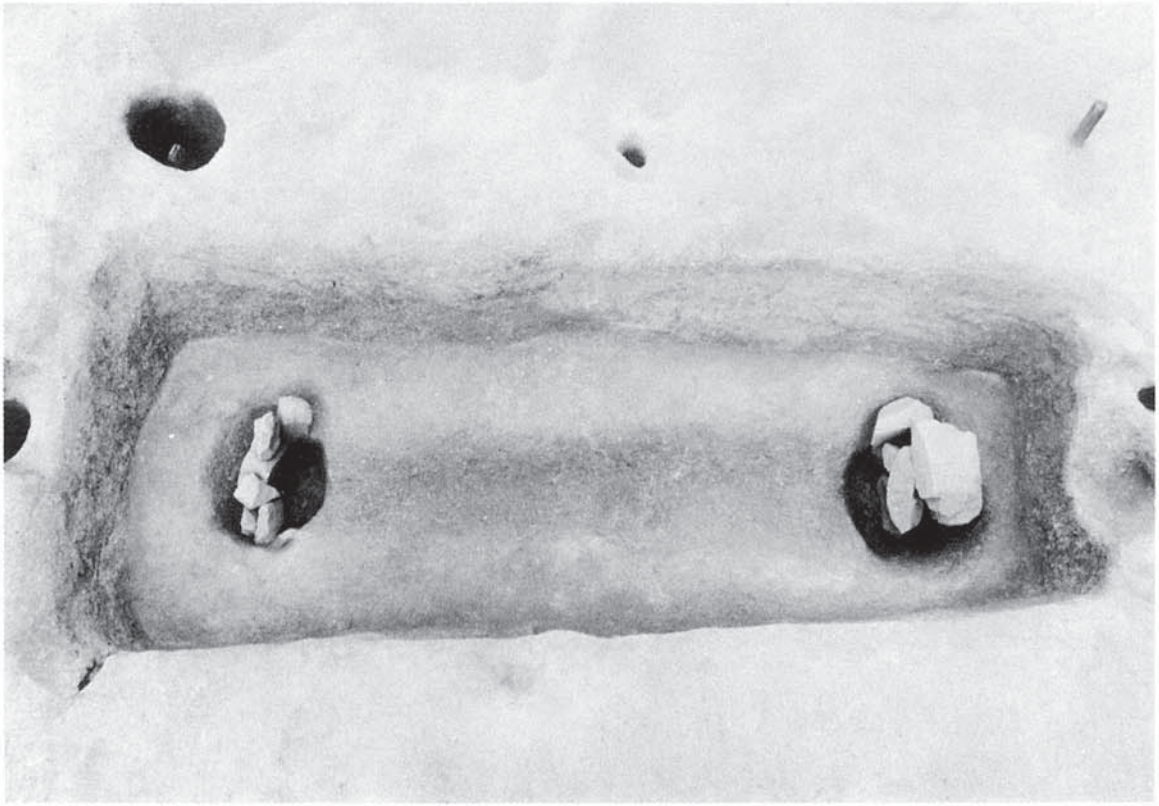


b. 池の内遺跡東側調査区（北東から，航空写真）

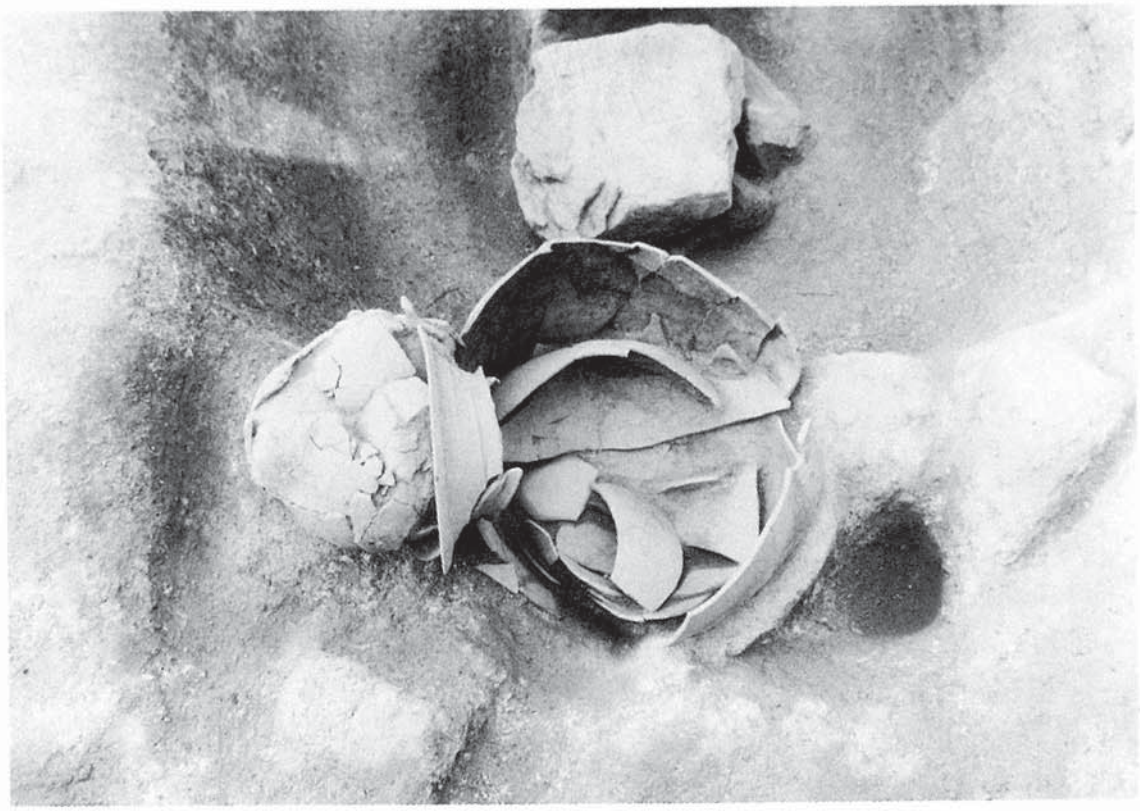
a. 第1号古墳（東から）

b. 同上内部主体

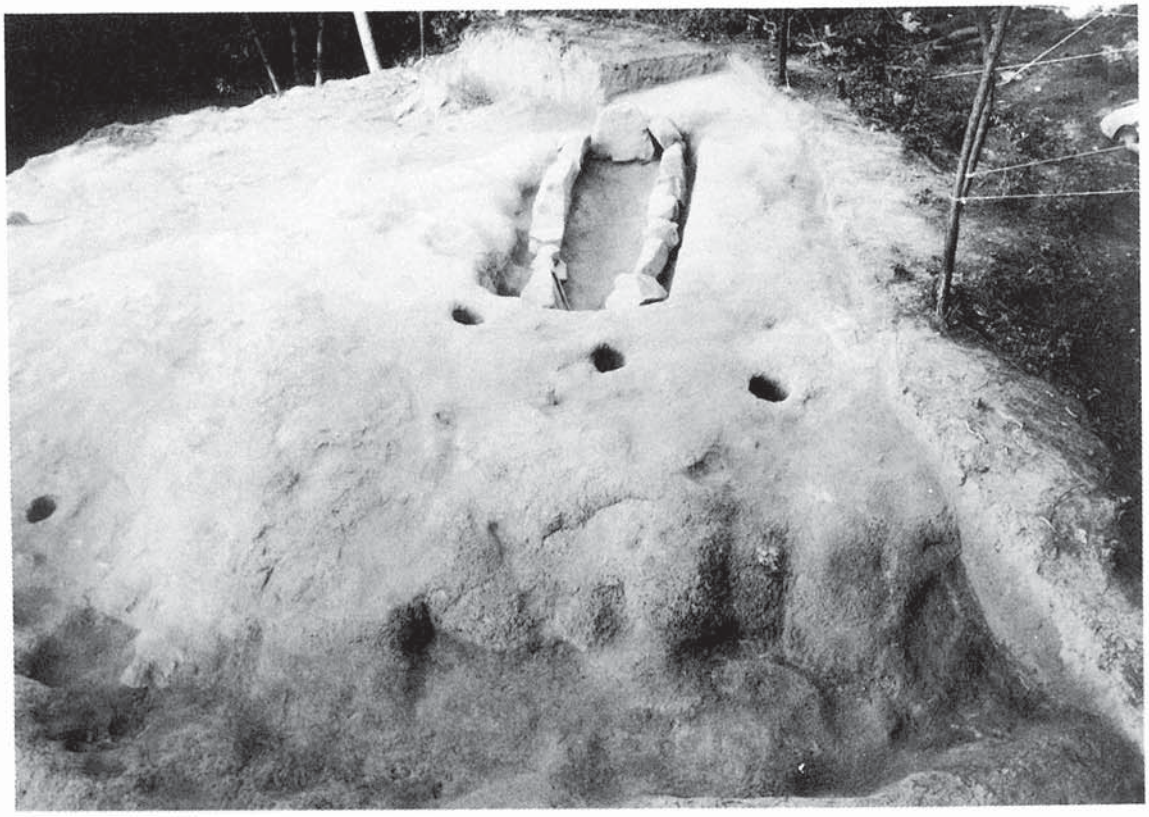
a. 第3号古墳（西から）



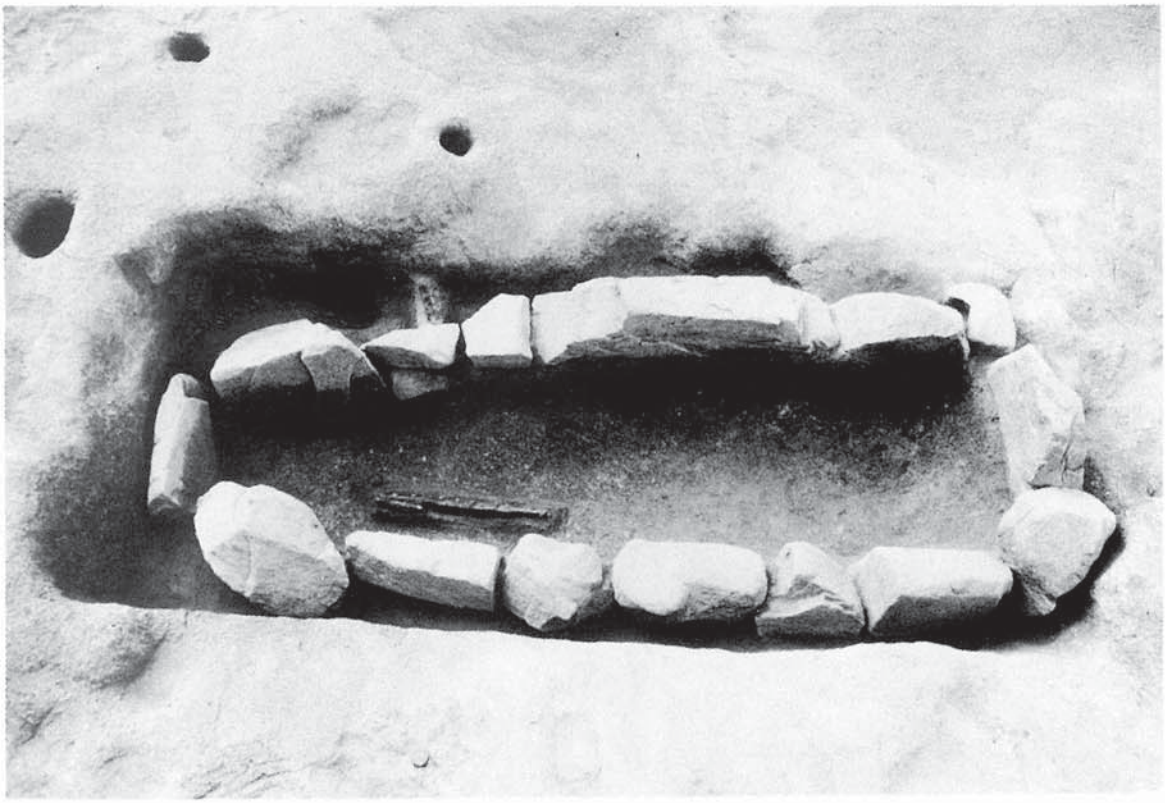
b. 同上A主体



a. 第3号古墳B主体



b. 第4号古墳（南西から）



a. 第 4 号古墳内部主体

b. 同上遺物出土状態

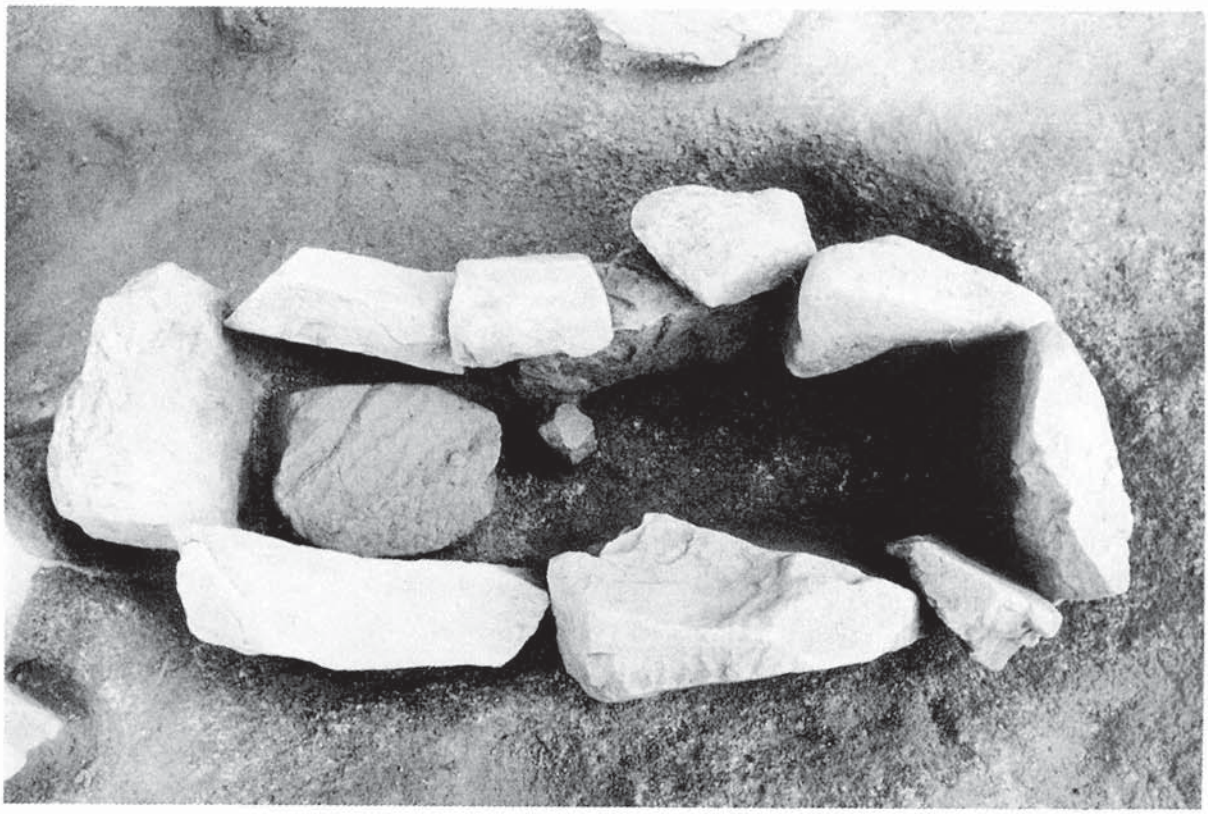
a. 第5号古墳（西から）

b. 同上内部主体

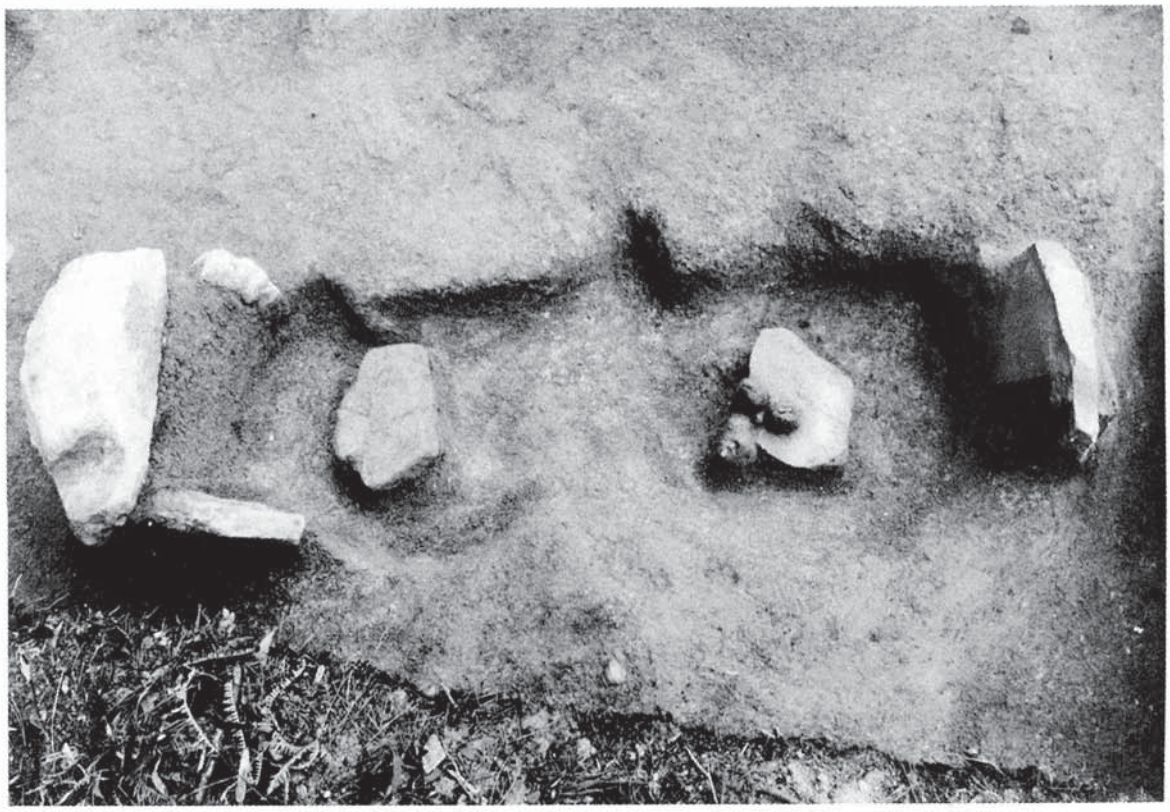
a. 第 1 号主体

b. 第 2 号主体，第 3 号主体周辺（西から）

a. 第2号主体

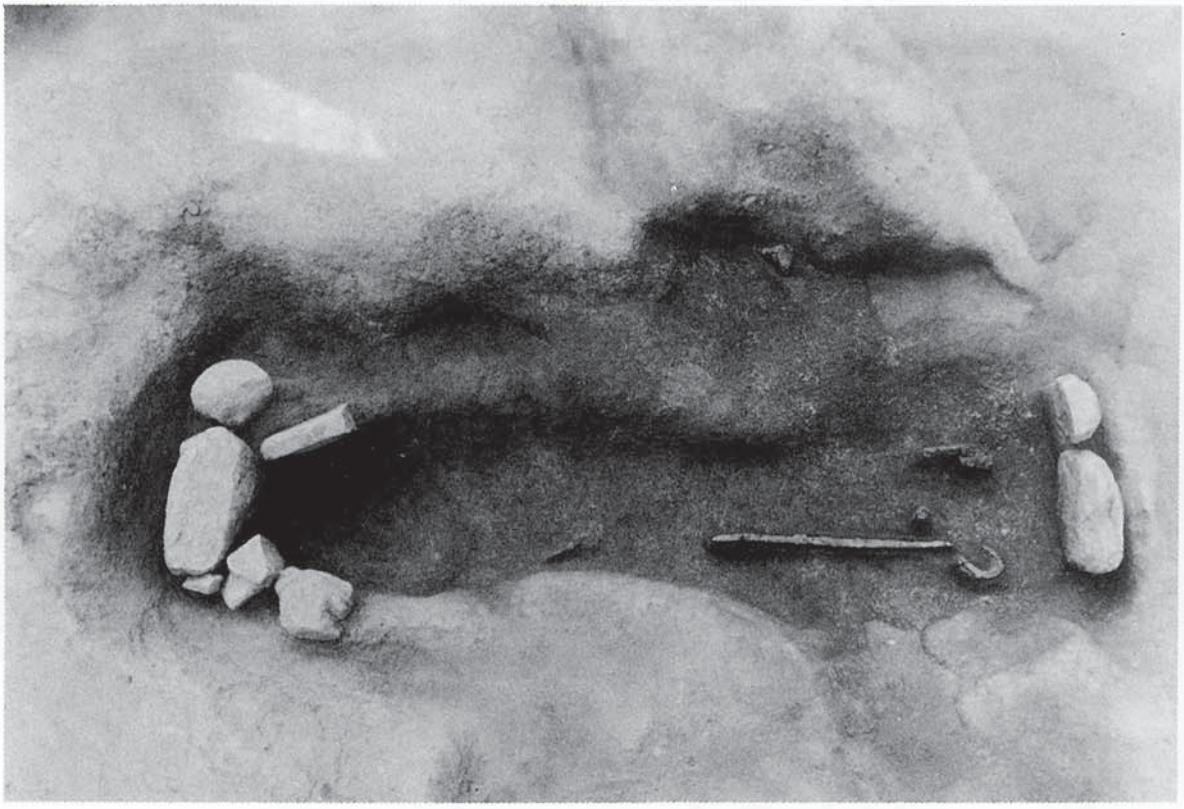


b. 同上（開棺後）

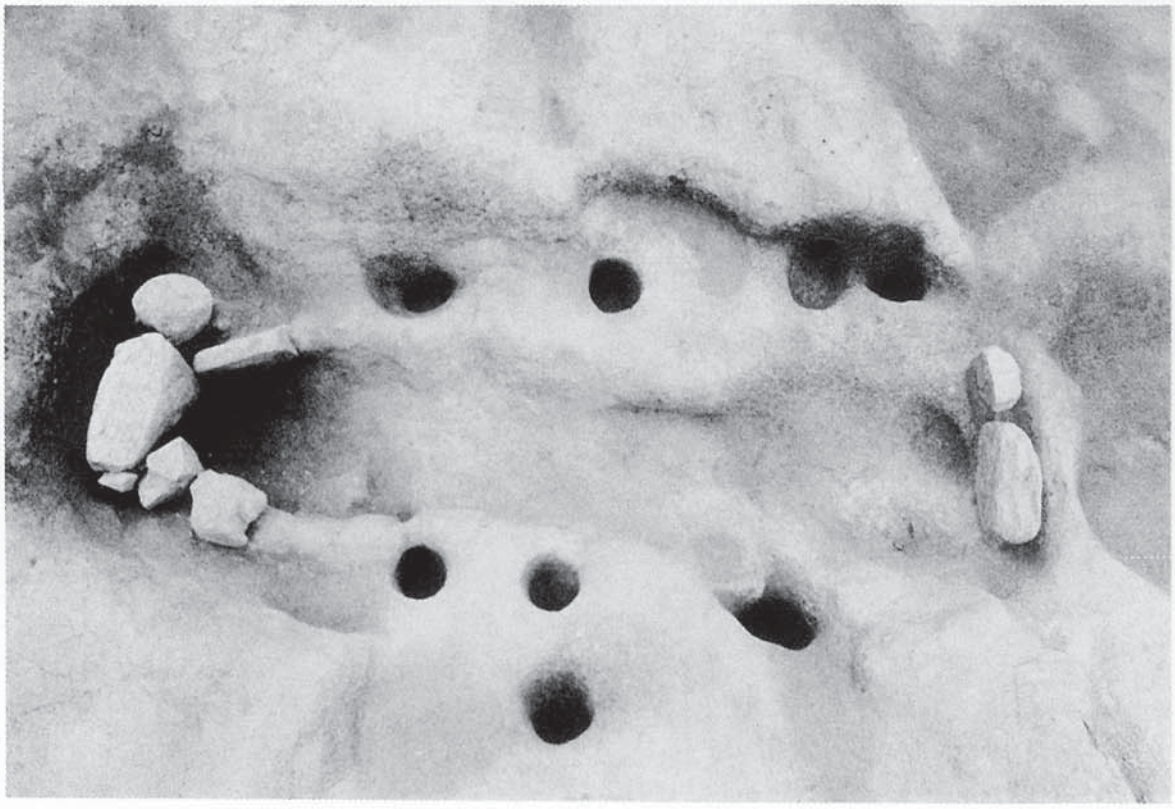


a. 第 3 号主体

b. 第 4 号主体



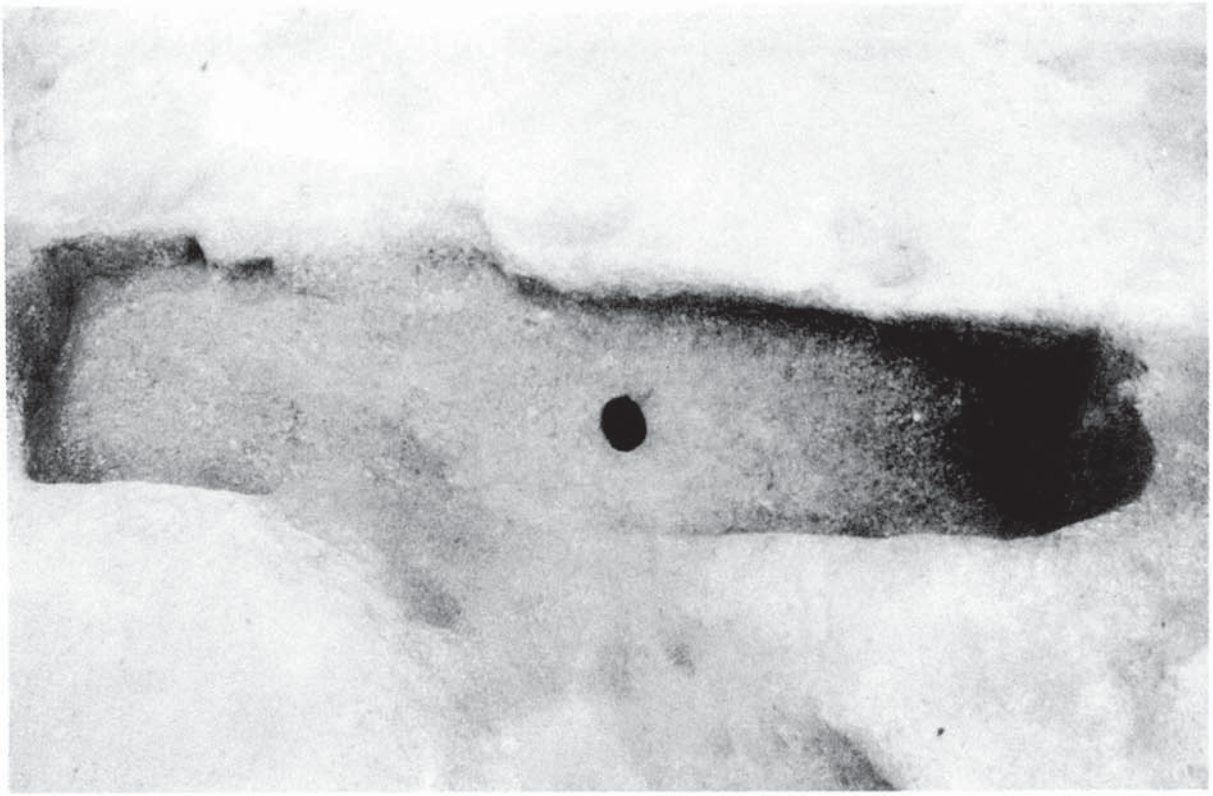
a. 第5号主体



b. 同上（完掘後）

a. 第 5 号主体遺物出土状態

b. 同上滑石製臼玉出土状態

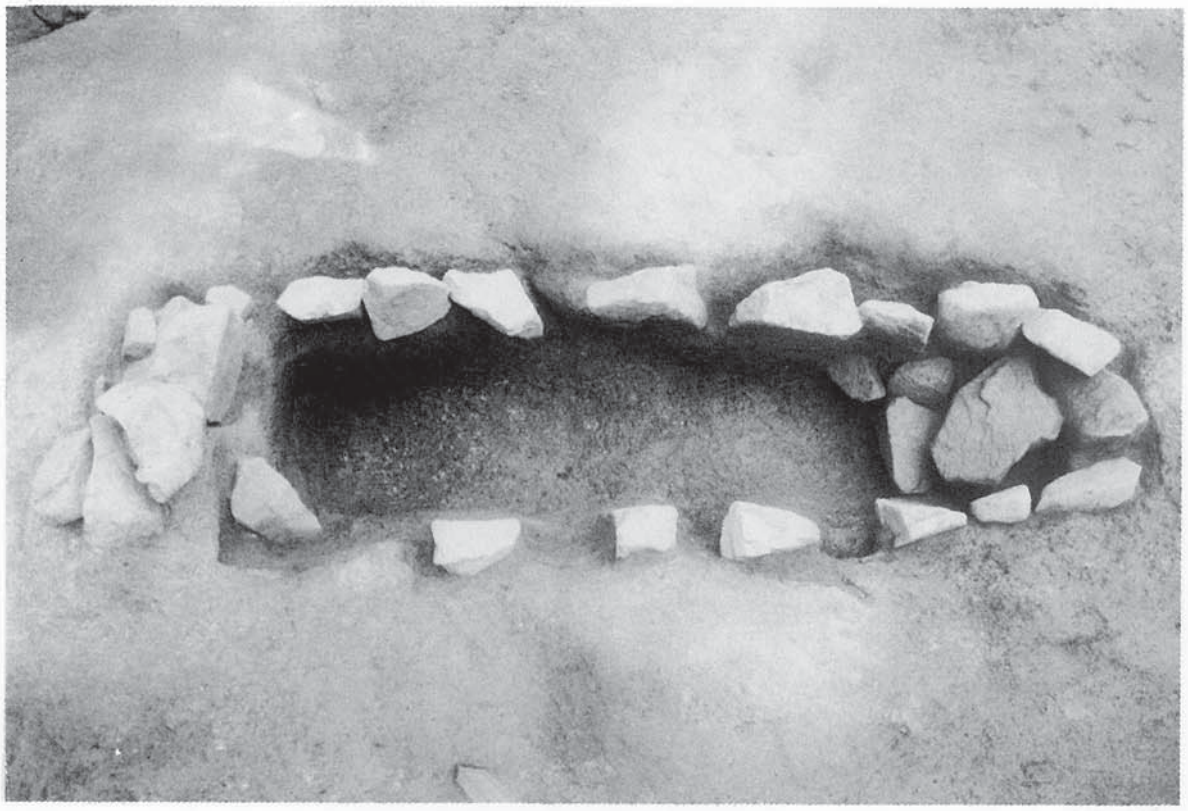


a. 第6号主体

b. 第7号主体

a. 第 8 号主体

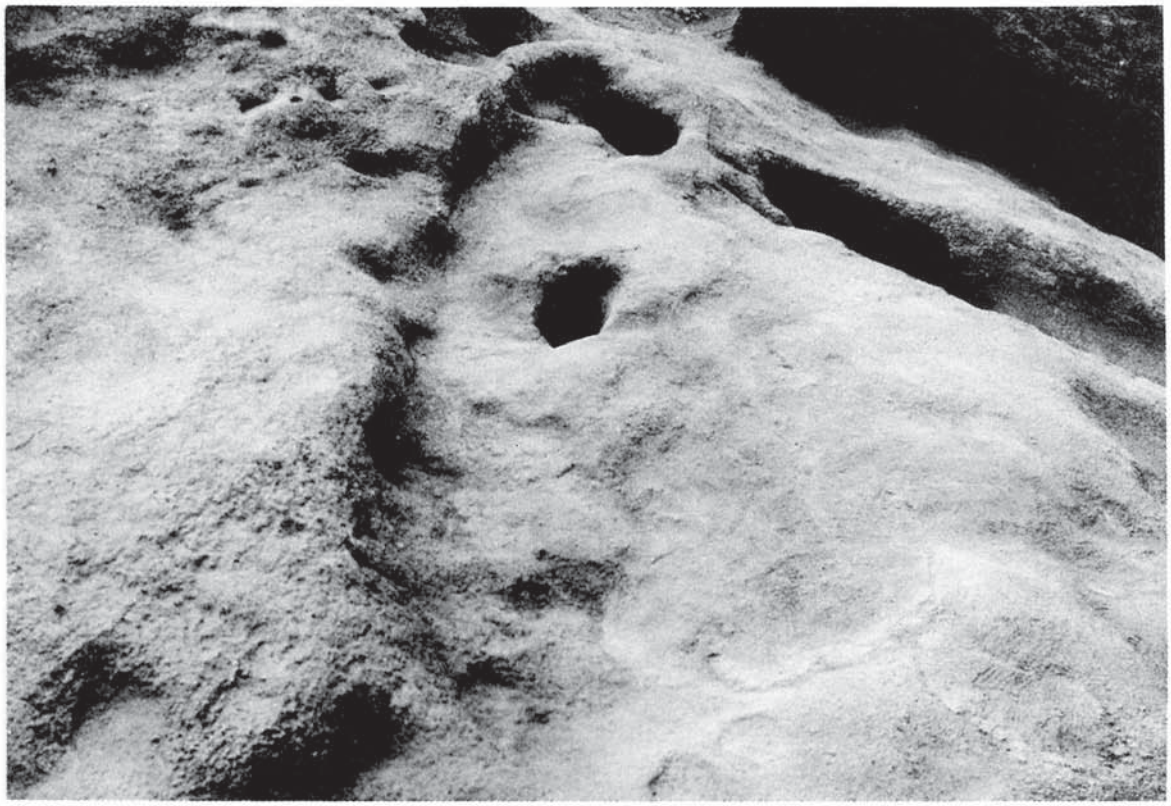
b. 第 9 号主体



a. 第10号主体

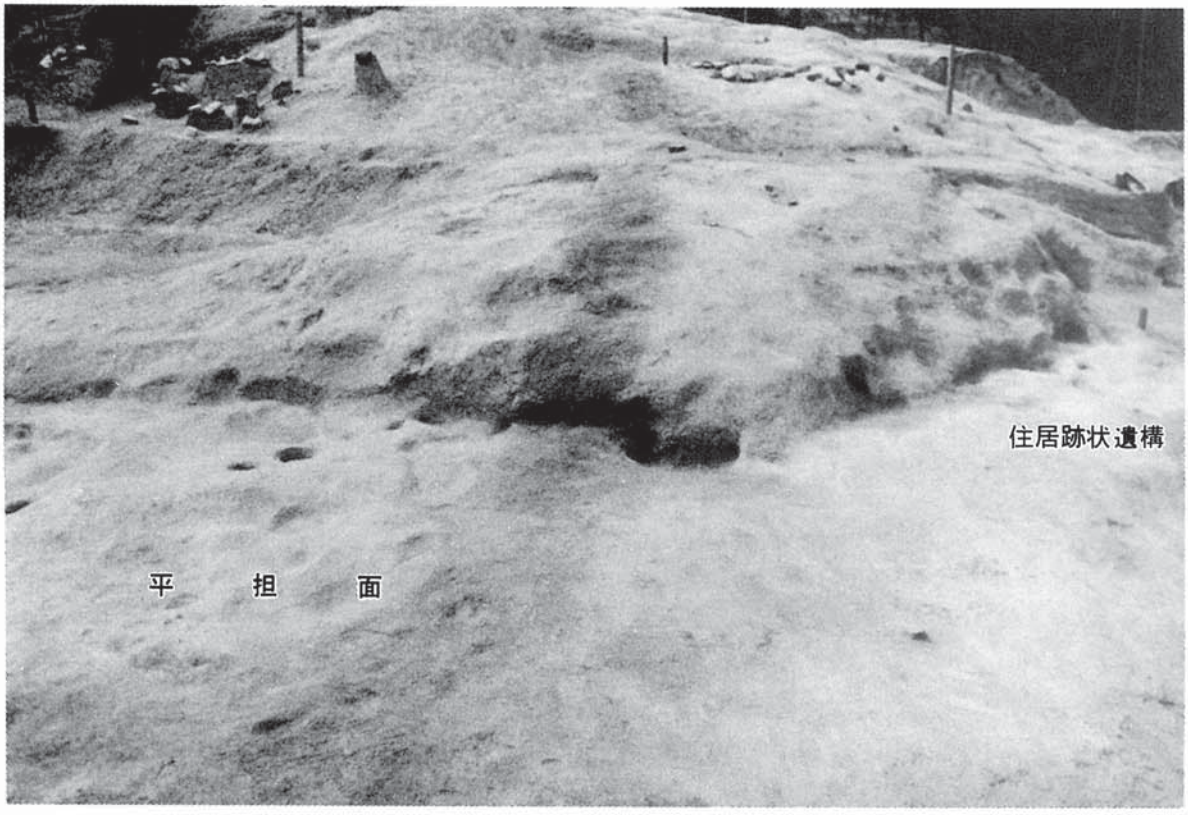
b. 第 2 号古墳全景（北東から，航空写真）

a. 竪穴式住居跡（東から）



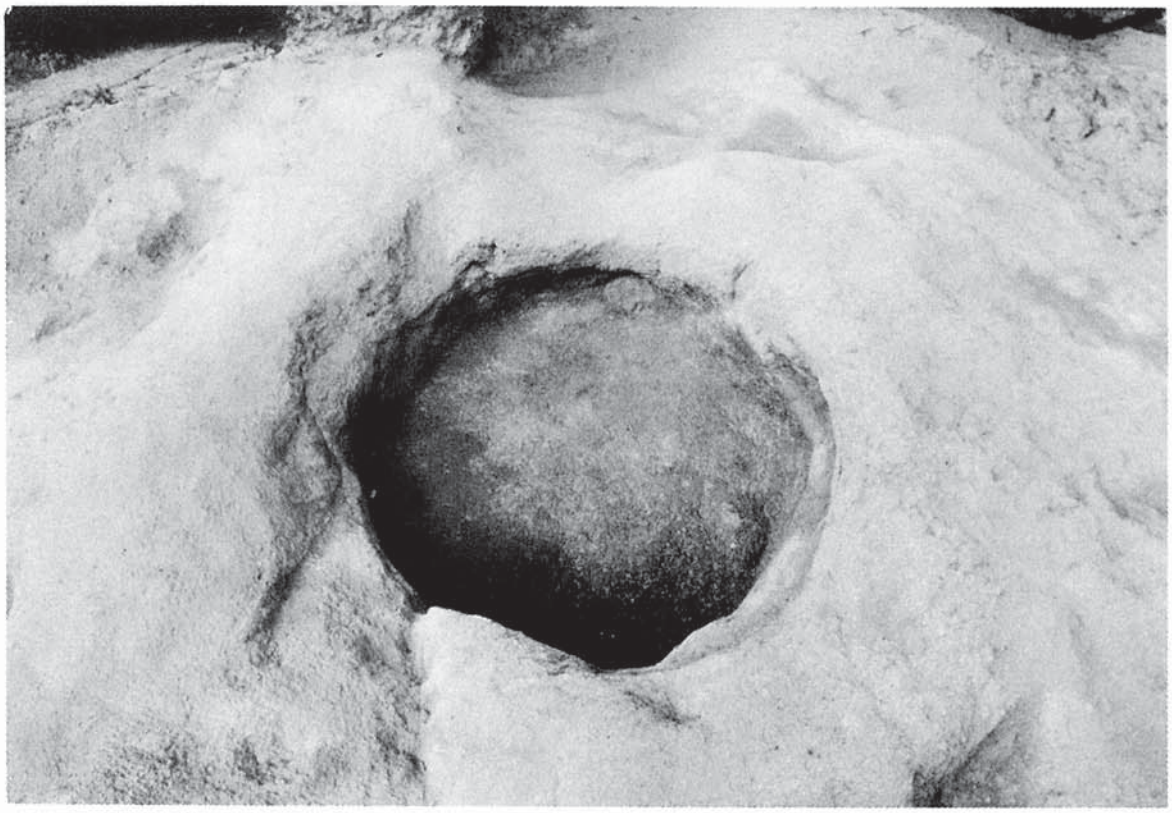
b. 第1号住居跡状遺構（南から）

a. 第2号住居跡状遺構（北西から）




b. 第2号住居跡状遺構及び南側平坦面（東から）

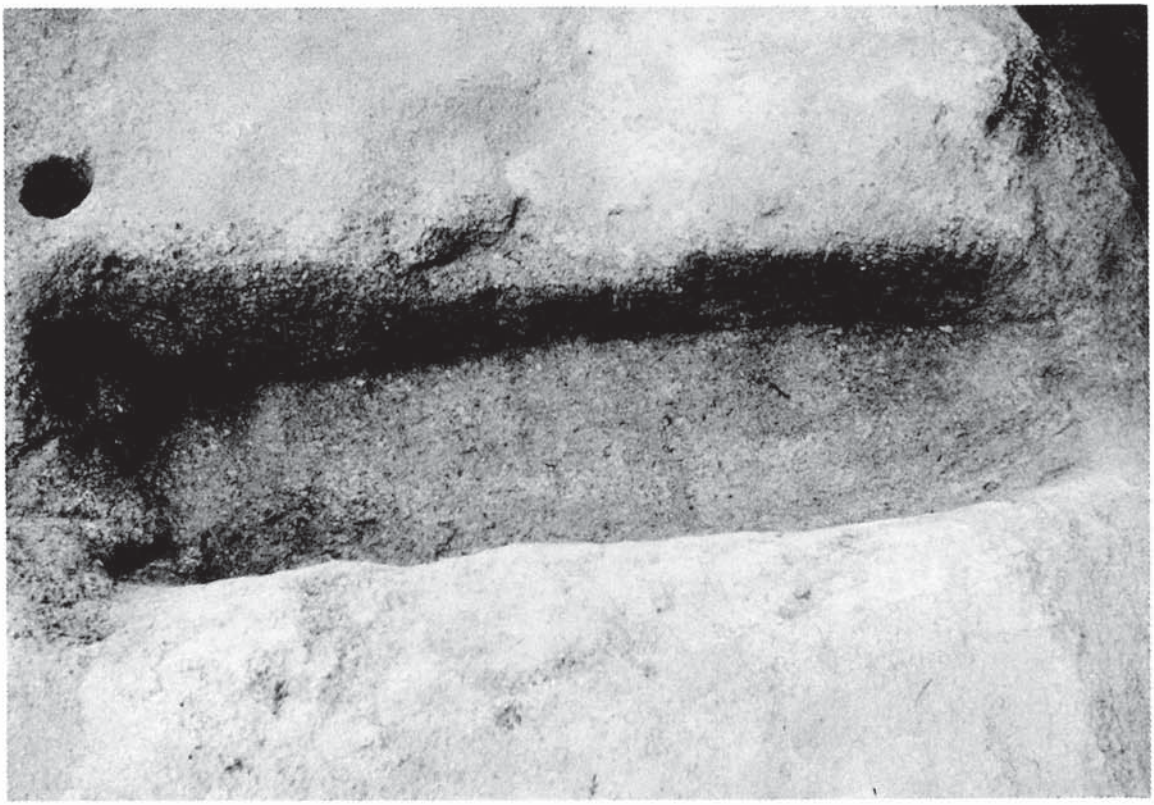
a. 第1号（右），第2号（左）土壙



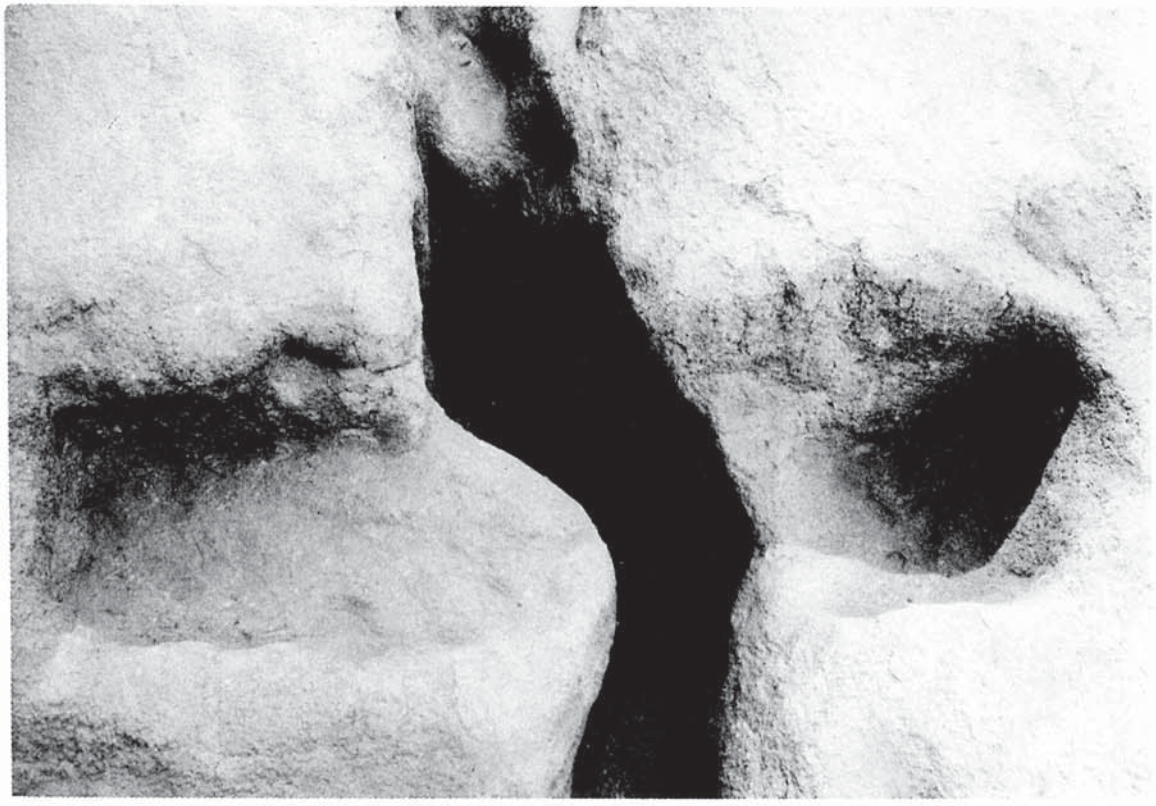
b. 第3号土壙

a. 第4号（右），第5号（左）土壙

b. 第4号土壙土器出土状態



a· 第6号土壙



b· 第7号土壙

a. 第8号土壙

b. 銅鏡出土状態

1

2

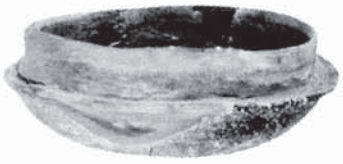
3

5

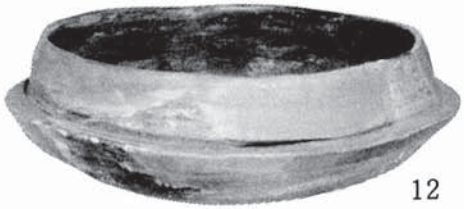
7

8

10


11

13


12

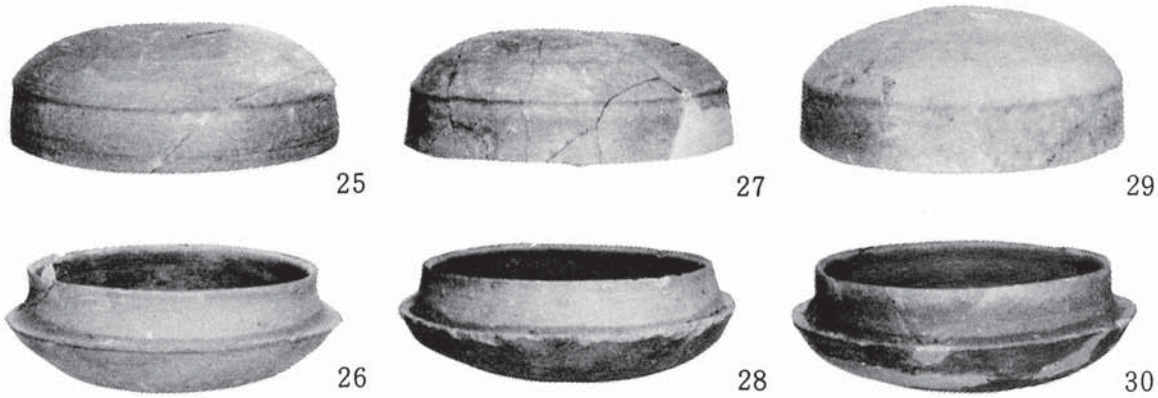
14

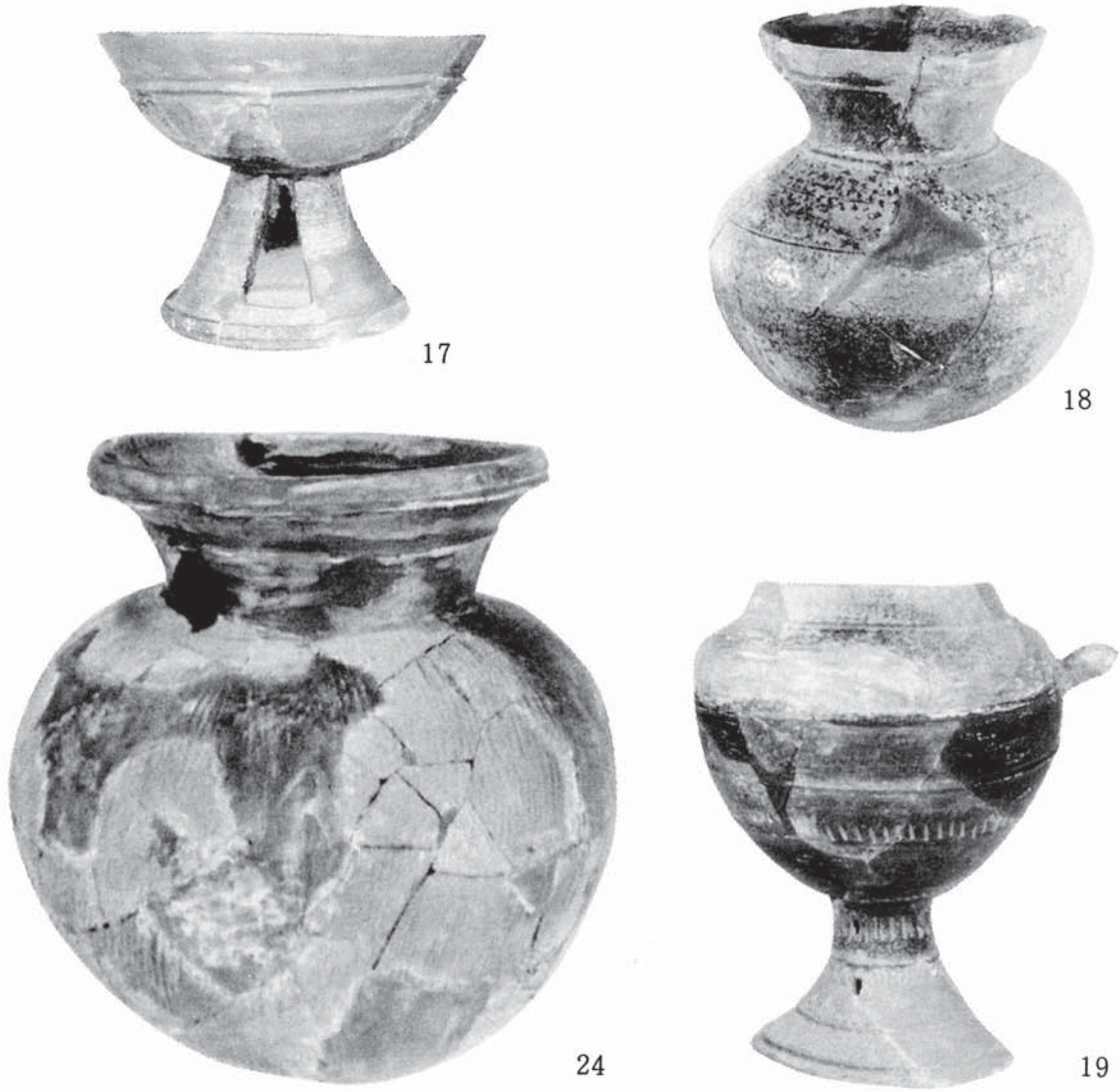
15

16

(1/3)

池の内遺跡出土須恵器(1)



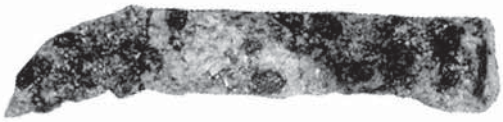




(1/3)

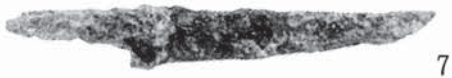
池の内遺跡出土須恵器(2)

(1/6)

池の内遺跡出土須恵器及び土師器


4

6


7

5

8

9

15

16

17

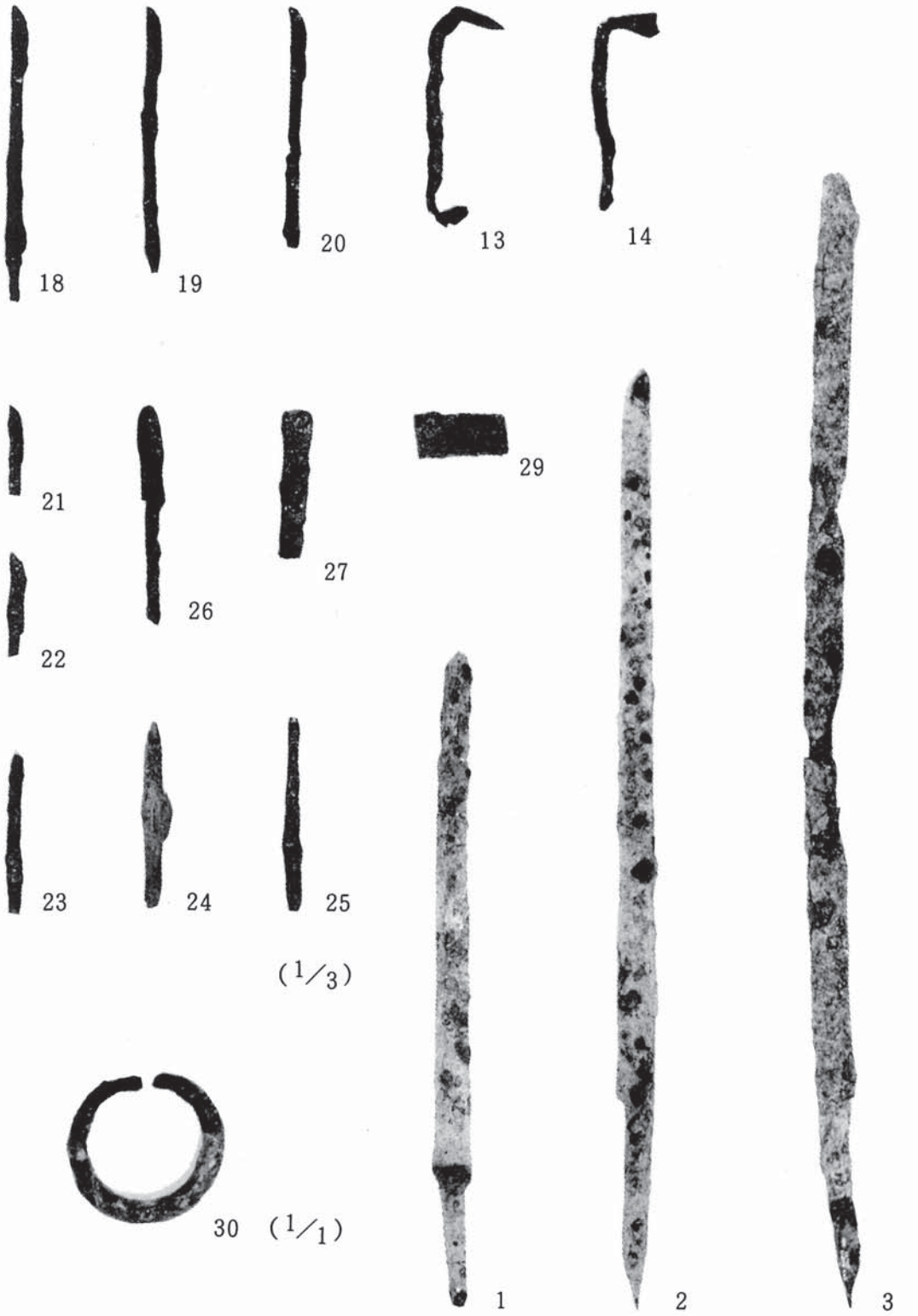
10

12

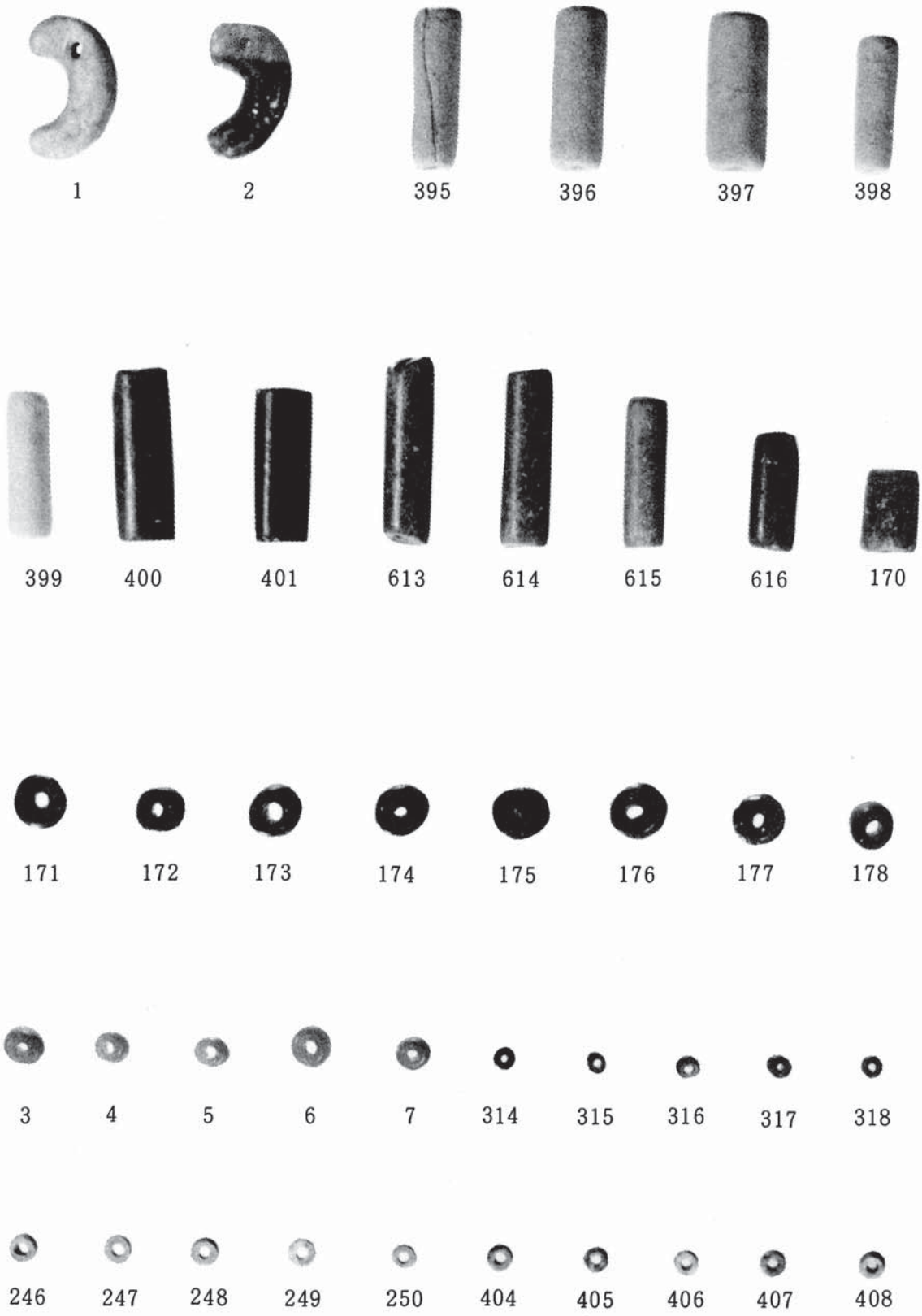
11

(1/3)

池の内遺跡出土鉄製品




池の内遺跡出土鉄製品及び耳環



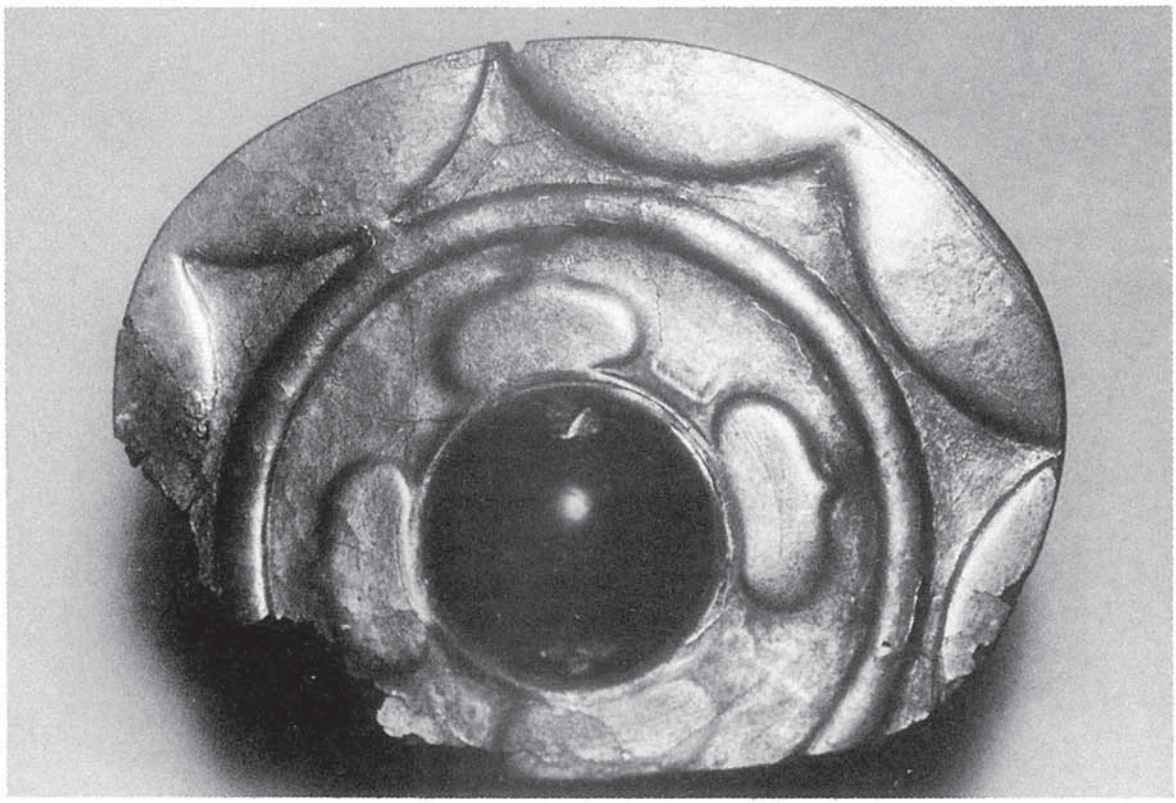

(1/1)

池の内遺跡出土玉類

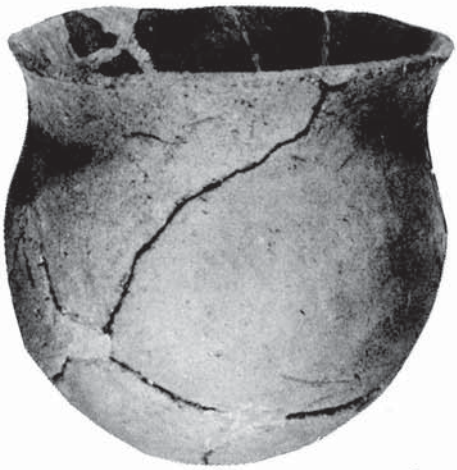
(1/3)

池の内遺跡出土弥生土器

a. 池の内遺跡出土銅鏡（実大）



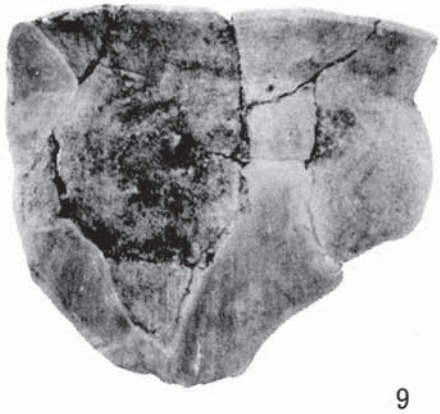
b. 同上（赤外線写真）



6

4

3



9

2

12

13

19

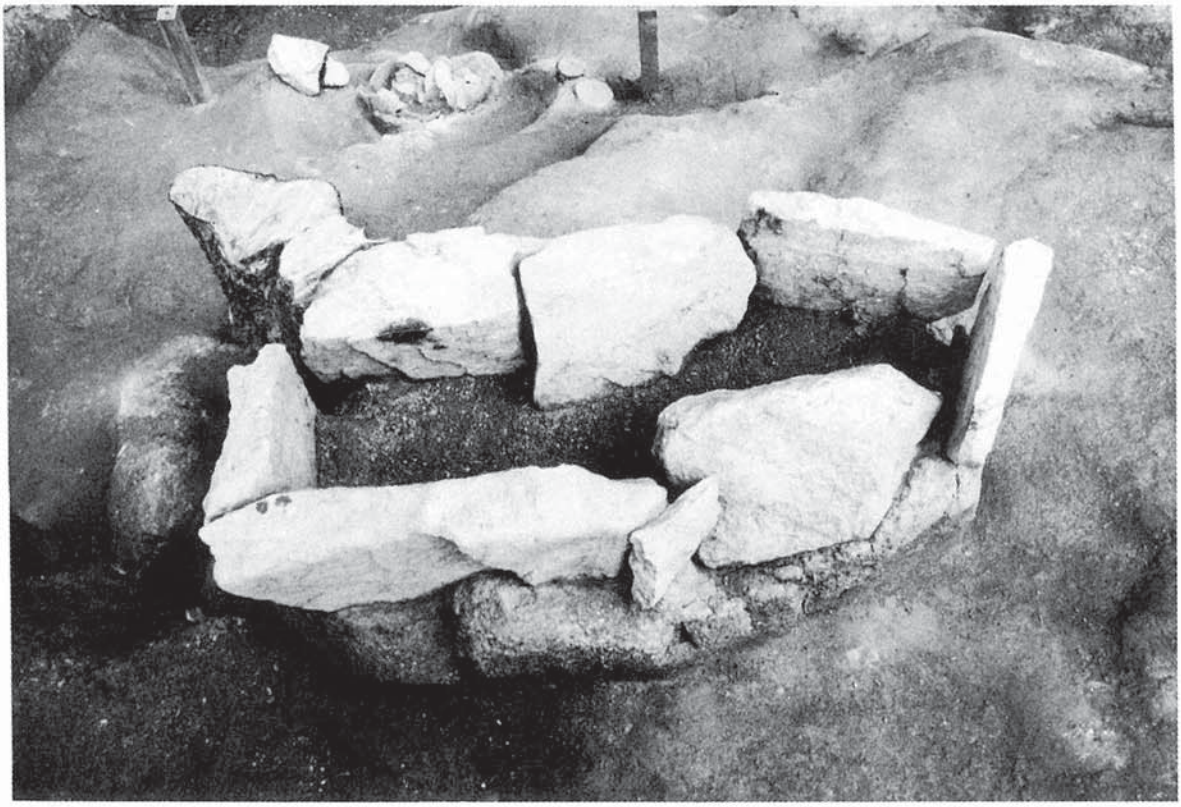
(1/3)

池の内遺跡出土弥生土器及び石斧

a. 亀岡遺跡遠景（北から）

b. 亀岡遺跡近景（南から，調査後）

a. 亀岡遺跡箱式石棺



b. 同上（開棺後）

a. 亀岡遺跡壷棺

b. 亀岡遺跡出土土器

| | |
|---|---|
| 登録番号 | 広×4-84-205(本文),広×4-84-206(図録) |
| 名　　称 | 広島市の文化財　第32集<br>広島市安佐南区祇園町所在<br>**池の内遺跡発掘調査報告** |
| 編集・発行 | 広島市教育委員会<br>(社会教育部管理課)<br>広島市中区国泰寺町一丁目4番21号<br>(〒730) TEL (082) 245-2111㈹ |
| 発行年月日 | 1985年3月 |
| 印　　刷 | 株式会社　共電社 |